博　多　26

―博多遺跡群第46次調査報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第281集

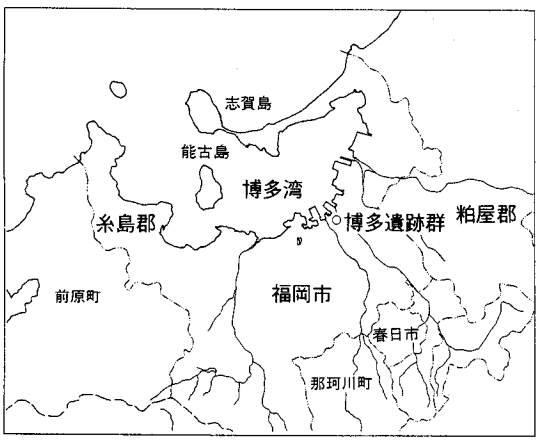
1992

福 岡 市 教 育 委 員 会

博　多　26

—博多遺跡群第46次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第281集



1992

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して朝鮮半島、大陸と向い合う位置にあり、市内には関連する多くの埋蔵文化財が分布しています。この中でも都心部にある博多遺跡群は中国、朝鮮との貿易で栄えた古代～中世都市の遺跡です。

また、この地域は都市部の再開発が進みつつある地域でもあります。本市ではとくに文化財の保護、活用に努めており、土木工事等に係る文化財については関係者のご理解とご協力を得て、保護対策と調整を進めているところです。

本書は1989年に実施いたしました博多遺跡群の第46次調査地点の発掘調査報告書です。この位置は現在の昭和通りの北側にあたり、博多遺跡群でも北部の「息の濱」に位置しています。調査の結果、12世紀以降の多くの遺構、遺物を検出し、重要な知見を得ることができました。

本書が学術研究ならびに文化財保護の啓発の一助となることを願います。

最後となりましたが、発掘調査に際しまして日刊工業新聞社をはじめとする関係各位のご協力に対して厚く感謝の意を表します。

また、調査に際しまして指導、助言をいただきました諸先生方にも厚くお礼を申し上げます。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会

教育長　井　口　雄　哉

例　　言

1．本書は博多区古門戸町１番地外の日刊工業新聞社による自社ビル建築に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1989年４月11日から1989年５月20日にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第46次調査の報告書である。
2．本書に使用した遺構実測図は、吉留秀敏、上方高弘、牟田裕二、池ノ上宏、石本恭司、大塚恵治、浜田学があたった。
3．本書に使用した遺物実測図は、亀井明徳、甲斐田嘉子、立山郁子、屋山洋、吉留秀敏があたった。
4．本書に使用した写真は遺構を吉留秀敏、遺物を亀井明徳が撮影した。
5．本書に使用した図面の製図は亀井明徳、吉留秀敏がおこなった。
6．本書に使用した方位は磁北である。
7．本書の土師器などの法量表記は、口径－底径－高さの順に略記した。
8．本書に掲載した遺物の実測図および写真の縮尺は原則として1/3とした。
9．本書の執筆は、出土遺物については亀井明徳が、その他の執筆と編集は吉留秀敏があたった。
10．本調査地点に関する記録や出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、活用していく。

遺跡調査番号	8902		遺　跡　略　号	ＨＫＴ－46	
調査地地籍	福岡市博多区古門戸町１		分布地図番号	048-Ａ-１	
開発面積	290㎡	調査対象面積	150㎡	調査面積	80㎡
調査期間	1989年４月1日～1989年５月20日				

本　文　目　次

第１章　はじめに
　　１）調査に至る経過…… 1
　　２）調査体制…… 1
第２章　遺跡の位置と環境
第３章　調査の概要
　　１）調査の方法…… 3
　　２）層位…… 3
　　３）遺構面の概要…… 5
第４章　調査の記録
　　１）検出した遺構…… 9
　　２）各層群の出土遺物……35
第５章　まとめ……60

挿　図　目　次

Fig. 1　調査地点遠景…… 1
Fig. 2　博多遺跡群の現地形と調査地点の位置…… 2
Fig. 3　周辺地形図（調査終了時）…… 3
Fig. 4　調査区東壁土層断面（西から）…… 4
Fig. 5　土層断面…… 4
Fig. 6　第１面全景（西から）…… 5
Fig. 7　第46次調査地点第１面遺構検出状況（縮尺１／80）…… 5
Fig. 8　第２面全景（南から）…… 6
Fig. 9　第46次調査地点第２面遺構検出状況（縮尺１／80）…… 6
Fig.10　第46次調査地点第３面遺構検出状況（縮尺１／80）…… 7
Fig.11　第３面全景（南から）…… 8
Fig.12　第46次調査地点第４面遺構検出状況（縮尺１／80）…… 8
Fig.13　SE13…… 9
Fig.14　SE15…… 9
Fig.15　SE13完掘状況（北から）……10
Fig.16　SE15完掘状況（北から）……10

Fig.17　井戸出土遺物 …… 11
Fig.18　SE13出土遺物 …… 12
Fig.19　SE15出土遺物 …… 12
Fig.20　SK03出土遺物　(1) …… 13
Fig.21　SK03出土遺物　(2) …… 14
Fig.22　SK03出土遺物　(3) …… 15
Fig.23　SK04 …… 16
Fig.24　SK04出土遺物 …… 17
Fig.25　SK05 …… 17
Fig.26　SK05出土遺物　(1) …… 17
Fig.27　SK05出土遺物　(2) …… 18
Fig.28　SK07出土遺物 …… 18
Fig.29　SK08 …… 19
Fig.30　SK11 …… 19
Fig.31　SK11出土遺物 …… 20
Fig.32　SK07、09、10、11出土遺物 …… 21
Fig.33　SK16 …… 21
Fig.34　SK16出土遺物 …… 22
Fig.35　SK17 …… 22
Fig.36　SK18出土遺物 …… 23
Fig.37　SK22検出状態 …… 23
Fig.38　SK22 …… 23
Fig.39　SK22出土遺物 …… 24
Fig.40　SK23出土遺物 …… 25
Fig.41　SK25 a 出土遺物 …… 25
Fig.42　SK25 a …… 25
Fig.43　SK27 …… 26
Fig.44　SK27出土遺物 …… 26
Fig.45　SK27出土遺物 …… 26
Fig.46　SD06出土遺物 …… 26
Fig.47　SD06出土遺物 …… 26
Fig.48　土壙出土遺物 …… 27
Fig.49　各柱穴出土遺物　(1) …… 29

Fig.50　各柱穴出土遺物　(2)……30
Fig.51　各柱穴出土遺物　(3)……32
Fig.52　各柱穴出土遺物　(4)……33
Fig.53　各柱穴出土遺物　(5)……34
Fig.54　表面採集／第１層群出土遺物……34
Fig.55　表面採集遺物……35
Fig.56　第１層群出土遺物……35
Fig.57　第２層群出土遺物　(1)……36
Fig.58　第２層群出土遺物　(2)……38
Fig.59　第２層群出土遺物　(3)……39
Fig.60　第２層群出土遺物　(4)……40
Fig.61　第２層群出土遺物　(5)……41
Fig.62　第３層群出土遺物　(1)……43
Fig.63　第３層群出土遺物　(2)……44
Fig.64　第３層群出土遺物　(3)……45
Fig.65　第３層群出土遺物　(4)……46
Fig.66　第３層群南側／同中心杭付近出土遺物……46
Fig.67　第３層群出土遺物　(5)……47
Fig.68　第４層群出土遺物　(1)……48
Fig.69　第４層群出土遺物　(2)……49
Fig.70　第４層群出土遺物　(3)……50
Fig.71　第５層群上部（５ａ～５ｉ層）出土遺物……51
Fig.72　第５層群上部（５ａ～５ｉ層）出土遺物……52
Fig.73　第５層群出土遺物　(1)……53
Fig.74　第５層群出土遺物　(2)……55
Fig.75　第５層群出土遺物　(3)……56
Fig.76　第５層群出土遺物　(4)……57
Fig.77　第５層群下部（５ｊ～５ｍ層）／東側壁第５層群出土遺物……58
Fig.78　第５層群下部（５ｊ～５ｍ層）出土遺物……59
Fig.79　東側壁第５層群出土遺物……59

表　目　次

Tab. 1　井戸 SE15出土土師器計測表
Tab. 2　土壙 SK07出土土師器計測表
Tab. 3　土壙 SK17出土土師器計測表
Tab. 4　土壙 SK18出土土師器計測表
Tab. 5　柱穴 SP15出土土師器計測表
Tab. 6　柱穴 SP20出土土師器計測表
Tab. 7　柱穴 SP61出土土師器計測表
Tab. 8　柱穴 SP85出土土師器計測表
Tab. 9　柱穴 SP98出土土師器計測表
Tab.10　柱穴 SP107出土土師器計測表
Tab.11　柱穴 SP112出土土師器計測表
Tab.12　柱穴 SP158出土土師器計測表
Tab.13　第２層群の出土土師器皿計測表

第１章　はじめに

１）調査に至る経過

博多区古門戸町１番地外の昭和通りと土居通りの交差点に面する角地に、日刊工業新聞社の福岡支店ビルの建築が計画された。この地点は博多遺跡群の北西側に位置していたが、正式な発掘調査をまだ実施していない地域であった。埋蔵文化財課では日刊工業新聞社の依頼を受け、1988年４月19日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、現地表下1.3～2.8ｍの範囲に３～４面の中世の遺構面と遺物包含層を確認した。この結果にもとずいて両者は保存策についての協議を重ね、最終的に発掘調査を実施することになった。

２）調査体制

発掘調査にあたって以下の組織を編成した。緊急調査のために十分な体制を設けることはできなかったが、日刊工業新聞社をはじめとする関係各位の協力をうけた。

調　査　主　体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課第２係
教育長　井口雄哉　　文化財部長　花田兎一
埋蔵文化財課長　折尾学　第２係長　柳沢一男（現宮崎大学教育学部）

調　査　担　当　吉留秀敏　遺物整理　亀井明徳（専修大学）

試掘調査担当　横山邦継　常松幹雄

事　務　担　当　松延好文

調査補助員　上方高弘　牟田裕二（現佐賀市教育委員会）池ノ上宏（現津屋崎町教育委員会）

調査、整理協力者　石本恭司　大塚恵治（福岡大学）浜田学（別府大学）屋山洋（日本大学）石田晴美　井出かすみ　犬丸陽子　尾崎君江　甲斐田嘉子　坂井昭美　品川伊津子　立山郁子　平野徳子　藤野洋子　星子輝美　宮坂環　山口朱美　山崎美枝子　吉野佳子

Fig.1　調査地点遠景

第２章　遺跡の位置と環境

福岡平野を北流して博多湾に注ぐ那珂川、御笠（石堂）川は河口付近に三角州を形成した。また、玄界灘からの海流はこうした海岸線を浸食、再堆積し、幾重もの砂丘を形成した。博多遺跡群はこの二つの河川に挟まれた砂州上に立地している。この砂州は標高約６ｍを最高所とし、起伏の多い地形をなしている。中世にはこうした自然地形のうち、砂州の中央にある低地を界して海側を「息の浜」、陸側を「博多浜（櫛田浜）」と呼んでいたようである。

博多遺跡群はこうした砂州上に立地している。遺跡の形成は遅くとも弥生時代中期前半に始まり、甕棺墓群や住居跡などが確認されている。古墳時代前期にも墳墓、集落がみられるがここでは近畿系土器群が主体を占めている。同中期には福岡平野で最大級の前方後円墳が築造される。古代前期には官衙的施設が造営され、この時期までは主に「博多浜」に遺構が集中する。古代後期以降は「息の浜」にも遺跡が拡がり、遺構の密集、遺物の爆発的増加などがみられる。出土遺物などから中国、朝鮮を通じた貿易の拠点として発展したことが伺える。

本調査地点は「息の浜」の中央西寄りに位置し、博多湾に直接面する傾斜地になる。

Fig.2　博多遺跡群の現地形と調査地点の位置

第３章　調査の概要

１）調査の方法

本調査地点は南側を昭和通り、東側を土居通りに面する角地であり、一辺約17ｍのほぼ正方形の範囲である（Fig. ３）。調査前には建物があり、その撤去後の調査であった。なお、昭和通りに面する側は地下室が設けてあり、遺構面は標高3.0ｍまでは破壊されていた。調査は工法の問題で矢板等の設置ができず、四面共に法面を設け調査を実施した。そのために調査範囲は極めて限られたものとなった。調査は試掘トレンチを再掘し、土層堆積を基本として遺構面を検出し、４面を確認した。ちなみに本調査区の地表の標高は約4.8ｍであり、第１面は２層群上面で標高3.45～3.55ｍ、第２面は３層群上面で標高3.1～3.2ｍ、第３面は４層群上面で標高2.8～2.7ｍ、第４面は５層群上面で標高2.1～2.5ｍを測る。

２）層位

本調査区では北壁と東壁で土層図を作成した（Fig. ５）。第１層群は1.3～1.4ｍの層厚があり、黒灰色砂質土を主とする造成土である。上半部に２枚の焼土層がある。これらは中世末～近世の堆積とみられる。第２層群は0.2～0.6ｍの層厚があり、茶褐色砂

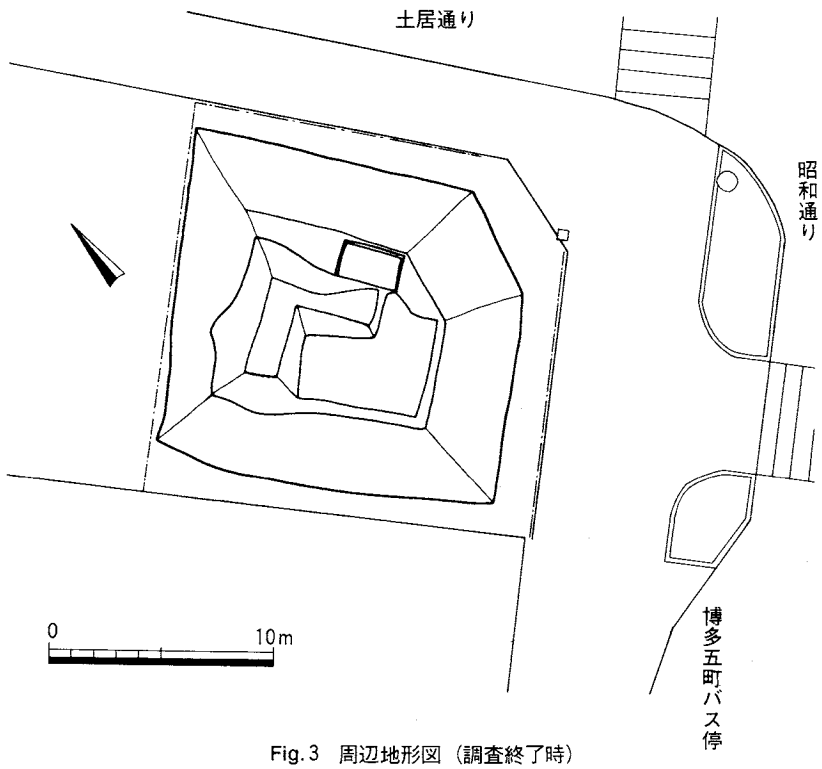
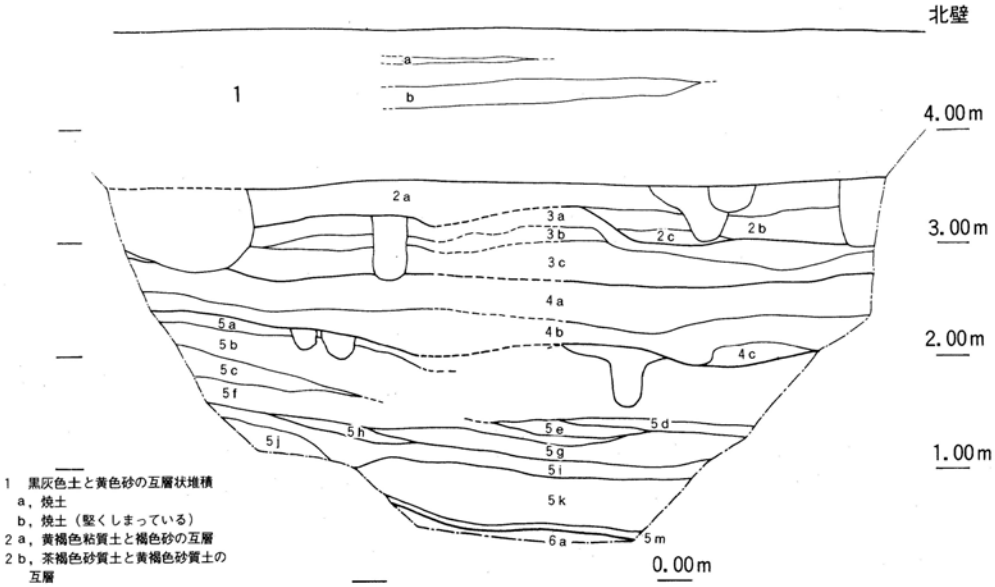


Fig.３　周辺地形図（調査終了時）

質土を主とする。調査区内北側隅に向って厚さを増す。第３層群は0.3～0.6ｍの層厚があり、黒褐色砂質土と砂の互層である。第４層群は0.4～1.1ｍの層厚があり、調査区北側隅に厚くなる。暗褐色砂からなる。第５層群は黄色砂と暗色砂の互層である。1.1～1.7ｍの層厚があり全体に北側に傾斜する。第６層群は黄色粗砂であり、層理が見られる。

Fig. 4　調査区東壁土層断面(西から)



1　黒灰色土と黄色砂の互層状堆積
　a，焼土
　b，焼土（堅くしまっている）
2 a，黄褐色粘質土と褐色砂の互層
2 b，茶褐色砂質土と黄褐色砂質土の互層
2 c，白色砂
3 a，黒色粘質土と暗灰色砂の互層
3 b，黄色砂
3 c，茶褐色砂質土と黄褐色砂の互層
4 a，茶褐色砂
4 b，黒灰色砂（青白磁、炭化物多く含む）
4 c，暗黄灰色砂
5 a，暗黄灰色砂
5 b，黄灰色砂（遺物微量含む）
5 c，暗灰色砂
5 d，暗灰色砂（遺物多く含む）
5 e，暗灰色砂
5 f，黄灰色砂
5 g，黄灰色砂
5 h，暗黄灰色砂
5 i，暗灰色砂（遺物多く含む）
5 j，褐色砂（鉄分が沈着し、堅い）
5 k，白色砂と灰色粗砂の互層（白磁、瓦片、炭化物を多く含む）
5 l，黄褐色砂
5 m，茶褐色粘質土（炭化物、木片、瓦片などを含む）
6 a，灰色粗砂（炭化物、白磁、瓦片などを含む）
6 b，黄褐色粗砂

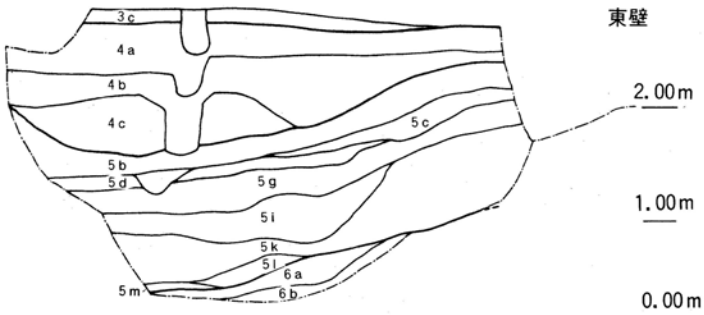


Fig. 5　土層断面

3）遺構面の概要

(1) 第１面（Fig. 6，7）

第２層群上面において検出した遺構群であり、井戸１基、土壙４基、柱穴26を確認した。他に柱の根石とみられる偏平な石が数個検出できた。井戸 SE01、土壙 SK02は近世のもので、調査区南端に近接している。土壙 SK03～05は中世のもので、調査区北西側に分布する。SK03は調査区北端にある。検出時には溝状の遺構と誤認し、土壙東側を掘り過ぎてしまった。この遺構は調査区壁にかかっているために全体の規模は不明であるが、埋土中から多くの遺物を出土した。柱穴は主に調査区西側に集中して検出

Fig. 6　第1面全景（西から）

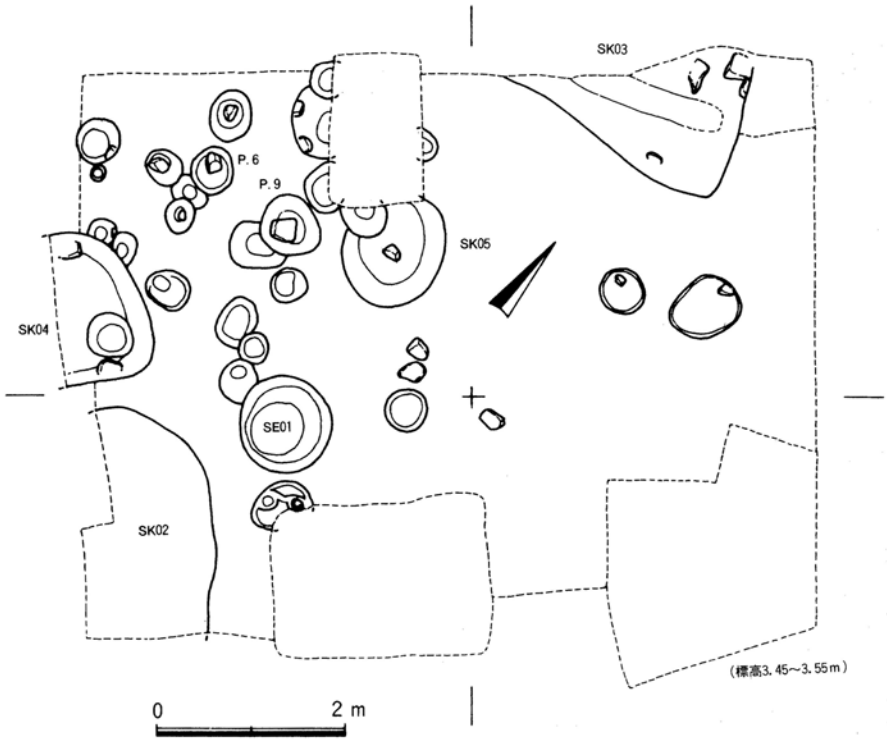


Fig. 7　第46次調査地点第1面遺構検出状況（縮尺1/80）

した。調査区が狭いために建物の規模、構造などを明らかにすることはできなかった。柱穴内に根石を持つ例もある。遺構や上部の埋土から多くの遺物が出土した。出土遺物は14世紀後半から15世紀代のものが多い。

(2) 第2面 (Fig. 8, 9)

第3層群上面において検出した遺構群であり、溝状遺構1条、柱穴38を確認した。溝条遺構 SD06は2層群掘り下げ中にプランを確認したが、本遺構面を精査中に不明瞭となってしまったものであり、土色の差異を誤認したものか、あるいは第1面での見落した遺構かも知れない。N-18°-W の方位をもつ幅0.7～0.8mのプランであった。柱穴は調査区中央から西側にかけて多く検出した。おおよそ半数の柱穴に根石が認められた。

Fig. 8　第2面全景(南から)

こうした状態は建物の構造によるものか、本地点の基礎が軟質の砂層からなるためか、明らかでないが、注意しておきたい。遺構内や上部の埋土からの遺物は比較的少ないが、その時期は14世紀前半代に集中する。

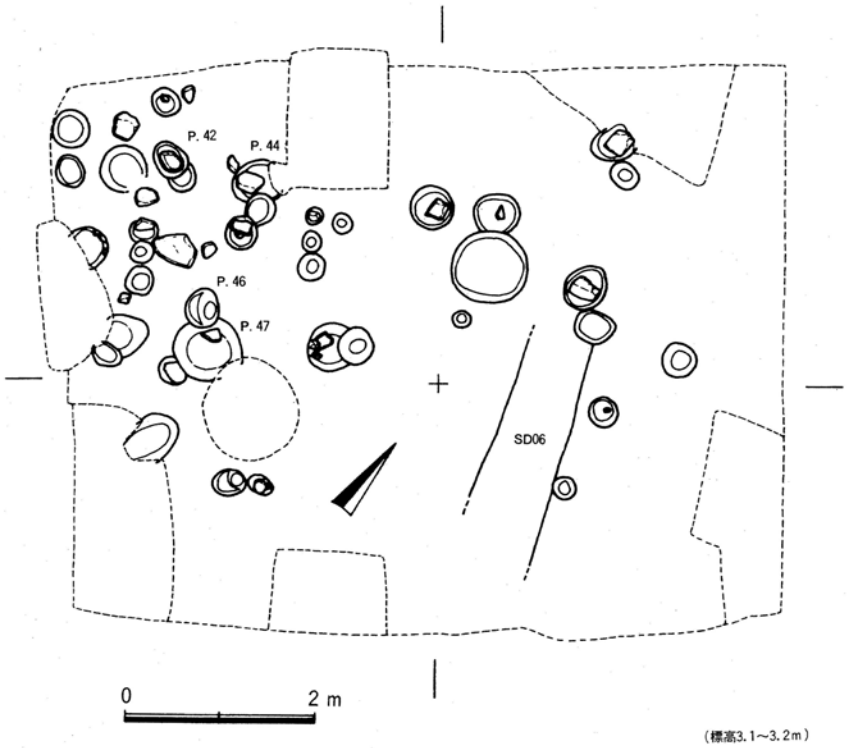


Fig. 9　第46次調査地点第2面遺構検出状況(縮尺1/80)

(3) 第3面 (Fig. 10,11)

第4層群上面において検出した遺構群であり、井戸4基、土壙8基、柱穴60を確認した。井戸SE13は掘方が大きく、深く、井筒を使用している。それに対してSE10、12、15は掘方が小さく、浅く、井筒は遺存しない。土壙はプランが楕円形を呈し、規模の大きいもの(SK11、16)、不整形を呈し規模の大きいもの(SK25)、ほぼ円形を呈し、規模の小さいもの(SK07～09、14、17)がある。柱穴は調査区北半に分布し、根石をもつものが多いが、建物の復元はできなかった。なお、柱穴の分布においておおよそ南北と東西方向に柱筋を揃えるものがあり、建物の向きを反映している可能性がある。遺構内からは多くの遺物を出土した。それらは13世紀から14世紀にかけてのものが多い。

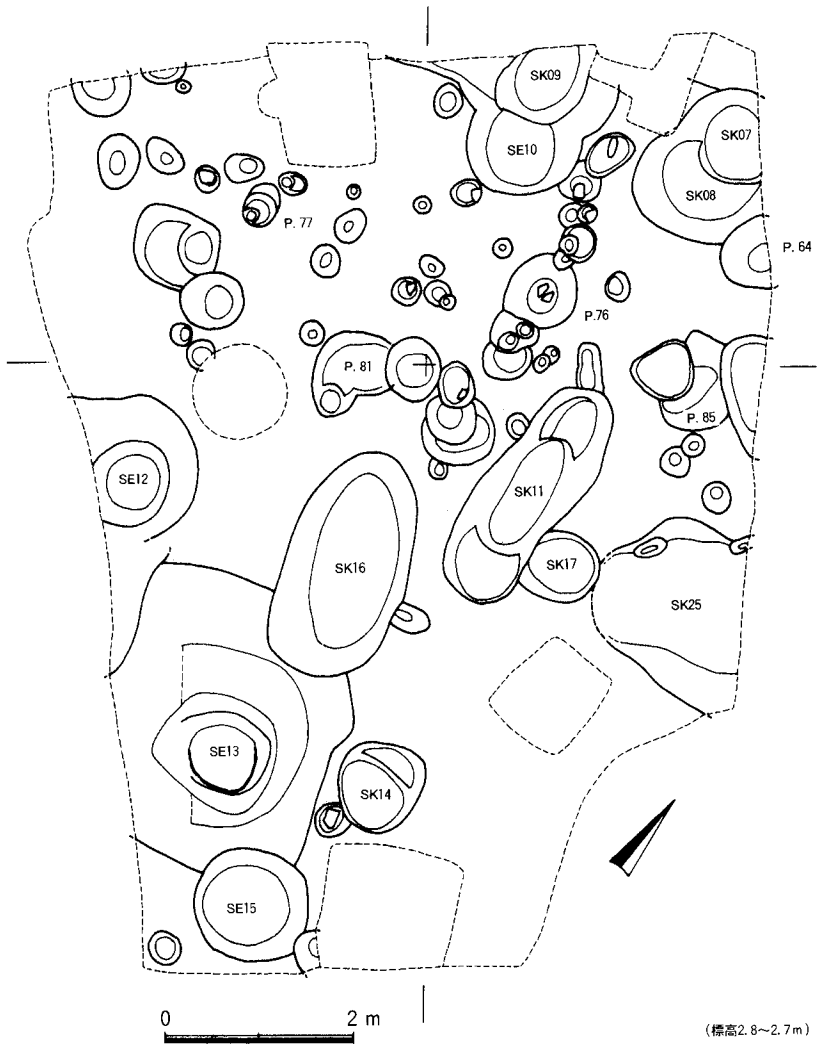


Fig. 10 第46次調査地点第3面遺構検出状況(縮尺1/80)

(4) 第4面 (Fig. 12)

第5層群上面において検出した遺構群であり、土壙9基、溝状遺構1条、柱穴82を確認した。土壙は小規模のものが多い。このうちSK22は備前焼大甕を使用した埋甕である。これは甕上部の破片と不明瞭なプランを第3面で見い出していたが、確実を期すために本遺構面での確認となったものである。溝状遺構SD26は調査区北側にあり、弧状を描く幅0.3mの小規模のものである。柱穴は3個を単位として東西に柵列状に並ぶ部分があるが、その性格は不明である。遺構内と上部の埋土から多くの遺物が出土した。その時期は12世紀後半から13世紀前半代に集中する。

Fig. 11　第3面全景(南から)

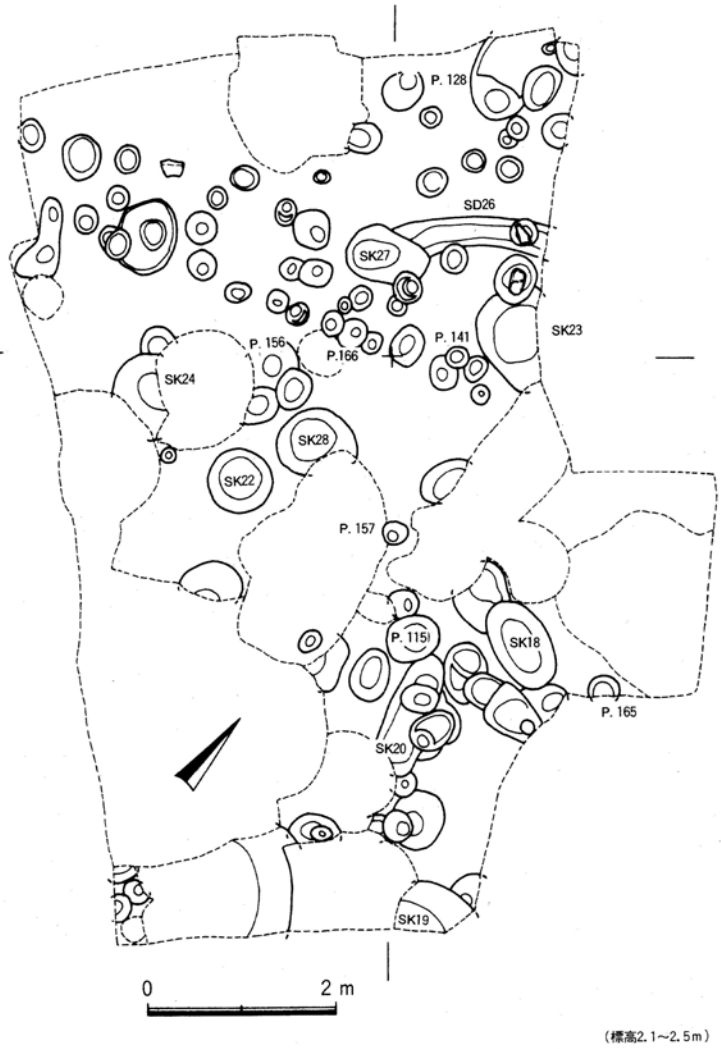


Fig. 12　第46次調査地点第4面遺構検出状況(縮尺1/80)

第４章　調査の記録

１）検出した遺構

(1)　井戸 SE12（Fig. 17）　調査区西側の第３面において検出した。掘方の西側は調査区外にある。掘方は南北1.5ｍ、東西1.1ｍ以上あり、約１ｍはゆるい傾斜で下り、そこから垂直に近く下る。底部は直径約0.6ｍの円形を呈する。全体の深さは1.7ｍを測る。

出土遺物　全体として遺物量は少い。１～３の土師器小皿ａは、いずれも糸切り底である。この他に小片で、白磁碗Ⅵ類、同安窯系青磁碗、竜泉窯青磁碗（内底花文スタンプ文）がある。

遺構の時期　12世紀後半～13世紀前半期。

(2)　井戸 SE13（Fig. 13,15,17）　調査区南側の第３面において検出した。掘方の西側は調査区外にある。SK02、SE15、SK16に切られる。掘方は南北３ｍ、東西2.6ｍ以上あり、深さ1.6～1.7ｍの位置で二段掘りとなる。二段目は直径0.8～1.0ｍの不整円形でさらに0.6ｍ以上下がるが、湧水のために調査困難となった。井筒は東南側に遺存し、幅10cm前後の板材を立て並べた径約0.7ｍのものであった。

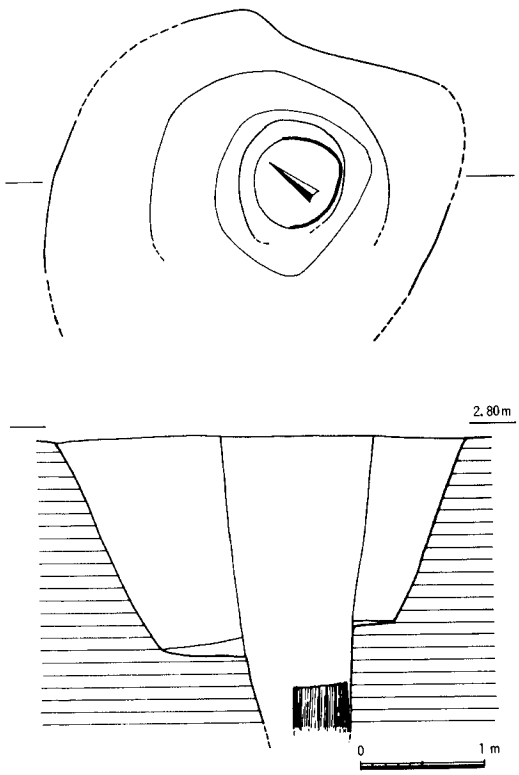


Fig. 13　SE13

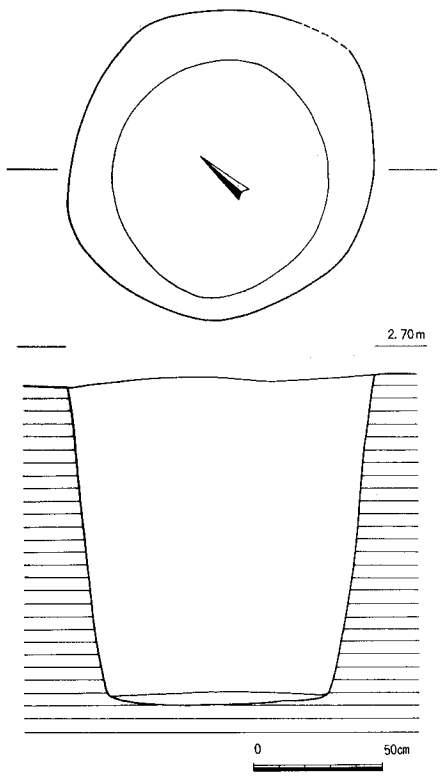


Fig. 14　SE15

Fig. 15　SE13完掘状況(北から)

Fig. 16　SE15完掘状況(北から)

出土遺物〔掘方内〕　糸切り底の土師器小皿と杯が出土し、7はヘラ切りの小皿で、蓆状圧痕が底部にみられる。5、6の小皿は板状圧痕がみられない。11は平瓦で、凸面は縄目すり消し文で、灰色を呈する。

この他に陶磁器が共伴し、白磁Ⅱ、Ⅵ類碗、芒口皿、四耳壺、青磁竜泉窯蓮弁文碗、同安窯系碗・皿、黄釉鉢、褐釉長壺など、土師器と同じように時期差のあるものが混在している。

〔井筒内〕　土師器はすべて糸切りで、板状圧痕は認められず、底、体部の境が鋭角をなすもの、12、13、14の3点を含んでいる。18は竜泉窯青磁蓮弁文碗で、淡青色透明釉である。この他に白磁Ⅳ類碗などが伴出している。19は須恵器鉢で、全面が灰黒色を呈する。

遺構の時期　13世紀。

(3)　井戸 SE15（Fig. 14,16,17　Tab. 1）　調査区南端の第3面にありSE13を切る。掘方は直径約1.2mの略円形である。深さ1.3mで底径は約0.9mを測る。

出土遺物　糸切り底の土師器は少量である。20、22は東播系須恵器であり、20は小形鉢で、口径15.8cm、高さ6.7cmをはかる。口縁を内側に折り曲げて肥厚させ、その部分は黒色を呈する。内外ともにヨコナデ、内底はナデ調整をし、外底には糸切り痕がみえる。器肉は薄く、堅く焼きしまっている。22は通常の大きさの鉢であり、口縁部が黒色を呈する点は20と同じである。

23、21は粗製の白磁碗であり、23は赤褐色の胎土に透明釉がかかり、灰色ないし赤味を帯びた釉調である。21は白灰色の釉色で、体部下半は露胎である。24は青磁皿で、透明灰青色で、こまかい氷裂文をもつ釉である。胎土の一部は暗灰色を呈する。25は彫りの浅い蓮弁文で、緑黄色の釉が高台脇までかけられている。26は暗緑色釉がかかり、露胎の外底に塁餅痕と糸切り痕がみられる。内底には圏線がめぐる。25とともに竜泉窯青磁である。

遺構の時期　12世紀後半～13世紀。

		md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器　小皿a	8.6	6.0	1.0	○	?
2	〃　〃	9.6	7.9	0.9	○	○
3	土師器　坏a	12.7	8.4	2.6	○	?

Tab. 1　井戸 SE15出土土師器計測表

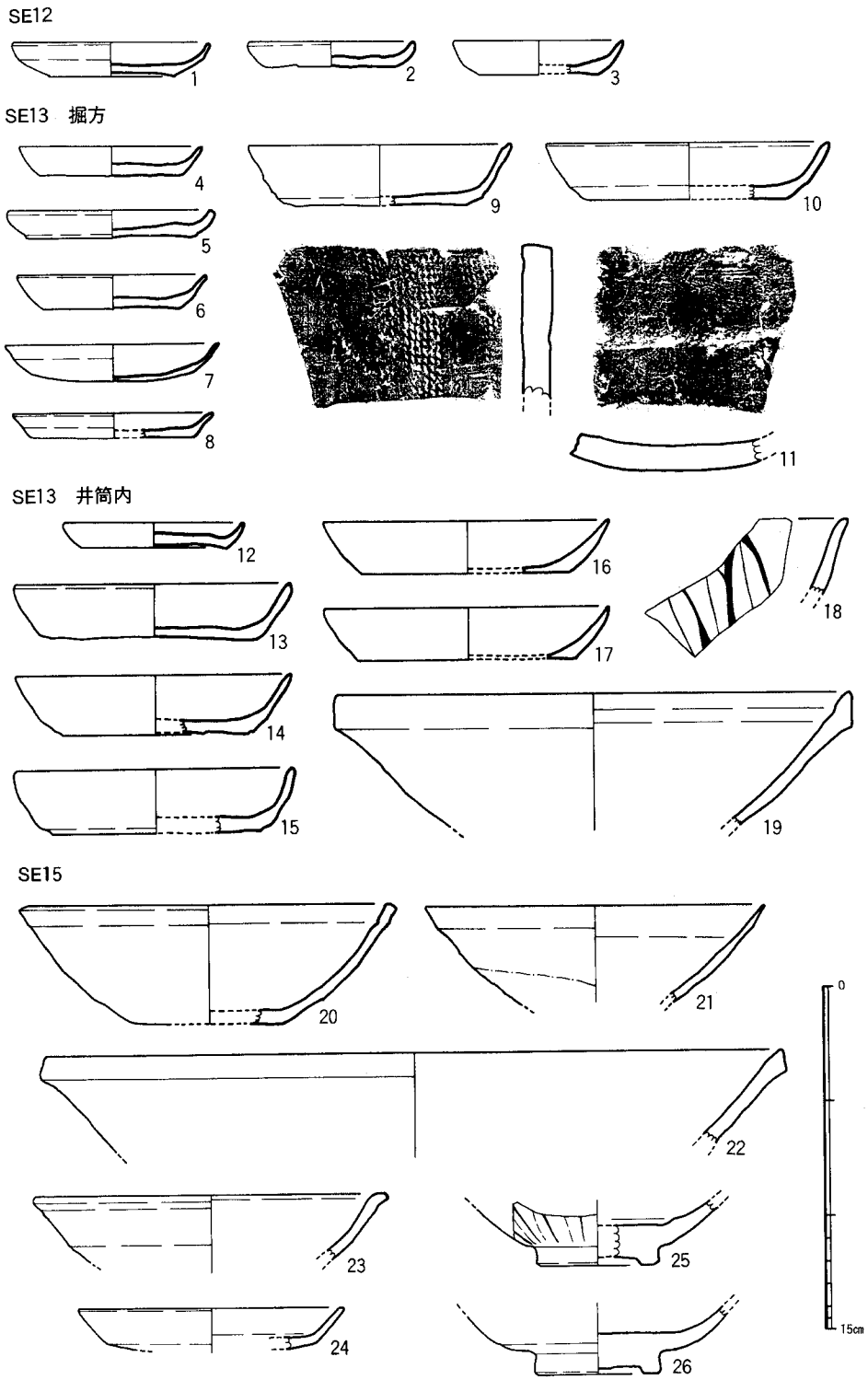


Fig.17　井戸出土遺物

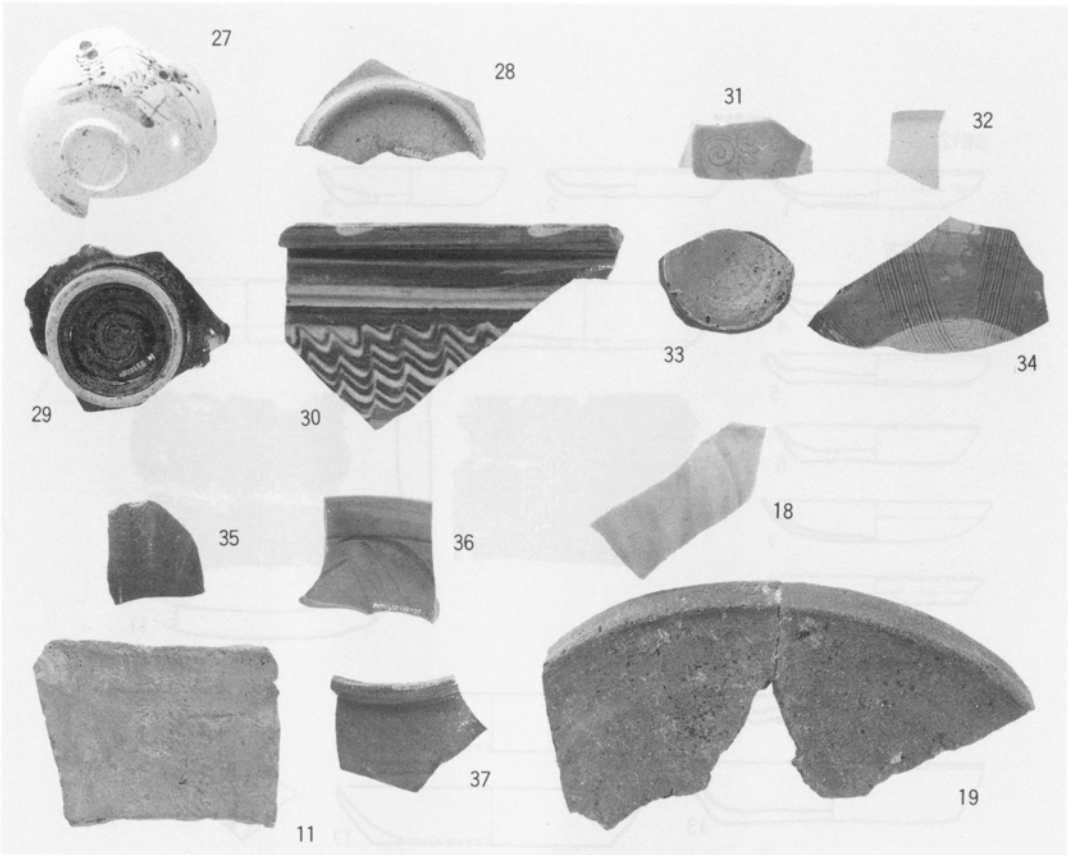


Fig. 18　SE13出土遺物

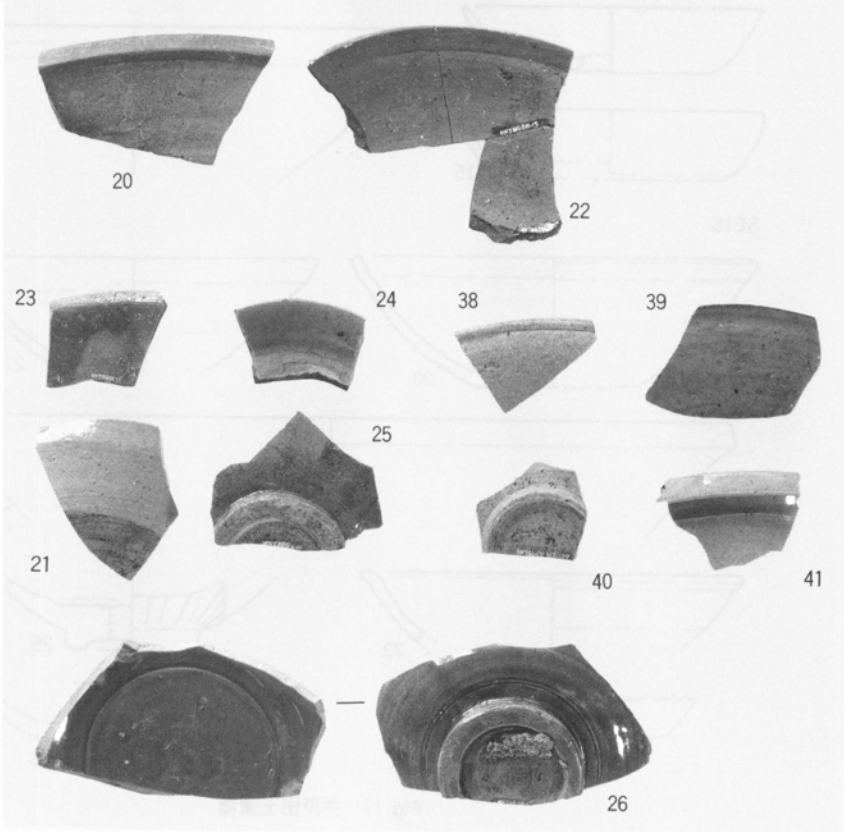


Fig. 19　SE15出土遺物

(4) 土壙 SK03 (Fig. 20,21)　調査区北端の第１面において検出した。遺構の北側は調査区外にある。平面形は略長方形を呈し、規模は東西2.5m以上、南北1.5m、深さ1.0mを測る。埋土中から多くの遺物が出土した。

出土遺物　第２層群出土の高麗青磁皿311と本土壙出土の61とが接合し、また瀬戸窯卸皿（第２層群315）も類似するなど、本土壙は時期的に第２層群に近いとみられる。

土師器はすべて糸切りであるが、そのなかで小皿ａの46、48、坏ａの52、58は共通した特徴をもっている。すなわち、底部を平坦につくり、体部は直線的にのばす。調整の点について、内底までヨコナデで、中央のナデはなく、外底に板状圧痕はみられない。こうした特徴をもつ土師器は、第２層群検出時出土品（Fig. 57　266、269、274、278、282、285、287の小皿ａ）と共通した特徴がみられ、編年の一つの指標となり得る。

60～64は青磁で、60は竜泉窯小皿であり、片切彫りで蓮弁文の輪郭をつくり、弁内にも線刻

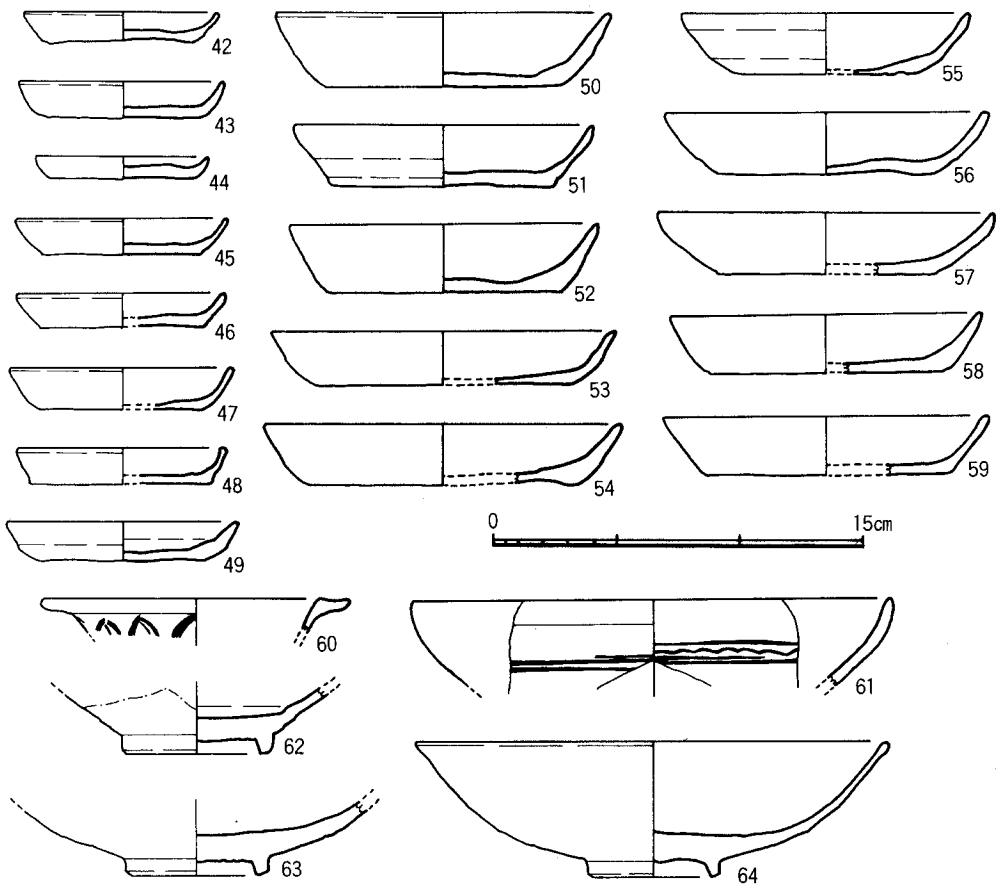


Fig. 20　SK03出土遺物(1)

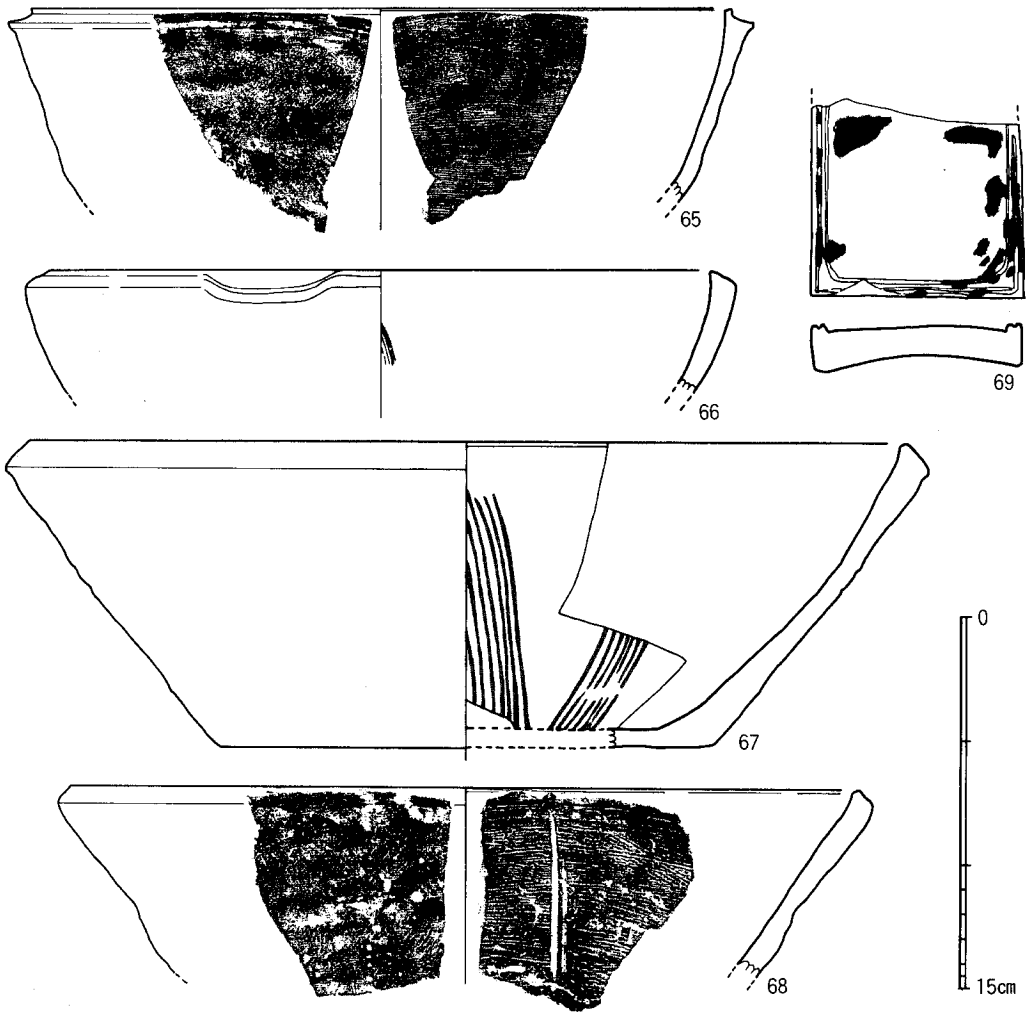


Fig. 21　SK03出土遺物(2)

し、丁寧な施文である。釉は淡緑色で薄くかけられている。口径12.4cm。61は高麗青磁皿で、白象嵌で内面に波文帯文、外面には２～３条の線をいれている。胎土は灰色、釉の発色も緑灰色で濁った粗製青磁である。本品は第２層群検出時出土品（Fig. 60　311）と接合する。62は、内底を輪状露胎にするタイプの碗で、重ね焼きの白灰色砂が露胎部に付着している。外面も腰以下は釉がない。上半部の釉は透明性のつよい緑灰色を呈し、氷裂文がみられる。胎土は灰色

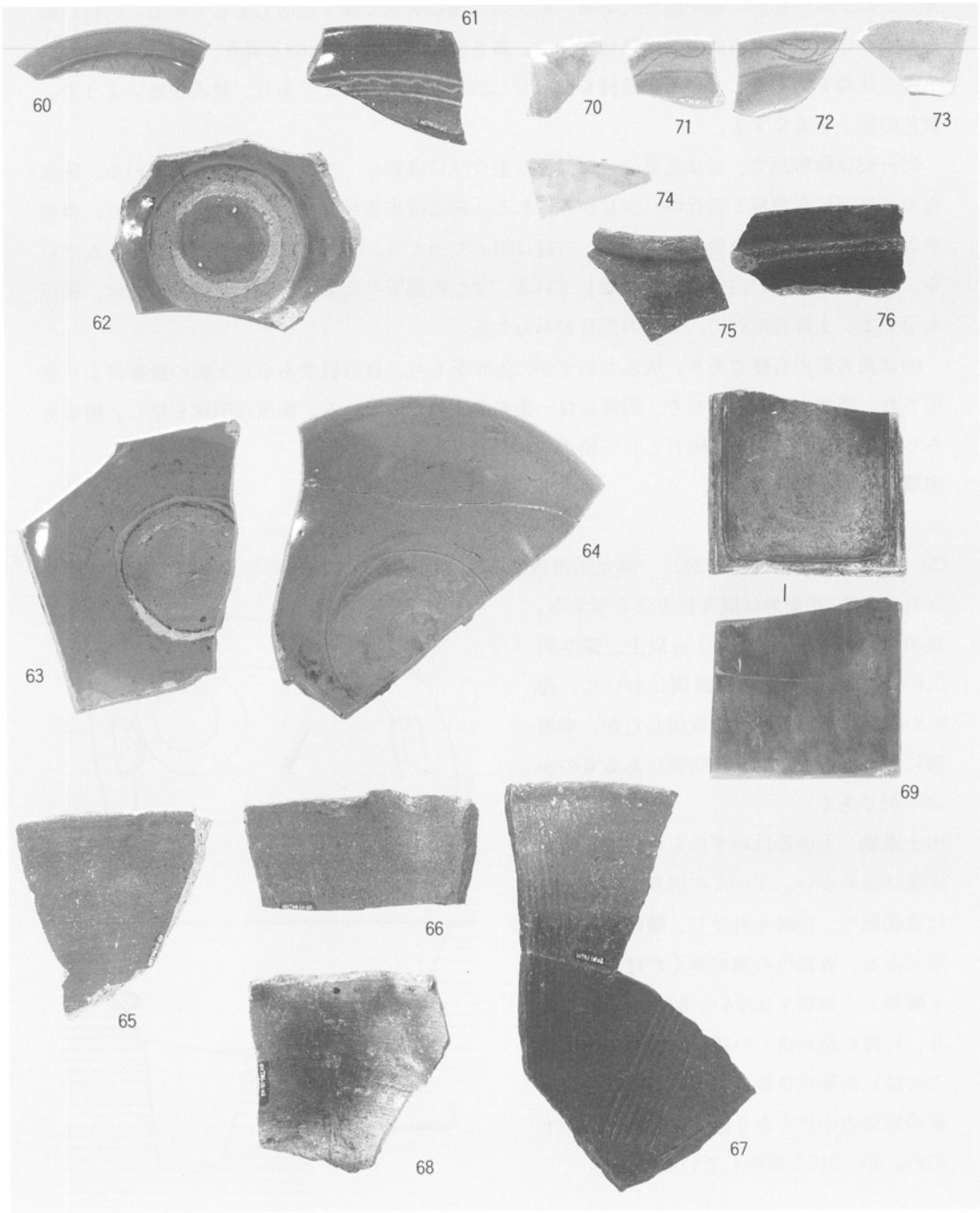


Fig. 22　SK03出土遺物(3)

精製土である。63、64は皿形品で、釉色は各々暗黄緑色と黄色であるが、器形や高台の削り方などよく似ている。63は内底中央を露胎にし、重ね焼きの高台残片が付いている。畳付は面取りし、以下は暗赤色で粗い削りである。胎土の内部は灰色で硬く焼きしまっている。64は口縁をわずかに肥厚させる皿で、口径は19.0cm、高さ5.3cmをはかる。63と異り、内底にも施釉し、一条の沈線をめぐらしている。畳付を面取りし以下は露胎のままであり、焼成が悪いようで、黄色の胎土色を呈する。

65～68は鉢形品で、65は瓦質で、口縁部を蓋受状に成形し、ヨコナデ調整されている。灰黒色で、外面に指頭痕と斜行のハケ目がみられる。66は暗赤色硬質で、内面に摺目があり、備前窯の製品。67は、須恵質擂鉢であり、口縁は斜めにつくり、内外面にヨコナデ調整がされている。体部下半以下の内外に煤が付着している。また内面下半はよく磨滅している。68は、褐色を呈する。土師質擂鉢で、3本の摺目がみられる。

69は長方形の石硯であり、灰色でわずかに赤味をもち、頁岩質である。上面の陸部はよく使用され、墨痕が固着しており、周縁には一条の溝がめぐっている。裏面は凹状を呈し、擦痕もみられるので、2次的に砥石として使用されたのであろうか。

遺構の時期　14世紀。

(5) **土壙 SK04** (Fig. 23,24)　調査区南西側の第1面において検出した。遺構の南側は調査区外にある。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は東西1.6m、南北1m以上、深さ約0.6mを測る。床面の東側隅において、径0.5m深さ0.5mの柱穴を検出したが、本遺構に伴うものか、切合い関係にあるものかは不明である。

出土遺物　土師器はいずれも小片で正確な法量は測れない。すべて糸切りである。81は青磁碗で、口縁を外反し、腰の張った器形である。青緑色の釉が厚くかけられ、よく融解し、氷裂文はない。82は白磁碗であり、口縁の釉が虫くい状に剝離している。この他に高麗白象嵌皿がある。83は瀬戸窯製の卸皿の小片であり第2層群検出時出土のFig. 60　315と類似している。

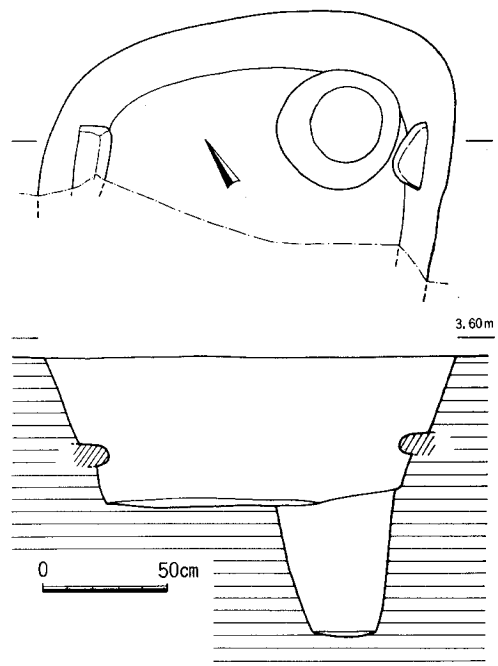


Fig. 23　SK04

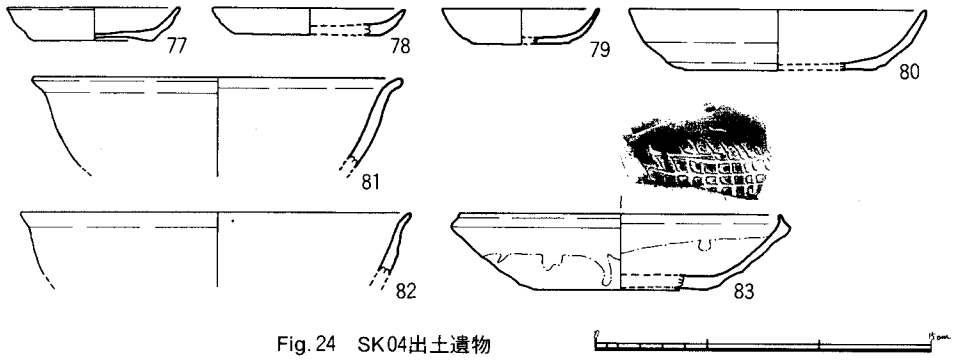


Fig. 24　SK04出土遺物

(6) 土壙 SK05 (Fig. 25～27)　調査区中央西寄りの第1面において検出した。遺構の西側は柱穴と試掘トレンチによって切られる。平面形は南北に長い楕円形である。規模は南北1.3m、東西1.1m深さ約0.2mを測る。中央床面より5cm浮いて小板石が出土した。

出土遺物　土師器はすべて糸切りであり、87と90は板状圧痕は認められない。91は白磁坏であり、腰で反転して外反する形をとる。高台以下は露胎であり、軟質の胎土をみせ、高台は面取りしているが、抉りはなく輪状である。釉は白濁色でこまかく氷裂文が走っている。図示していないが、枢府窯白磁碗の小片がこの遺構から出土し、第2層群表採のFig. 58　302と接合する。枢府磁が91の白磁と共伴している例として注意したい。

92は青磁皿で、底径は7.8cmをはかり、暗緑色釉が畳付までかけられ、外底は露胎で暗赤色となり、胎土の内部は灰色の磁質となっている。墨書は「国」と読める。この他に塼形で、スサを含み土師質の小片が出土している。表面に赤色顔料の塗布がみられる。

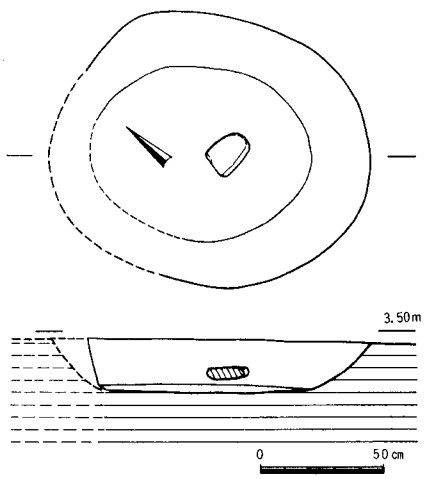


Fig. 25　SK05

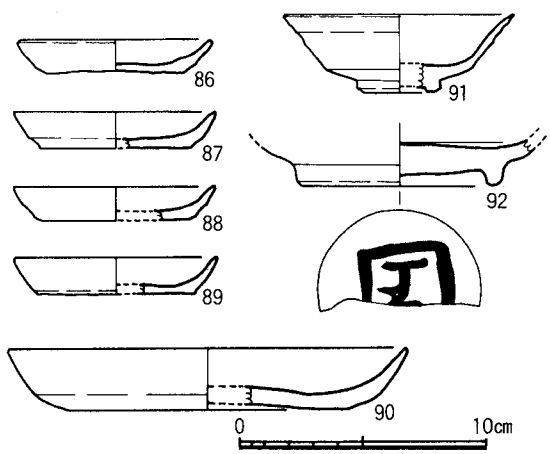


Fig. 26　SK05出土遺物(1)

(7) 土壙SK07

(Fig. 28,32)

調査区北側の第3面において検出した。遺構の東側は調査区外に伸び、SK08を切る。平面形はおおよそ円形と復元され、規模は径約1.0m、深さ0.7mを測る。

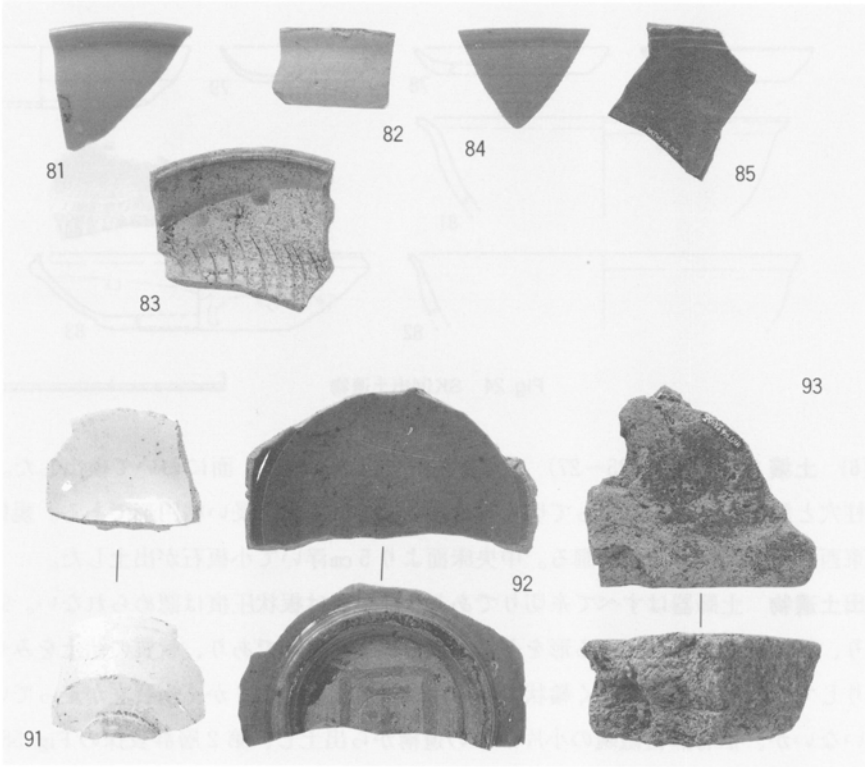


Fig. 27　SK05出土遺物(2)

出土遺物　土師器は計測表に示したとおりで、小皿、坏ともすべて糸切り底である。小皿の口径は6.4～9.4cmであるが、8.0cm前後が多い。坏の口径は10.8～13.4cmである。小皿、坏ともに底部に板状圧痕の認められないものが過半をこえている。図示した94は芒口白磁皿で滑らかに溶けた釉は白灰色を呈する。95は竜泉窯系青磁蓮弁文碗であるが、無鎬で幅の広く、粗雑な弁が刻まれ、釉の発色も暗黄緑色と悪い。この他に、白磁碗Ⅵ類、同安窯系青磁碗・皿、黄釉鉢、東播系摺鉢などが共伴している。

遺構の時期　13世紀後半～14世紀前半とみられ、板状圧痕のない土師器坏、皿の資料として注意したい。

		md	bd	h	糸切り	板状圧痕			md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器小皿a	7.6	5.7	1.3	○	ナシ	12	〃	7.6	4.6	1.0	○	○
2	〃	8.0	6.0	1.7	○	○	13	〃	8.0	7.1	1.5	○	?
3	〃	7.4	5.1	1.6	○	ナシ	14	〃	8.3	7.4	1.0	○	ナシ
4	〃	7.8	5.8	1.5	○	ナシ	15	土師器坏a	12.2	9.2	2.4	○	?
5	〃	8.8	6.4	1.3	○	ナシ?	16	〃	12.6	8.4	2.3	○	ナシ?
6	〃	8.3	6.5	1.0	○	ナシ	17	〃	10.8	8.6	2.6	○	ナシ?
7	〃	7.4	6.0	1.3	○	ナシ	18	〃	13.0	10.6	2.4	○	○
8	〃	9.4	6.4	1.5	○	ナシ	19	〃	12.5	10.2	2.5	○	ナシ?
9	〃	8.6	6.2	1.1	○	ナシ?	20	〃	13.2	10.4	2.5	○	?
10	〃	7.0	6.0	0.9	○	ナシ	21	〃	13.4	11.0	2.4	○	?
11	〃	6.4	5.4	1.2	○	○	22	〃	12.2	8.0	2.6	○	ナシ

?は小片のため

Tab. 2　土壙SK07出土土師器計測表（単位cm以下同じ）

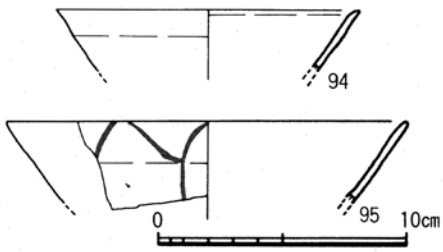


Fig. 28　SK07出土遺物

(8) 土壙 SK08 (Fig. 29)　SK07のやや南側にずれて重複し、切られる遺構である。遺構の東側は調査区外に伸びる。平面形は東西に長い楕円形であり、東西約1.6m、南北1.2m、深さ約0.5mを測る。

(9) 土壙 SK11 (Fig. 30～32,48)　調査区中央付近の第3面において検出した。ほぼ南北に主軸をとる長楕円形の土壙である。規模は南北2.6m、東西0.9～1.0mであり、深さ0.4～0.5mの位置で二段掘りとなる。二段目は土壙のほぼ中央にあり、長さ約1.9m、深さ0.4mを測る。床面は平坦であり、南側にゆるく下る。

出土遺物　土師器はすべて糸切り底である。小皿のうち104と106は内底のすべてと、内体部にナデ調整をしている。108の坏も同一の調整手法をみせている。111は小皿Cの屈曲部以下の破片で、貼付高台をした皿の外底に糸切り痕がみられる。

112、113は青磁である。112は灰青色透明釉が底部を除いて

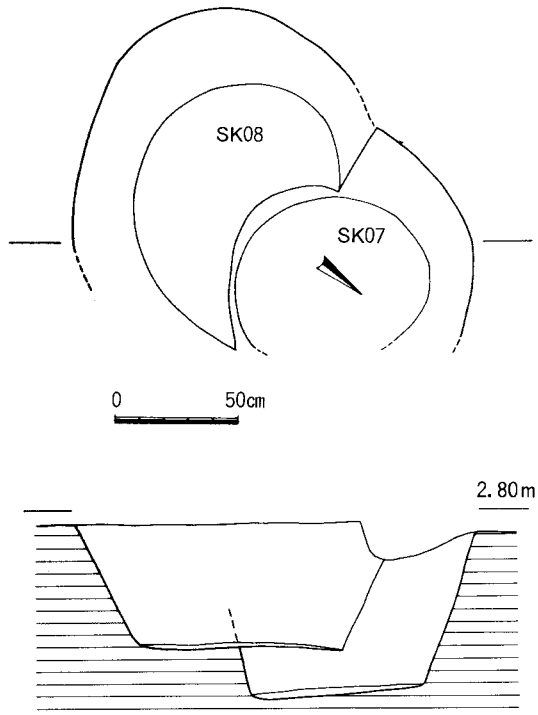


Fig. 29　SK08

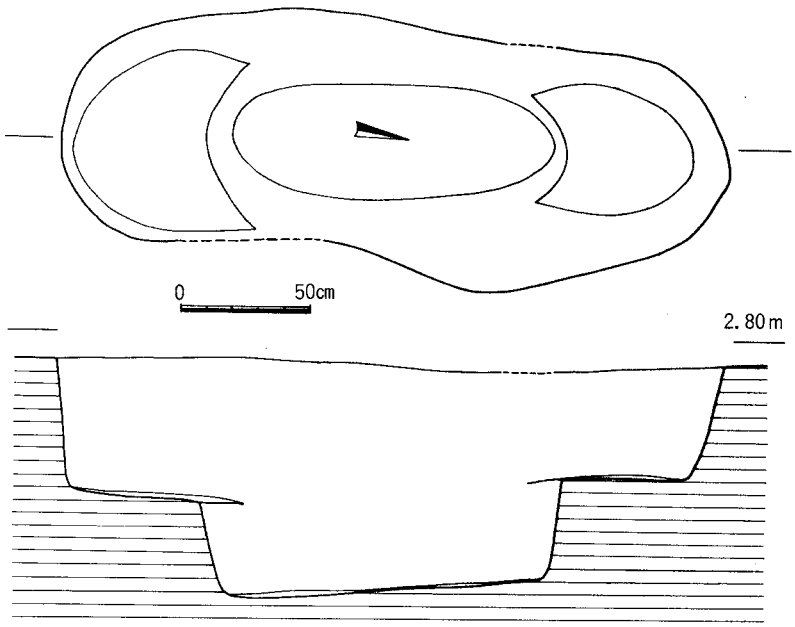


Fig. 30　SK11

施され、内底の施文は、点綴文→ヘラ描き文の順にされている。113は竜泉窯輪花青磁碗のタイプで、青灰色透明釉がかけられ氷裂文はみられない。

114は瓦質擂鉢で、黒色を呈し、内面はハケ目調整、外面は指頭痕がみられ、ほとんど未調整である。115は土師器甕の口縁部で、外面は黒色、内面は粗くヘラ磨きが横位になされ、褐色を呈する。

この他に白磁碗Ⅵ類、同安窯系碗などの出土をみる。

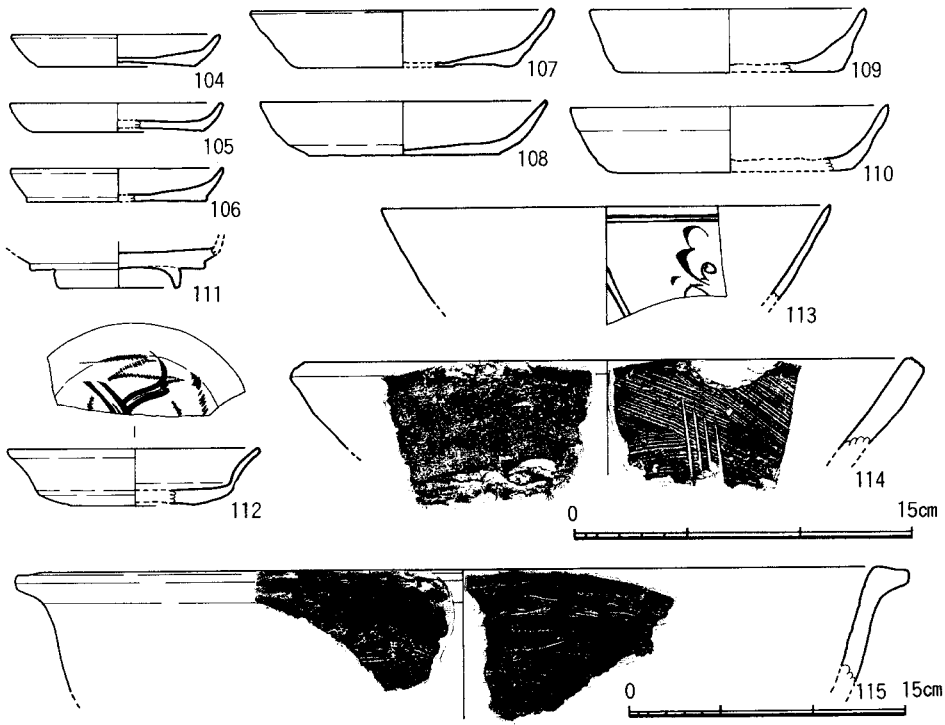


Fig. 31　SK11出土遺物

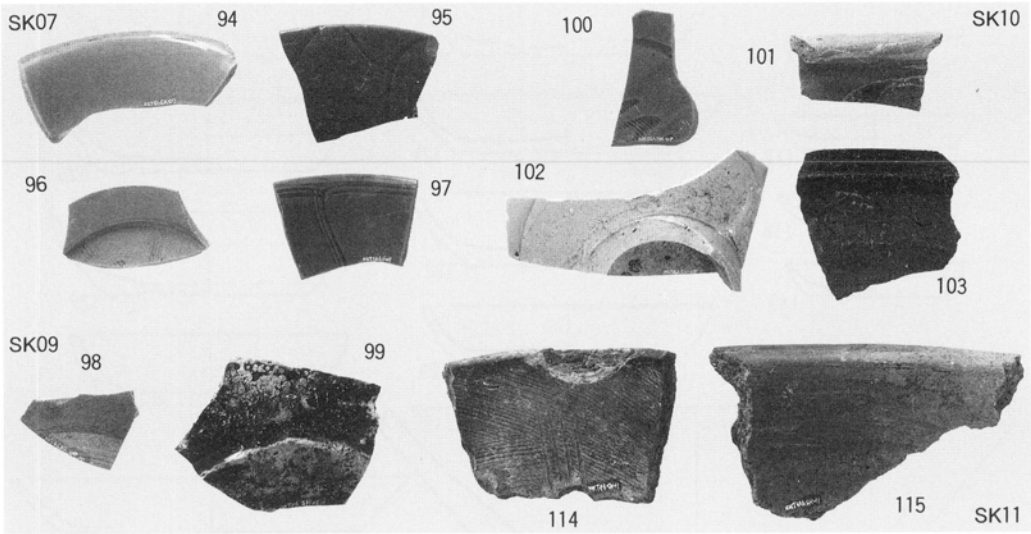


Fig. 32　SK07、09、10、11出土遺物

遺構の時期　12世紀後半を中心とする時期。

⑽　土壙 SK16（Fig. 33,34,48）　調査区中央の第３面において検出した。ほぼ南北に主軸をとる楕円形の土壙である。規模は南北2.5ｍ、東西1.3ｍ、深さ0.5～0.6ｍを測る。床面は平坦であり、北側にゆるく下る。

出土遺物　土師器の完形品を含んでまとまって出土している。すべて糸切りであるが、外底に板状圧痕が認められないものとして、117、119、120、122～124があり、いずれも体部との境に稜をもっている。129は須恵器鉢で内面が灰色、外面は黒灰色を呈し、ヨコナデ調整である。

130は青磁竜泉窯小碗である。暗緑色で透明な釉が厚目に施こされ、畳付をも包んでいる。131は青磁碗で、緑黄色で透明度の高い釉が腰部

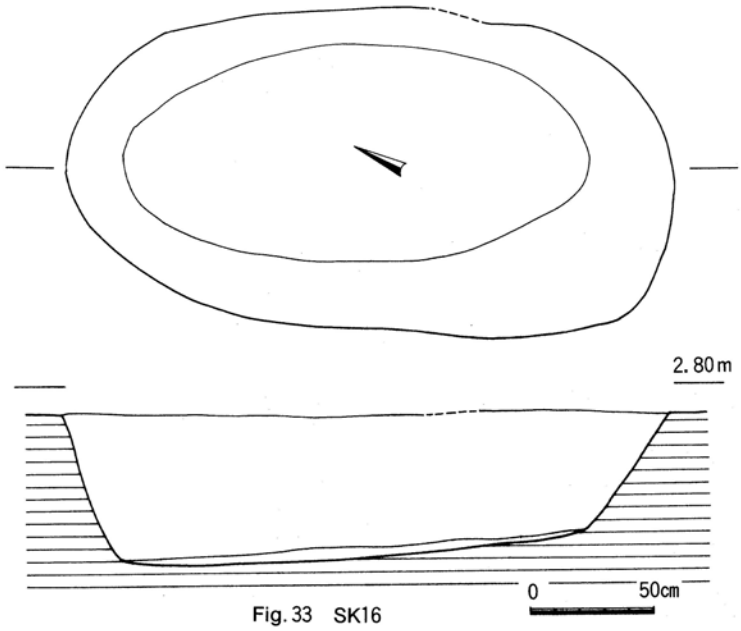


Fig. 33　SK16

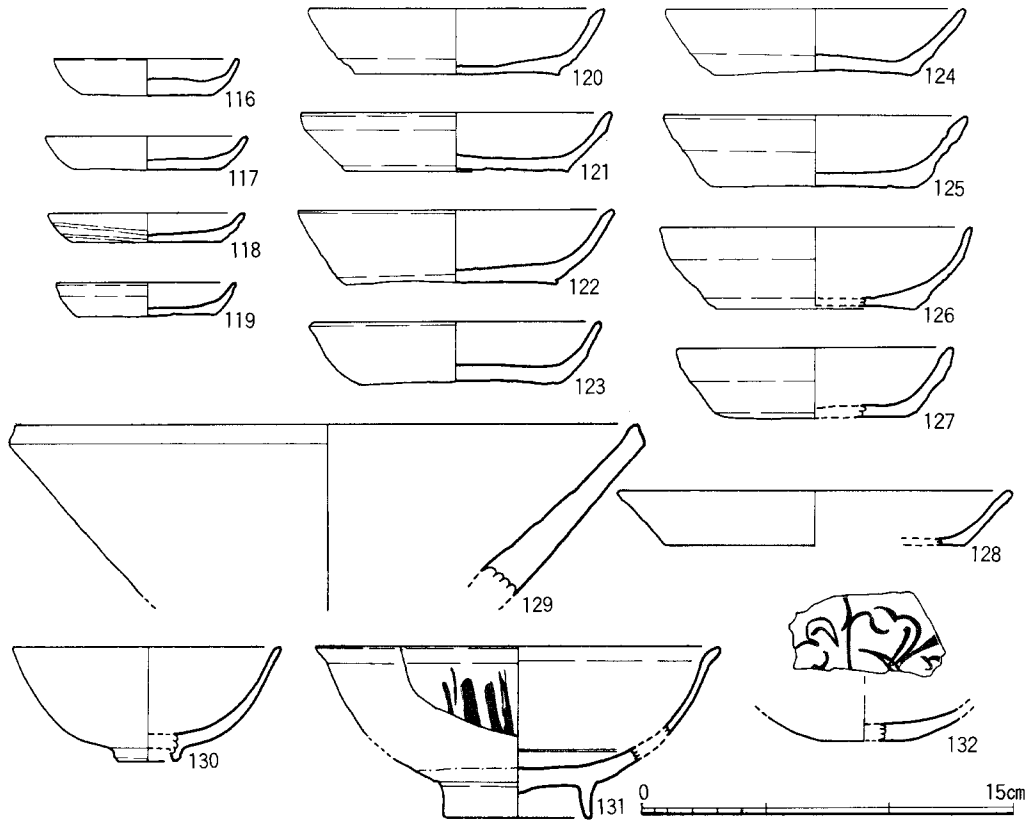


Fig. 34　SK16出土遺物

以上にかけられている。高台は細く高くのばし、口縁を外反させ、外面にはヘラによる綫条文を無造作にいれている。132は白磁皿で、クリーム色の釉が平底部分を除いてかけられており、内底に花文が浅く刻まれている。

遺構の時期　130の青磁小碗のように、14～15世紀のものもあり、板状圧痕をもたない土師器もこの時期である。しかし、それ以前のものも含んでいる。図示以外に鍔縁滑石鍋、同安窯系青磁碗などがある。

(11)　土壙 SK17（Fig. 35,48）　第3面において検出した。SK11の東側に接し、切られる。東西に長い楕円形を呈する。規模は東西0.9m、南北0.7m、深さ0.4mを測る。本遺構内からは29枚の銭が出土した。

出土遺物　土師器の小皿と杯の小片を検出。いず

		md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器小皿a	9.2	6.0	1.5	○	?
2	〃	7.8	6.4	1.4	○	?
3	〃	8.2	6.4	1.3	○	?
4	土師器　坏a	11.2	6.6	2.8	○	?
5	〃	16.2	9.8	3.0	○	?

Tab. 3　土壙SK17出土土師器計測表

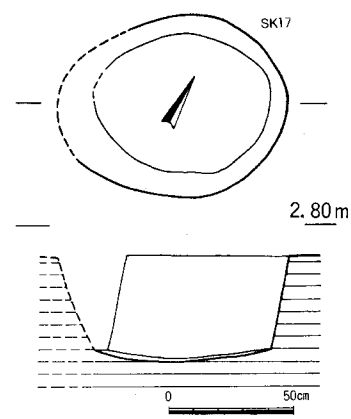


Fig. 35　SK17

れも糸切り底である。共伴して、同安窯系青磁碗の破片がある。

⑿ **土壙 SK18** (Fig. 36,48)　調査区東側の第4面において検出した。東西に長い楕円形を呈する。規模は東西1.0m、南北0.6m、深さ0.25mを測る。

出土遺物　土師器の小皿と杯が各1片出土、いずれも糸切り底である。図示した平瓦は、灰黒色によく焼きしまり、凸面は端部がヨコナデ、それ以下は縄目すり消しである。白磁碗Ⅵ類と青磁同安窯系碗が出土している。

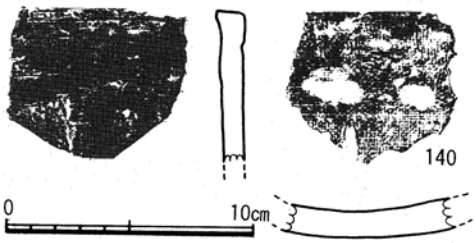


Fig. 36　SK18出土遺物

		md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器小皿a	9.3	6.8	1.3	○	?
2	土師器　坏a	16.4	12.0	3.0	○	?

Tab. 4　土壙SK18出土土師器計測表

⒀ **土壙 SK22** (Fig. 37～39,48)　調査区中央西側の第4面において検出した。備前焼大甕を据え置く埋甕遺構である。本遺構については、本来は第3面に所属するものとみられる。土壙はほぼ円形を呈し、直径0.7m、深さ0.2～0.3mを測る。甕は胴部より上を欠き、底部のみ現位置を保つ。土壙西側に接してほぼ水平に置かれる。甕に内底に密着して24枚の銭が出土した。また甕の内部には砂質の埋土があり、中位に20cm大以上を主とする角礫が入れられていた。

出土遺物　土師器はすべて糸切り底である。146は中国製の褐釉のかかった長壺で、暗緑色の釉が黒赤色の

Fig. 37　SK22検出状態

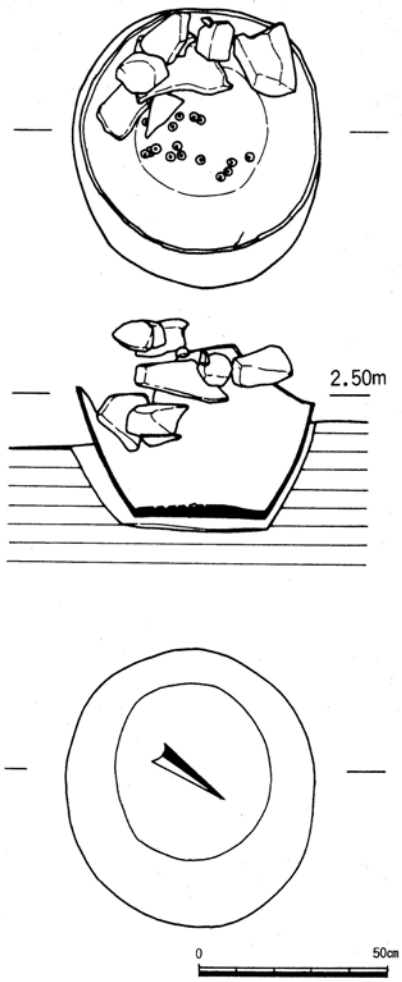


Fig. 38　SK22　2.50m

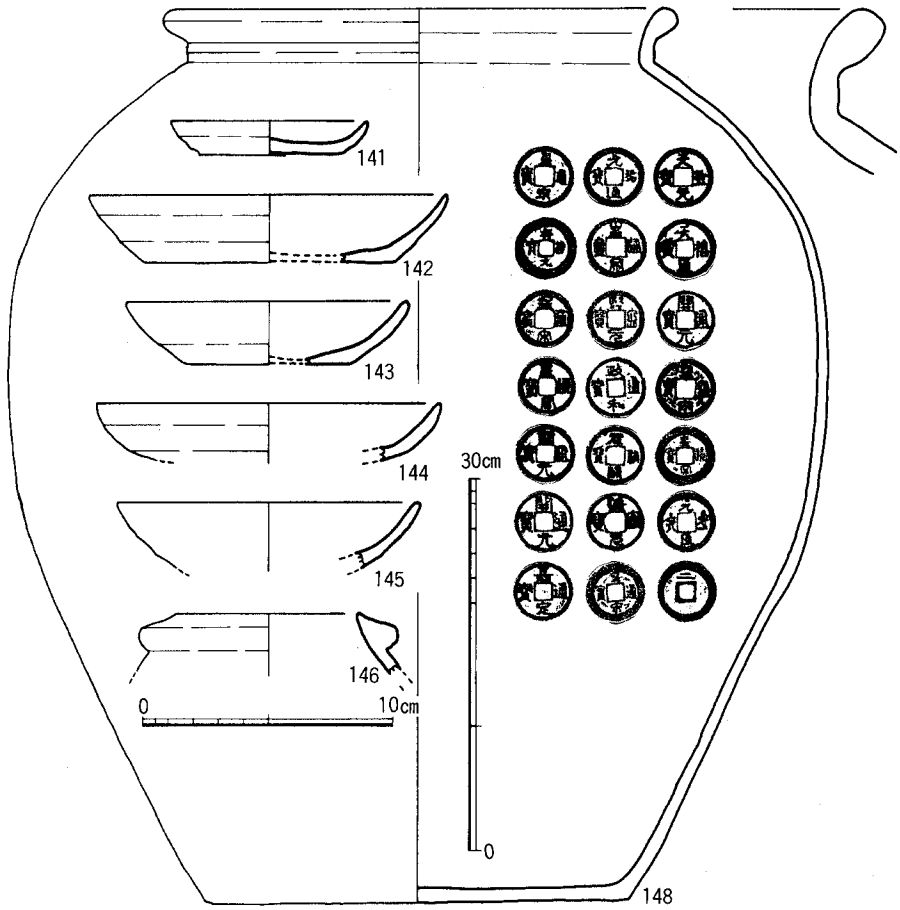


Fig. 39　SK22出土遺物（大甕口縁部分の縮尺は1/3）

粗胎にかけられている。口縁の上面のみ施釉後に釉が拭きとられている。

148は備前焼大甕である。上半部分は小破片からの復元である。器高72.4cm、口径41cmを測る。胴部最大径は胴部中位にあり、65.5cmを測る。頸部は強くしまり、２cm弱立ち上る。口縁部は玉縁に仕上げ、短く、丸くおさめる。底部は径34cmを測り、ほぼ平底である。胴部外面はヘラ状の工具で縦位に強くナデる。口縁部と内面は横ナデである。銭は保存のよい20点を示した。判読できたものには開元通宝（621）３、天聖元宝（1023）１、皇宗通宝（1039）８、熙寧元宝（1068）１、元豊通宝（1078）１、元祐通宝（1086）２、政和通宝（1111）１、嘉定通宝（1208）１などがある［(　) 内は初鋳年］。これは14世紀代の備蓄銭遺構と推定する。

遺構の時期　14世紀前半から中頃を中心とする時期。

⒁ **土壙SK23** (Fig. 40,48)　調査区北東側の第4面において検出した。遺構の東側は調査区外となる。東西に長い卵形を呈する。規模は東西約1.1m、南北約0.9m、深さ0.6mを測る。

出土遺物　149、150は土師器で、糸切りで板状圧痕がみられる。150の杯aは14.8-10.8-2.5cmをはかる。151は同安窯系青磁皿であるが、釉色は青白磁に近い発色であり、外底部は施釉後に削りとられている。露胎の外底には、直径3.6cmの茶黒色を呈する塾餅痕があり、砂も付着している。内底の施文は、ヘラと櫛による点綴文でよくみられるが、外体部に鎬文状になる凹みを斜めにつけている。

この他に白磁碗Ⅵ類、竜泉窯青磁碗(内面劃花蓮弁文)、褐釉壺、須恵器鉢が共伴している。

遺構の時期　12世紀後半期。

⒂ **土壙SK25** (Fig. 41,42,48)　調査区東側の第3面において検出した。遺構の東側は調査区外に伸び、西側ではSK17が切る。全体に浅く広い落ち込み状をなす。規模は東西1.7m、南北0.7m以上、深さは約0.2mを測る。床面の北側端に沿って2ケ所に小ピットが認められた。

出土遺物　少量の遺物を検出している。162、163は土師器杯で、いずれも糸切り、板状圧痕をみせる。164は須恵器杯で、貼付高台の内刳り部分が斜めになり、瓦器椀のそれに似ている。焼成は良好で、黒灰色を呈する。この他に須恵質鉢、褐釉壺などが共伴している。

⒃ **土壙SK27** (Fig. 43～45)　調査区中央北側の第4面において検出した。東西に長い卵形を呈する。規模は東西0.9m、南北0.6m、深さ0.5mを測る。

出土遺物　土師器小皿aは糸切りで

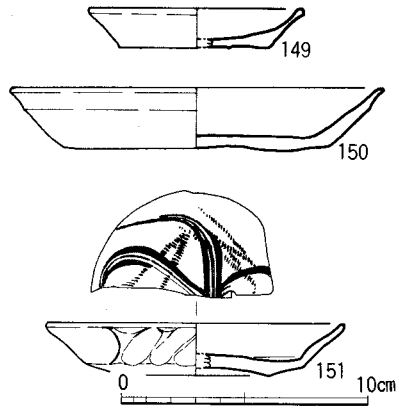


Fig. 40　SK23出土遺物

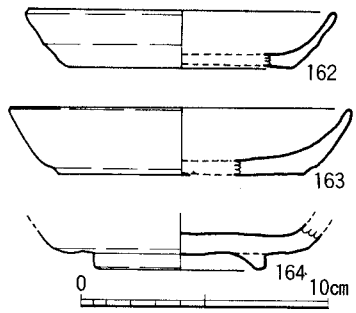


Fig. 41　SK25a出土遺物

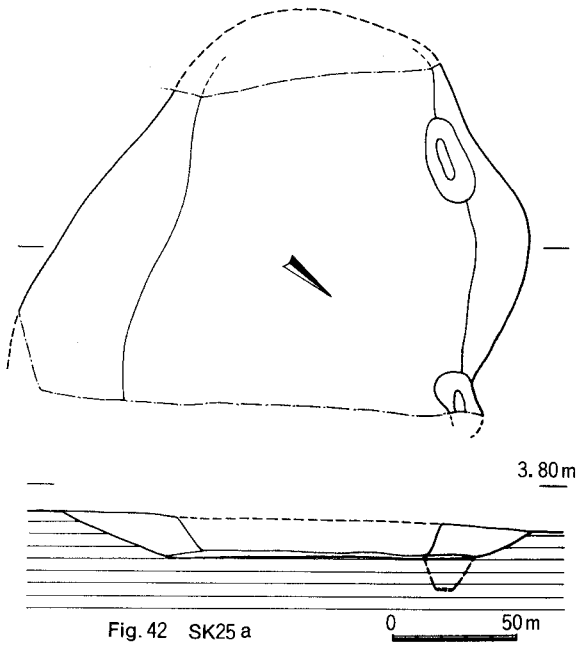


Fig. 42　SK25a

板状圧痕をみせる通有品であり、杯ａも同様である。いずれも焼成良好である。

174は青白磁の小皿で、透明で氷裂のないよく溶けた釉が、白色磁胎にかけられている。腰以下は施釉後に釉が削られ、白色の胎土をみせ、釉際は黄変し、平底部分は茶色斑点の焦げ跡がある。内面の釉下に花文が浅く彫られている。175は竜泉窯青磁輪花文碗で、区画内の花文はまだその姿をとどめている。透明度がつよくこまかい氷裂文をみせる釉は淡緑色に呈発している。176は同安窯系青磁碗で、外面に櫛目文は認められない。

遺構の時期　12世紀後半期。

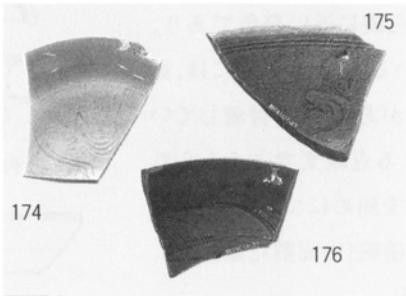


Fig. 44　SK27出土遺物

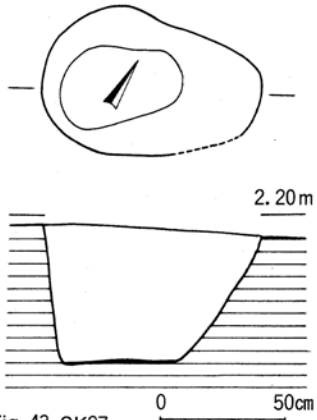


Fig. 43 SK27

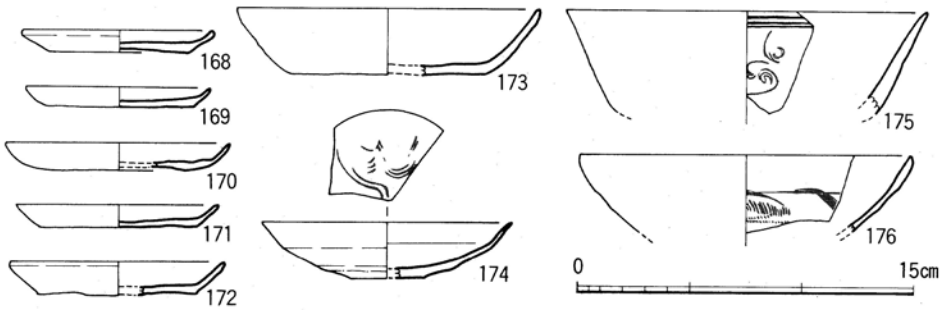


Fig. 45　SK27出土遺物

⑰ **溝 SD06**（Fig. 46,47）　調査区中央東よりの第２面において検出した溝状遺構である。方位をN-18°-Wに取る。幅は0.7～0.8mを測るが、深さは不明である。この面でほぼ溝底に達する遺構であったとみられる。

出土遺物　磁質乳棒の先端部を検出した。無釉で赤褐色を呈し、７面体に削り出し、その一面に径８ミリほどの焼成前穿孔がみられる。下端は一部は磨滅し、使用をうかがわせるが、隅部分に焼成時のクッツキが少し残っている。７面体の削りは左上から右下になされ、上端面には糸切り痕がみえ

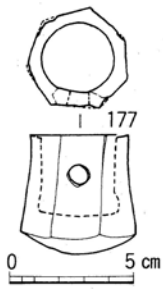


Fig. 46　SD06出土遺物

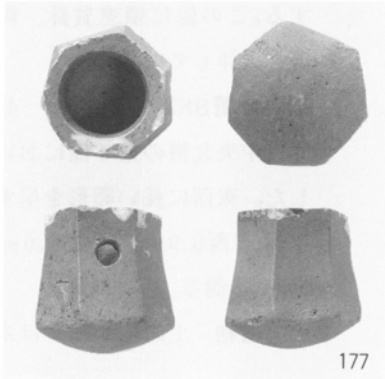


Fig. 47　SD06出土遺物

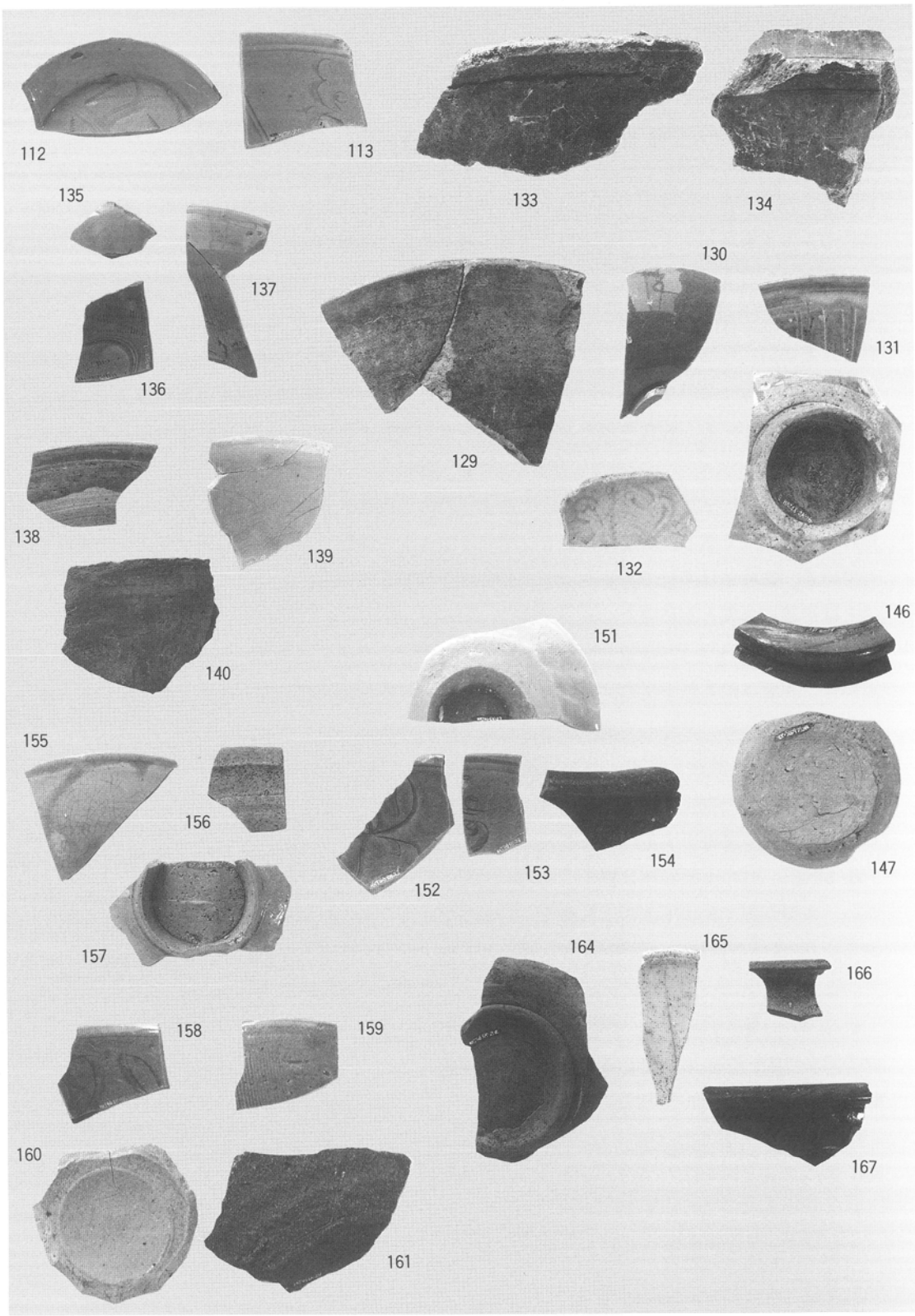


Fig. 48　土壙出土遺物

SK11：112・113　SK16：129～134　SK17：135～137　SK18：138～140
SK22：146・147　SK23：151～157　SK24：158～161　SK25 a ：164～167

る。ソケット内面はヨコナデ痕と窯滓が固着している。胎土は白灰色の精製土で、よく焼きしまり、竜泉窯青磁のものに似ている。糸切り底土師器共伴。

これと同形のものが新安沖海底沈没船から発見されている。本品とほぼ同形で7面体3点、8面体1点の4点が出土し、そのうちの一点は長さ5.8cmであり、無釉のものと、面体部に青磁釉のかかるものがある。(『新安海底遺物（綜合篇)』1988年)

(18) 柱穴 SP (Fig. 49～53)　本調査区では狭い面積ながら、多数の柱穴を検出した。第1面で26、第2面で38、第3面で60、第4面で82と下位にしたがい増加し、合計206を数えた。これらは基本的に各面に伴うものと考えているが、上位の遺構面での確認もれもありうる。各面で建物などの復元は困難であったが、この遺構はこの地域の中世の建物の配置や構造を知る上で重要と考えている。柱穴のほとんどから何等かの遺物が出土しており、以下ではその代表的なものを示す。

a. SP09　178は平鉢形の口縁部破片であり、内外に白化粧され、灰釉状の透明釉が薄くかけられているようである。胎土は、少し赤味をもつ灰色の粗胎で、軟質の白土がその上にかけられている。露胎部は灰色であるが、2次的に煤が付着している。すでに知られている灰緑釉平鉢とは形態、釉調ともに異る。

b. SP42　図示した179は備前窯擂鉢であり、口径は約22.6cmに復元できる。胎土は、内部で赤褐色、表面は黒茶色を呈し、白い粒子が混じる。6本単位の擂目で、片口となっている。鎌倉後半期と考える。共伴して瀬戸窯壺、白磁玉縁碗がある。

c. SP44　須恵器鉢を検出。内面は深くハケ目をつけ、外面はかすかにハケ目がみられ、その上から無造作なナデ調整をする。口径25.0cm。

d. SP46　181の土師器杯は明るい褐色の土をつかい、糸切り底で板状圧痕のみられない完形品である。183は備前窯擂鉢で、SP42出土のものと似ている。

e. SP47　184の白磁皿は、褐灰色釉を外面の中位までかける。露胎部は削り調整である。他に黒釉碗の小片を検出。

f. SP64　土師器はいずれも小片で、小皿は口径8.0～8.6cm、杯aは12.9-8.8-2.7cm、いずれも糸切り底である。189は須恵器鉢で、灰色、かなり大粒の小石を含む胎土であるが、焼成は良好で硬質である。片口。

	器　種	md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器小皿a	8.8	6.2	1.6	○	?
2	〃	7.8	6.0	1.4	○	?
3	〃	8.4	7.0	1.8	?	○
4	土師器　杯	11.0		2.4	○	?

Tab. 5　柱穴 SP15出土土師器計測表

	器　種	md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器小皿a	7.6		1.4	○	?
2	〃　坏	14.2	7.0	2.8	?	?

Tab. 6　柱穴 SP20出土土師器計測表

	器　種	md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器小皿a	7.8	6.8	1.2	○	○
2	〃	7.8	6.2	1.0	○	?

Tab. 7　柱穴 SP61出土土師器計測表

	器　種	md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器小皿a	7.5	6.5	1.2	○	○
2	〃　坏	13.6	11.0	2.7	○	?

Tab. 8　柱穴 SP85出土土師器計測表

	器　種	md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器　坏	12.8	8.8	2.6	○	?

Tab. 9　柱穴 SP98出土土師器計測表

	器　種	md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器小皿a	10.2	7.6	1.4	○	○

Tab. 10　柱穴 SP107出土土師器計測表

	器　種	md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器　小皿a	8.2	7.6	1.2	○	○
2	〃	8.4	6.8	1.1	?	?
3	土師器　杯	14.4	9.8	2.5	○	○

Tab. 11　柱穴 SP112出土土師器計測表

	器　種	md	bd	h	糸切り	板状圧痕
計1	土師器小皿a	8.2	5.6	1.5	○	○
2	〃	7.4	5.6	1.2	○	?
3	〃	7.0	5.0	1.2	○	?
4	〃	10.0	5.2	1.9	?	?

Tab. 12　柱穴 SP158出土土師器計測表

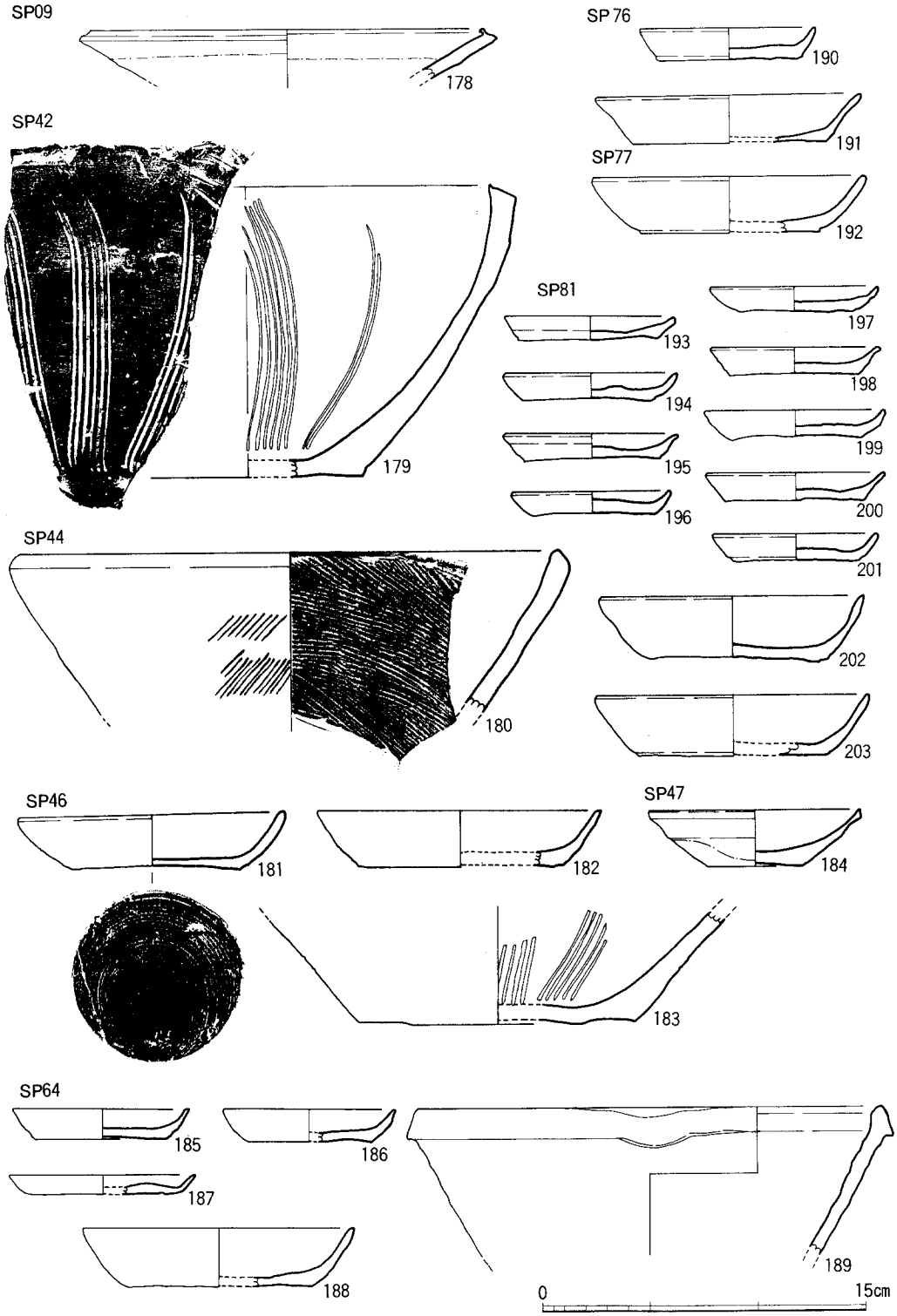


Fig. 49　各柱穴出土遺物(1)

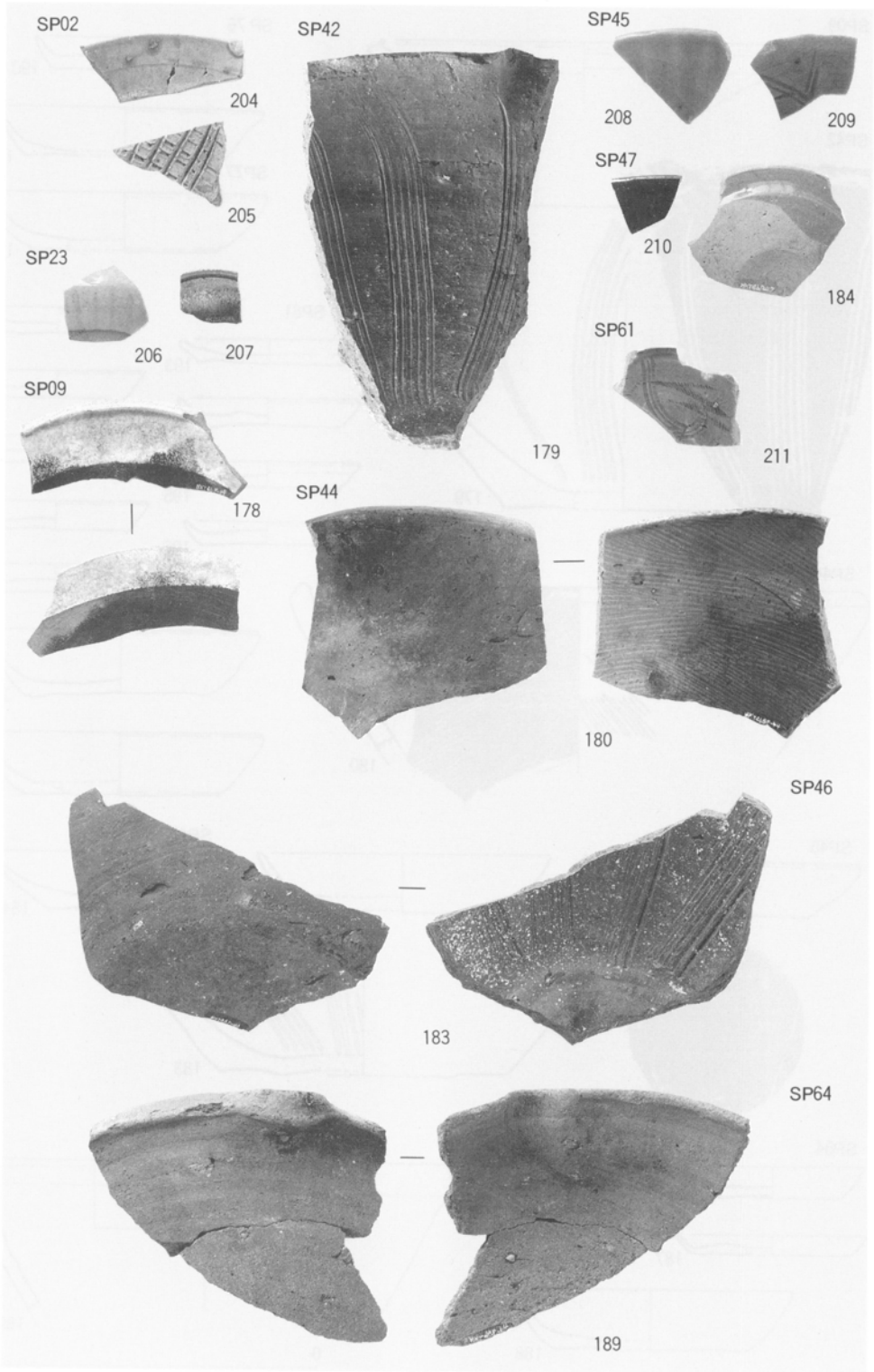


Fig. 50　各柱穴出土遺物(2)

g. SP76　土師器小皿ａは、8.2-6.8-1.5cm、杯ａは、12.4-9.0-2.2cmの各法量で、糸切り底である。

h. SP77　土師器杯ａは、内底中心までヨコナデ痕がみられ、糸切りの底部に板状圧痕はなく、全体に赤褐色を呈する。

i. SP81　土師器小皿と杯をまとまって検出した。いずれも糸切り底である。小皿ａ９点のうち、194、195、198、199、201は底部に板状圧痕がなく、内底中心までヨコナデ調整である。これらのうち、195、198のように、底部と体部の境が鋭角で、稜をもつ特徴がみられる。202の杯ａも完器であるが、板状圧痕はみられない。

j. SP85　219は土師質鍋（土鍋）で、底部を除く、全体の3/4を残している。淡褐色の精製土であり、内面は横方向にハケ目が丁寧に、こまかく調整されている。小さい鍔縁につくり、外面は煤によって茶黒色を呈する。口縁下から縦方向のハケ目、底部も不定方向にハケ調整されているが、胴中位は指頭痕のみがみられる。口径25.0cm、復元高11cmである。他に土師器皿２口が共伴する。

k. SP115　232は土師器杯で、比較的大ぶりであり、法量は14.4-9.8-2.9cmをはかる。糸切りで板状圧痕がみられる。233は青磁碗で、口唇を軽く外反し、外面に櫛目文をもっている。内外にかけられた釉は黄緑色を呈し、よく溶解して氷裂文はみられない。234も青磁碗で、外面にやや疏略なクシ目、内面にはヘラ刻み線がつけられている。灰色の釉であり、内底に降灰が著しい。腰以下は無釉であり、粗く削り出してザラザラの器肌をみせるが、畳付のみはミガキをかけたようで焼成後に平滑にしている。他に滑石製鍋の小片が出土している。

l. SP128　平瓦片を検出。灰色によく焼き締まる。凸面は縄目とみられるがヨコナデにより、ほとんど擦り消されている。

m. SP141　238の土師器皿は、非常に器高の低い、せんべい状の形をとる。橙褐色で、糸切り底に蓆状圧痕がついている。法量は9.2-6.8-0.9cm。239の青磁碗は、黄緑色釉がかかるが、内底は輪状に釉を削りとり、外面下半部以下は露胎である。粗く太いクシ目文と、内面にヘラにより花状文がみられる。240は同安窯系碗で、灰色釉がかかり、外底のケズリは粗放で、抉り取るような成形である。

n. SP156　244は竜泉窯製の青磁碗ではあるが、釉調がやや異る。非常に透明度の強い釉で、淡緑色を呈し、氷裂文はこまかく全面にみられる。内面の区画文は通有の竜泉窯南宋前半期の手法である。245は陶器鉢で、暗赤色で、胎土の内部は黒色を呈するザラザラの土である。

o. SP157　平瓦片を検出（246）。灰色の須恵質で、薄手のつくりである。凹面の布目はナデにより消され、凸面もヨコナデ調整されて叩打文の痕跡は見い出せない。側面は凹面側からの切断とワレである。

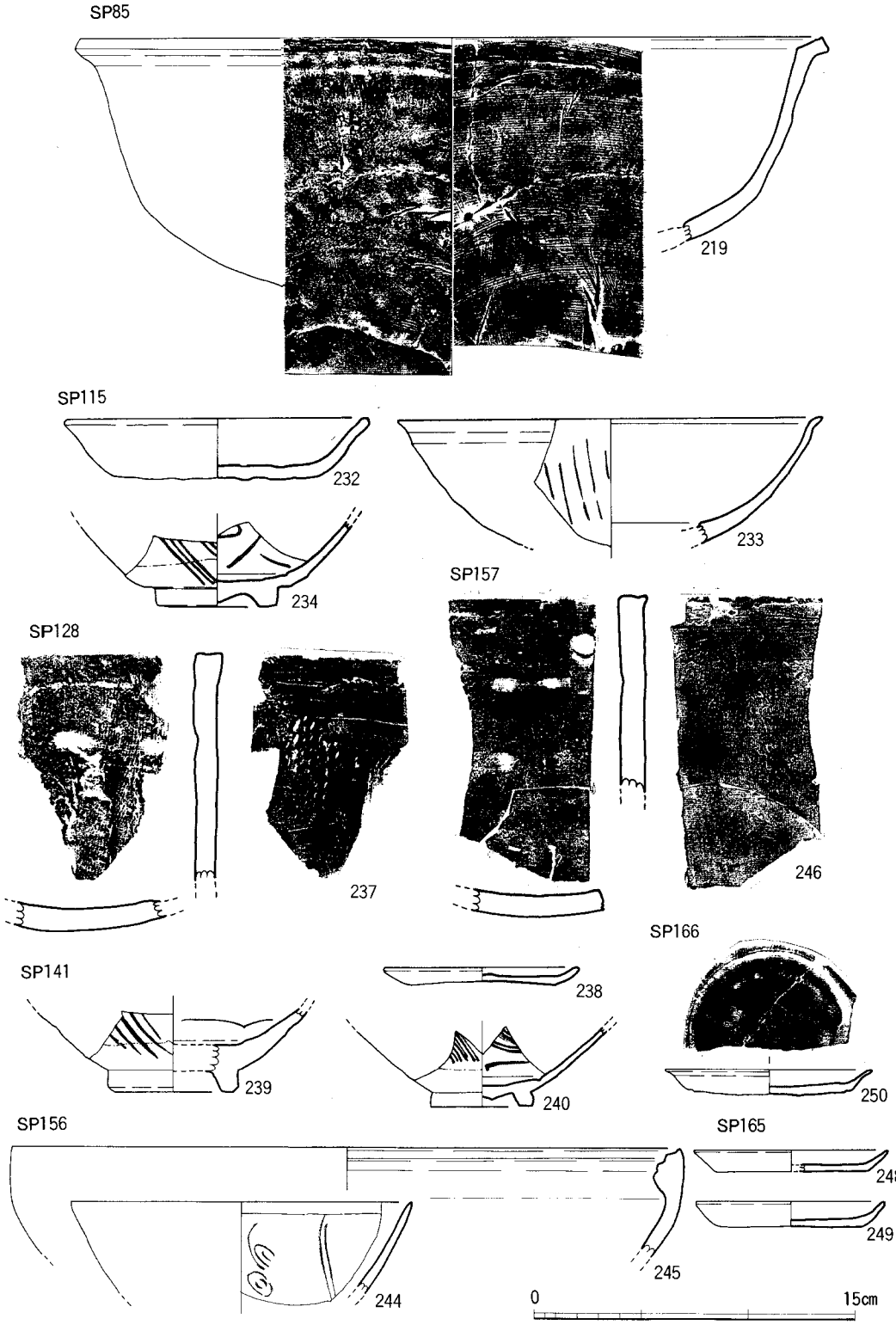


Fig. 51　各柱穴出土遺物(3)

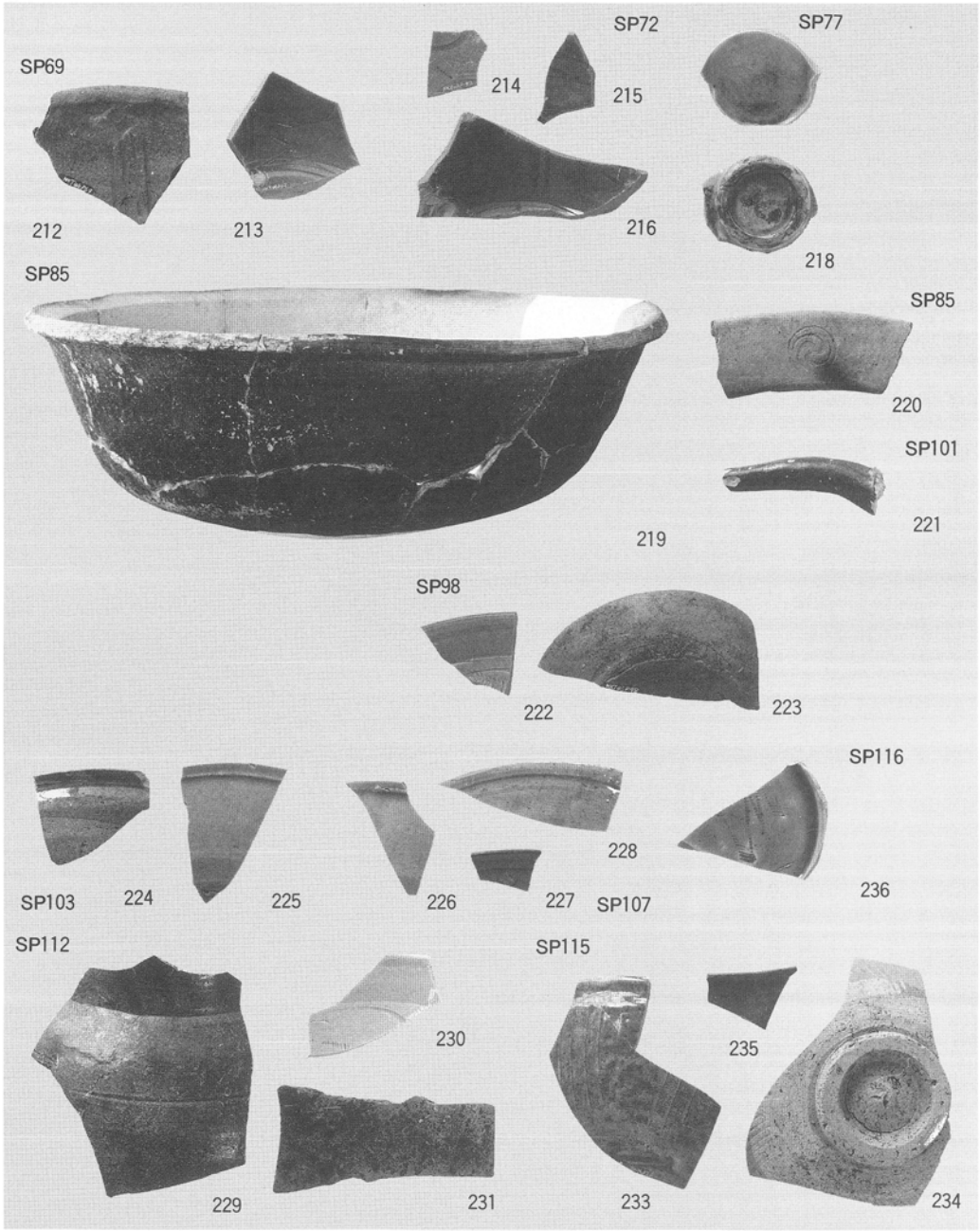


Fig. 52　各柱穴出土遺物(4)

p. SP165　2個の土師器小皿aの破片であり底部に板状圧痕と糸切り痕をみせる。法量も同じぐらいで、口径9.0～8.8、底径7.0～6.7、高1.0～1.2cmである。

q. SP166　土師器小皿が1点あり、糸切りで、深い板状圧痕をみせ、内底には強いナデ痕がある。

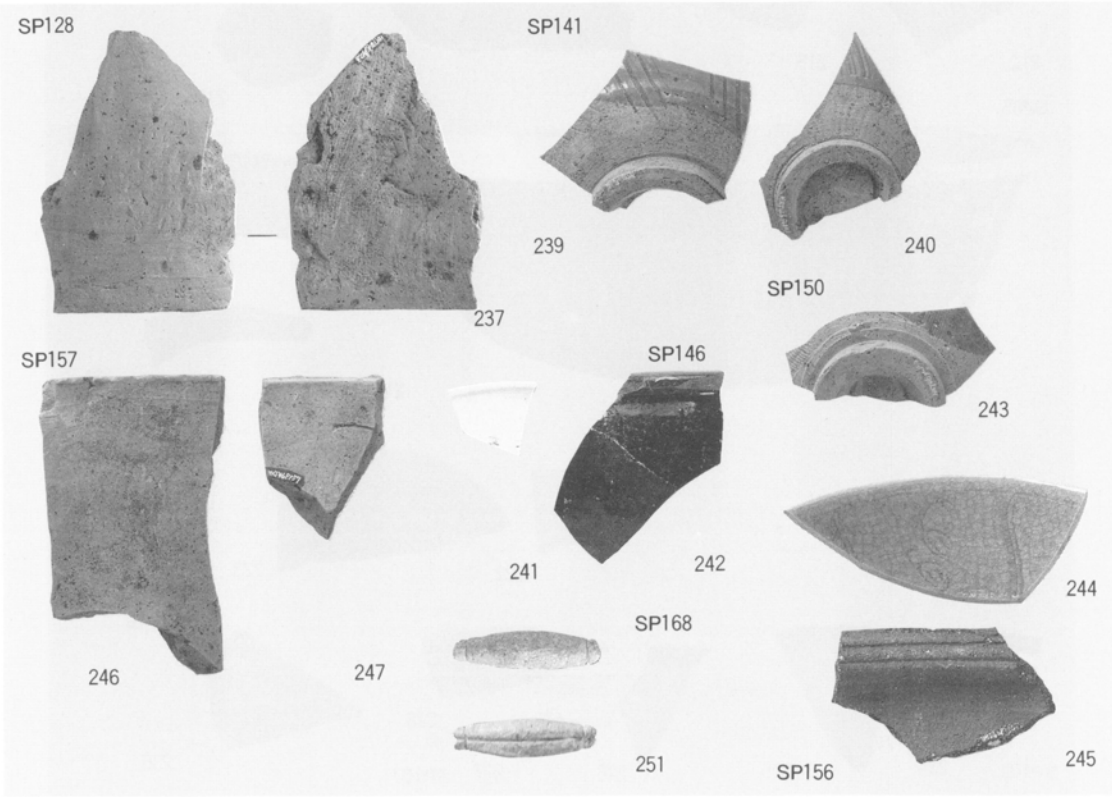


Fig. 53　各柱穴出土遺物(5)

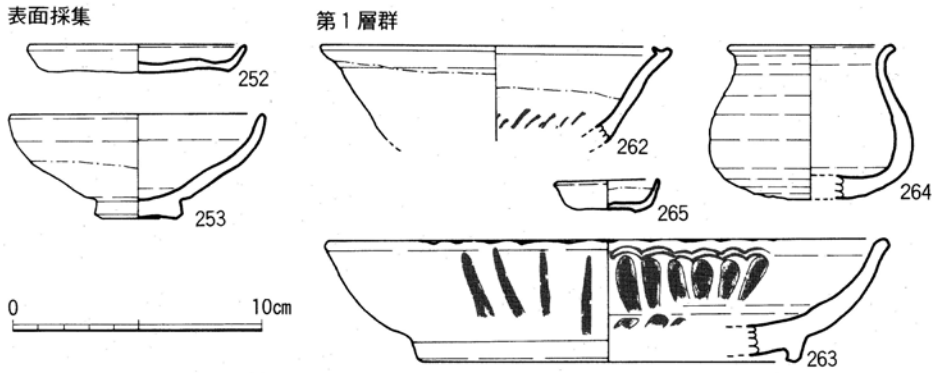


Fig. 54　表面採集／第1層群出土遺物

2）各層群の出土遺物

(1) 表採 (Fig. 54,55)　252は土師器小皿で、糸切りの通有品であるが、内面の体部側に溝をめぐらす形である。253は黒釉碗で、丸碗形、器高が高い。黒茶色で光沢をもつ釉が内面と、外面は上半に施こされており、それ以下は褐色でザラザラの胎土のままである。

(2) 第1層群出土遺物 (Fig. 56)　262は卸皿で、口縁の内外のみ灰白色の釉がかけられ、それ以下は露胎で、灰ないし褐色の胎土をみせる。内面に折釘状の卸目がのこる。263は、青磁竜泉窯皿で、透明の緑色釉が内外にかけられ、底部に輪状の露胎部をのこしている。施文は、外側が縦沈線文、内面は口縁際に複線の稜花線、その下から底にかけて鎬文で、口縁も稜花形につくる。胎土は灰色、明代前半期の竜泉窯製品である。264は白磁小壺で、内外に灰白色の釉がかかり、いわゆる安平壺の釉調に似ている。265は灰釉小盃で、糸切り痕をみせ、口縁の内側にわずかに灰釉をかける。

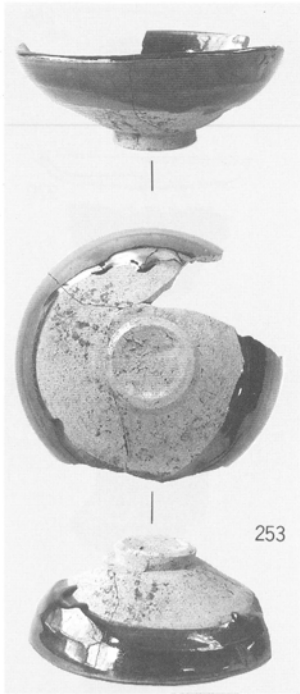


Fig. 55　表面採集遺物

(3) 第2層群出土遺物 (Fig. 57～61)　14世紀前半と考えられる遺物が比較的まとまりをもって検出できた。

土師器小皿の(266～287)では、266、269、278、282、285、287が共通した形態を示している。すなわち、外底は平坦で、糸切り痕があるが、板状（蓆状）圧痕はない。体部は直線

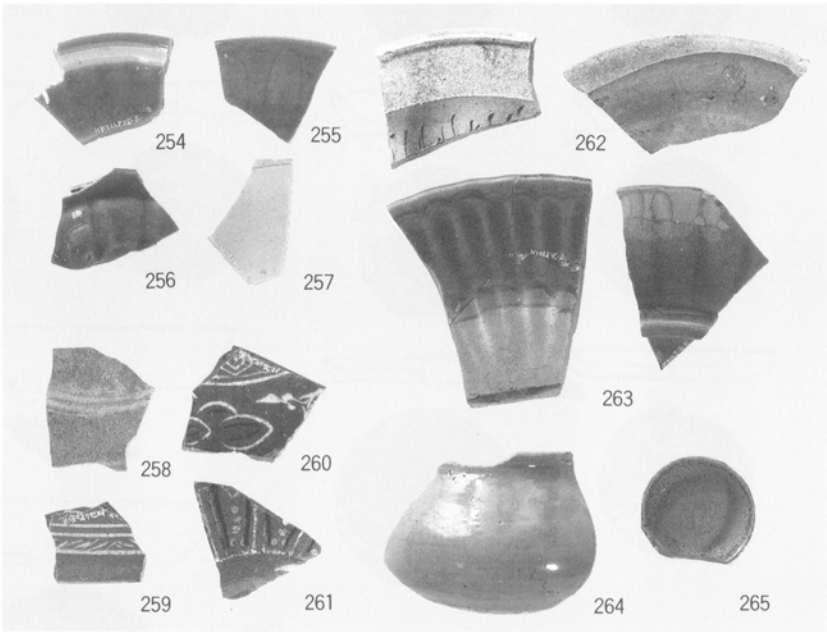


Fig. 56　第1層群出土遺物

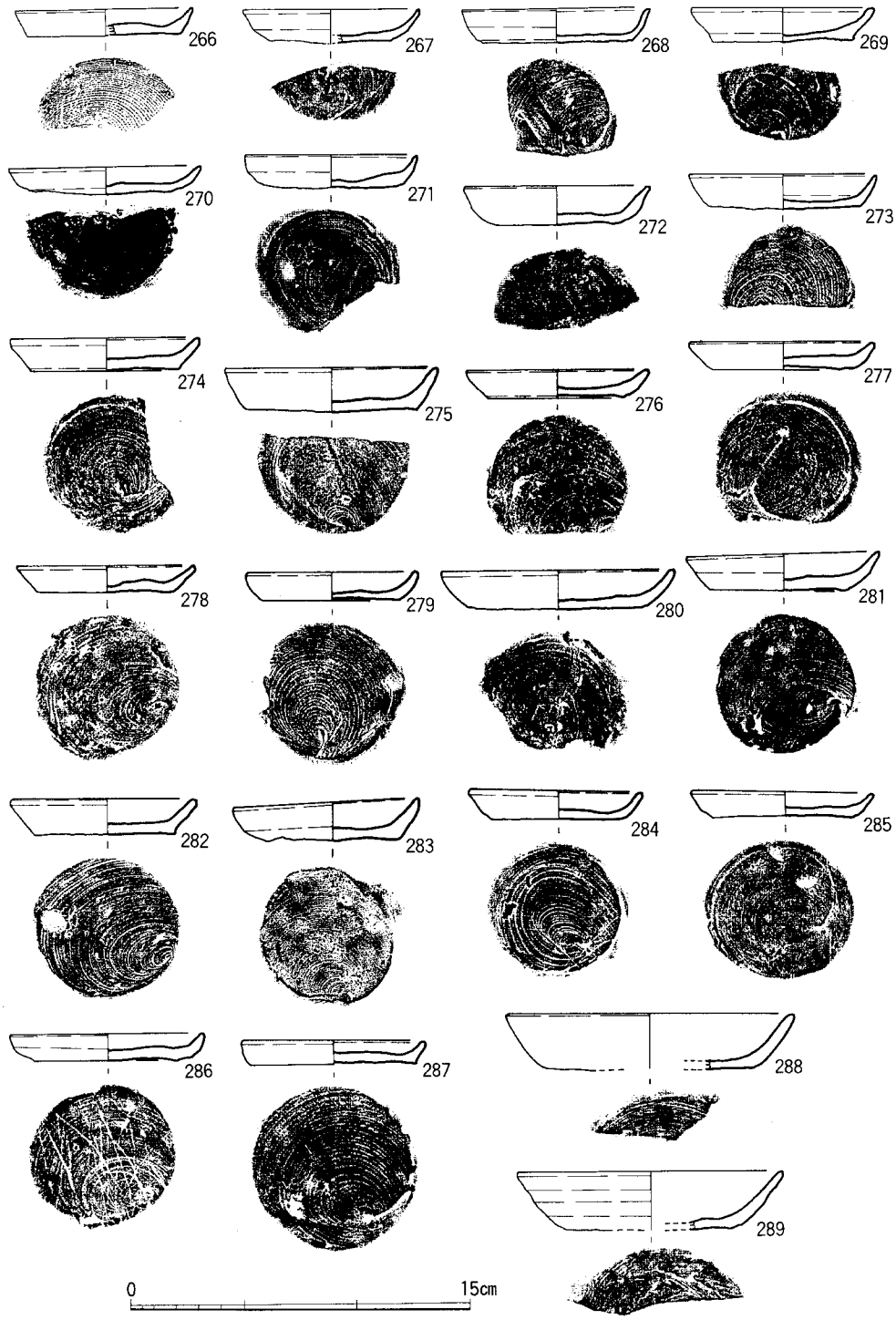


Fig. 57　第２層群出土遺物(1)

的ないしわずかに外反し、したがって底部との境は稜をもち、丸味がない。体部から内底中央までヨコナデ調整であり、内底にナデ調整は認められない。こうした一群の特徴的な小皿がこの時期の標識となる可能性を指摘したい。体部が内弯する形で、底部に板状圧痕が認められないものに、273、276、279、281、283、284、286とあり、上記の7口をあわせると、14口となり、全22口の過半数を占める。板状圧痕の無いものが混在するのが、この時期の特徴ではなかろうか。278は内底中央がヘソ状に凹み、283では逆に突起している。以上これら小皿はすべて糸切り底である。なお法量の計測値は別表のとおりである。

番号	口　径	底　径	高	糸切り	板状圧痕
266	7.8	6.8	1.1	○	×
267	7.8	5.2	1.5	○	○
268	8.2	6.8	1.5	○	○
269	8.0	6.4	1.5	○	×
270	8.4	6.0	1.2	○	○
271	7.6	6.0	1.4	○	○
272	8.2	5.8	1.7	○	○
273	8.2	6.6	1.5	○	×
274	8.2	6.4	1.4	○	×
275	9.4	7.6	2.0	○	○
276	8.0	6.0	1.3	○	×
277	8.0	6.2	1.2	○	○
278	7.7	5.9	1.3	○	×
279	7.4	6.0	1.3	○	×
280	10.2	9.8	1.7	○	○
281	8.4	6.0	1.6	○	×
282	8.1	6.1	1.7	○	×
283	8.1	5.8	1.7	○	×
284	7.0	5.8	1.4	○	×
285	7.5	6.2	1.2	○	×
286	8.4	6.2	1.2	○	×
287	8.0	7.2	1.1	○	×
平　均	8.1	6.4	1.4		

Tab. 13　第2層群の出土土師器皿計測表

土師器杯a（288～295）もすべて糸切り底であり、292～295の4点は外底に板状圧痕はなく、内底中心までヨコナデ調整である。逆に板状圧痕がみられるのは290のみであり、他は小片のため不明である。体部形状の異なるのは292で、平らな底部と外反する体部からなり、その境は明瞭である。295も口縁部でやや内側にまげるが、体部は全体として直線的である。296は赤褐色を呈する土器で、肉厚で坩堝かとみられる。しかし使用された痕跡は認められない。土師質の壺形品であり、内側は凹凸がみられナデ調整され、外面の表面は剝離しているがナデ調整である。赤褐色、用途不明。

白磁のうち297は、芒口碗で灰色に発色した釉と口縁部の露胎との境は赤変する。内面に回文帯とその下に花文が一部残っている。298は灰白色釉で、ロクロの凹凸がつよい。299は淡緑灰色の透明釉がかけられた皿で、内底に花文が型押しされている。高台は三角形の断面で、先端は尖り、外底は薄く黄白色の釉がかかる。300～303は、いわゆる枢府白磁皿、碗である。300は皿で体部の器肉は薄く、口唇部をわずかに肥厚する。内面の細隆線の下に開花する牡丹文を唐草文でつないでいる。型押しは他に比らべて鮮明であり、いわゆる卵白釉は少し灰色をおびている。他の釉色もほとんどこの色調である。口径は14.9cm、高さは4.5cmに復元できる。301は底径4.8cmの皿で、内底に不鮮明ながら牡丹花を四配し、圏線をめぐらして内側面にも印花文がみえるがより不鮮明であり輪郭は判別でき難い。高台畳付を面取りし、以下外底は露胎となり、中央は兜巾状に削っている。高台内側に茶色の砂（窯渣）が全周にわたって付着している。口径は復元すると15.5、高さは4.5cm程度であろう。302は碗形品で、体部中位で反転す

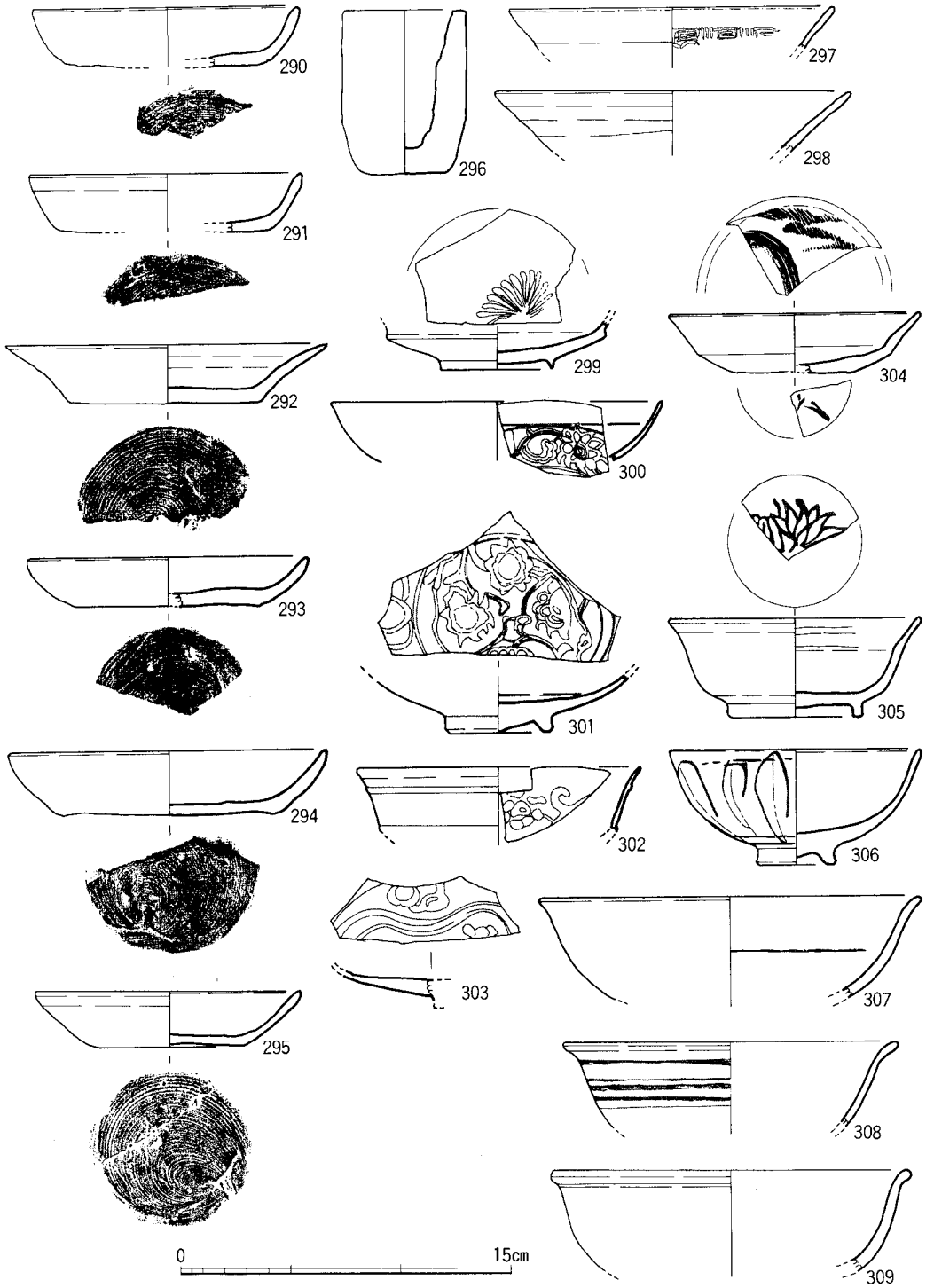


Fig. 58　第 2 層群出土遺物(2)

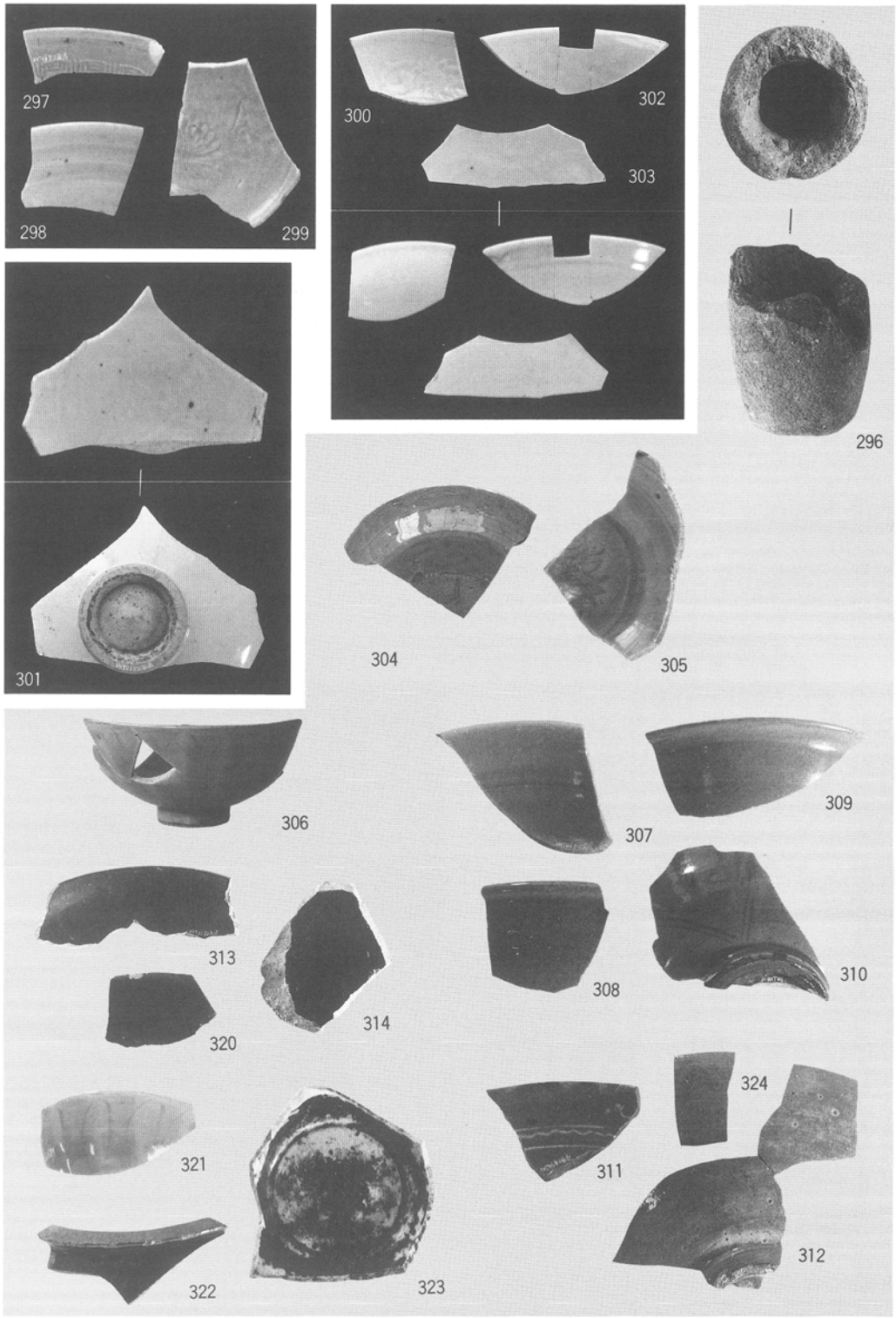


Fig. 59　第２層群出土遺物(3)

る形のものとみられ、反転部の隆線付近以下を欠損している。口縁をわずかに肥厚させ、その直下にも一本の隆線をめぐらす。内面には牡丹唐草文とみられる印文があるがほとんど不鮮明である。復元口径12.8cm、高さは4.0cm、底径は3.7cm位になるであろう。303は皿の底部で、竜文かとみられる巾８ミリ程の帯文がめぐり、その両側に雲文のような不鮮明な文様がみえる。図の左上の破面に漆とみられる黒茶色のものが付着しており、補修のためかと考えられ、枢府白磁に対する取扱いをうかがわせる。この他に303と同一個体の小片１がある。

304～310は青磁である。304は同安窯系皿のうちでも粗製であり、鉄分の多い胎土のために口

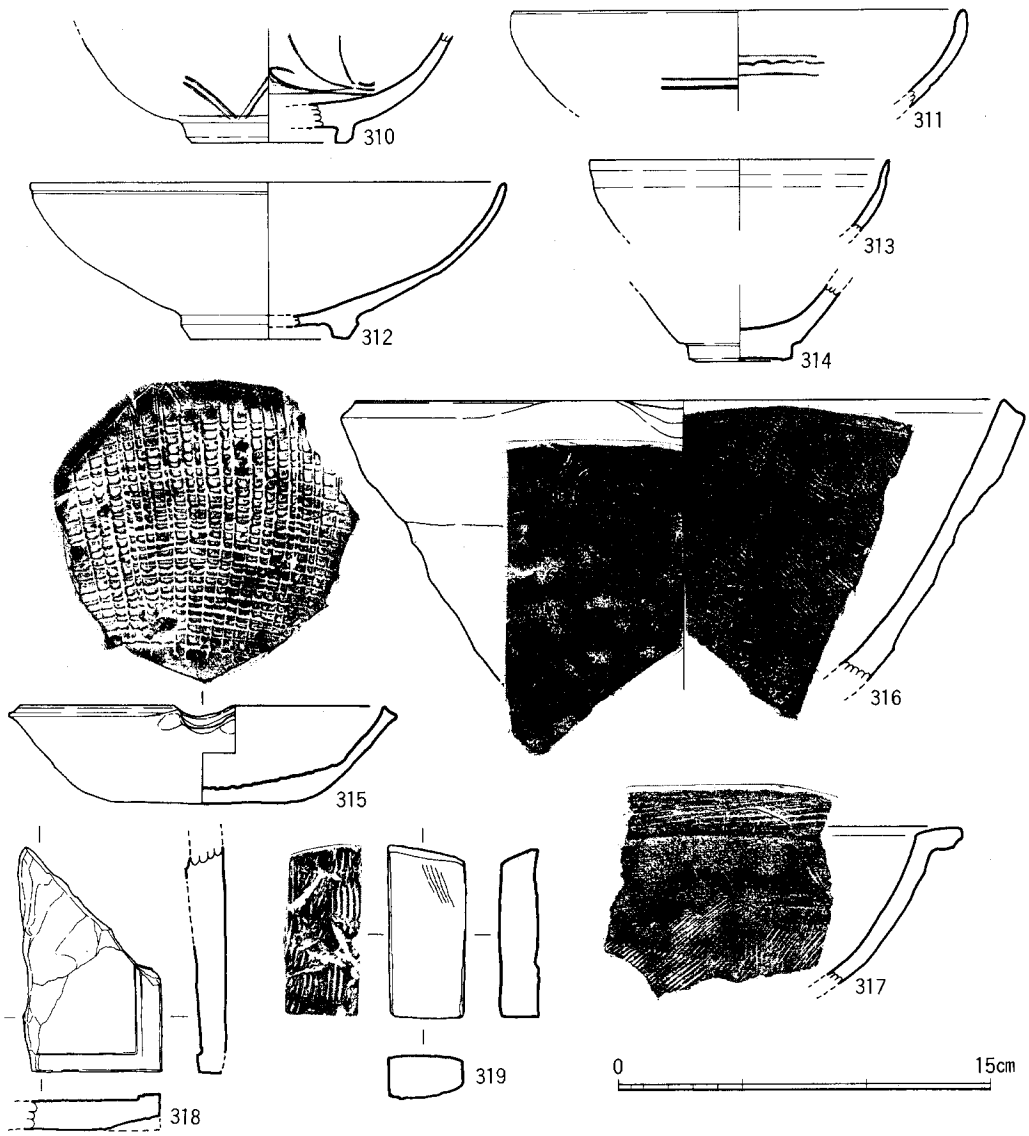


Fig. 60　第２層群出土遺物(4)

縁部も釉下で赤変している。305は豆青色の透明釉が畳付を包んでかけられ、露胎の外底中央には黒煤が付着している。外側は無文で氷裂がみられ、内面は口縁下に沈線文、見込みに蓮華文のスタンプが明瞭にみられる。306は、蓮弁文の小碗であり、刻まれた各弁は不揃いで、弁先は丸く、鎬は中央を通っていない。高台ちかくに重圏線をめぐらしている。畳付のみ露胎で、その一部に黒色の窯滓状のものが固着し、釉際は赤変している。釉は豆青色で滑らかにとけ、氷裂文はみられない。ほぼ2/3を遺存している。307は腰のはった碗で、内面に一条の圏線をめぐらせるほかは施文はない。胎土は灰色にちかく、透明釉もやや明度のおちた緑色である。308も器形はよく似ており、口縁を外反させるタイプである。体外面に浅い弦文がみられ、釉は灰緑色で氷裂はみられない。309は口縁を玉縁状に肥厚させる形で、胎土は灰色でやや粗く、釉は厚目にかけられ、こまかい氷裂文がみられる。310の碗は、高台脇まで豆青色透明釉がかけられ、畳付から外底は赤茶色を呈する。内面に花文の片切彫文、外面には複線により幅広の蓮弁文が刻まれており、口縁帯にも施文がありそうである。

311、312は高麗青磁で、311は白象嵌の波線文帯が内面にのこり、

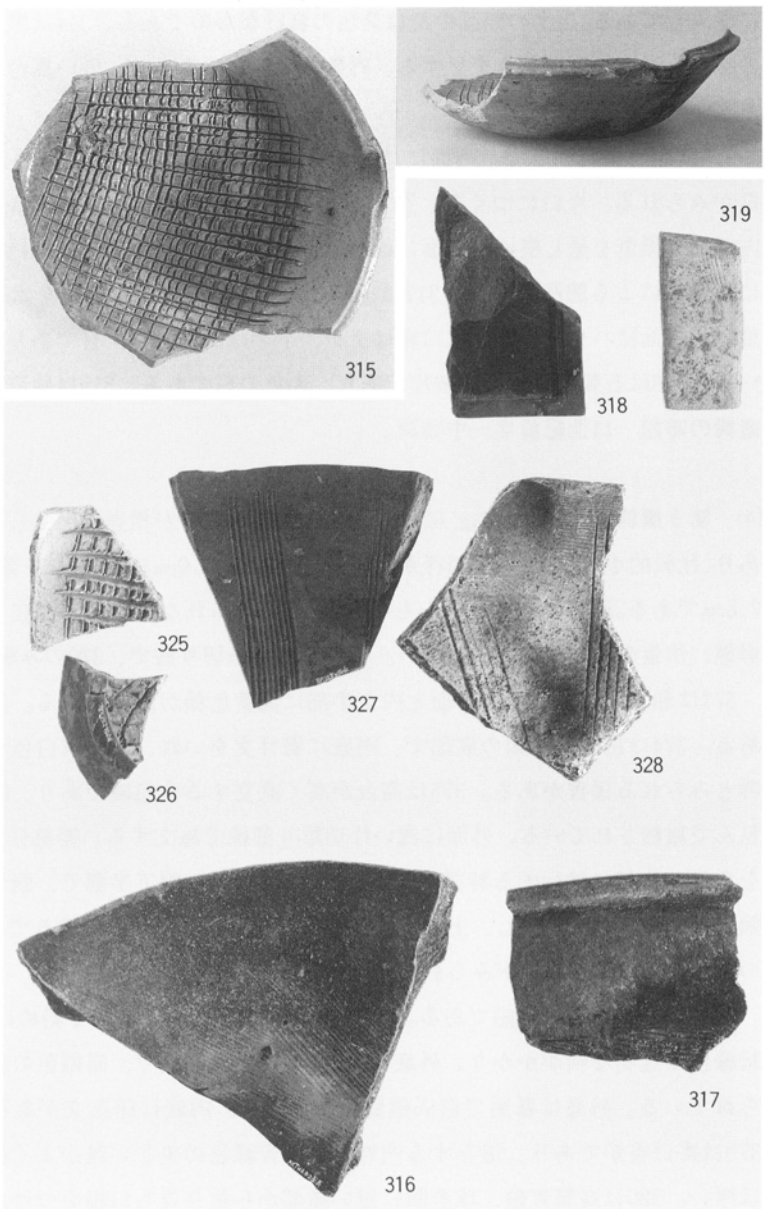


Fig. 61　第２層群出土遺物(5)

外面にも２条の白線がみられる。胎土は灰色で、緑灰色釉がかけられ、口唇内外は斑点状に茶色を呈している。312は深皿で、暗灰色で透明な釉が畳付を含めて内外に総釉となっており、畳付に粗砂が固着している。高台は太く短く、外側から幅広く面取りしている。小片のため法量は正確に図化できない。

313、314は黒釉碗で、313は柿釉に発色し、匙口の部分は内外とも光沢のない茶色、それ以下は光沢をもち、内面では光彩を生じた柿釉となっている。胎土は白灰色に、こまかい黒点が無数に混入している。出土の類品中では発色の良好なものである。314は黒色釉で、胎土は灰色、露胎の腰から外底は表面褐色を呈する。外底は糸切り痕をみせ、低い高台の削り出し部分を平滑にみがいている。

315は瀬戸窯製卸皿で、内面には薄く灰釉がかけられているが、外面は露胎で、底に糸切り痕がみられる。片口につくり、復元口径は14.6cmをはかる。316は須恵質の片口鉢で、胎土も内部まで黒色を呈し堅い。内面にはハケ目が斜目方向に無造作につけられ、外面はハケ目の上に指頭痕による凹凸が多い。317は土鍋とみられる破片で、口縁を水平に折りまげている。調整は、内面にハケ目、外面は口縁はナデ、下半はあらいハケ目であり、その部位に煤が付いている。318は石製硯の陸部の破片であり、赤色の石である。319は砂岩質の砥石である。

遺構の時期　14世紀前半～中葉期。

(4)　第３層群出土遺物（Fig. 62～67）　土師器小皿ａが相当量出土している。すべて糸切りであり、比較的小形品が多い。口径が8.5cm以上の350、7.0cm以下の346を除く35個の口径の平均は、7.8cmである。底部に板状圧痕をもつものと、認められないものが混在しているが、両者の間に形態、法量の相違は見い出し難い。杯もすべて糸切り底で、370のみ板状圧痕が確実にない。

373は瀬戸窯の卸皿で、外面と内上半部に淡黄色釉が薄くかかる。無釉の底部に糸切り痕がある。374は白磁碗Ｖ類の底部で、内底に櫛目文をいれ、釉は灰白色で透明である。外底に花押とみられる墨書がある。375は高台が高く直立する白磁碗であり、灰白色で透明釉が畳付を包んで施釉されている。外面に浅い片切彫り刻線で施文する。腰部分を面取り状に削り、角度をもって体部に移行する特徴がある。376は白磁壺の胴下半部で、胴つぎを境として下側は、鎬蓮弁文を細線で表現し、上側は花文かとみられ、いずれも型造りである。釉は灰青色、内側の一部にも薄く透明釉がみられ、胎土は灰白色である。

377～379は竜泉窯青磁である。377は高台が低く、やや幅広で斜めに削る形の浅い碗である。暗緑色で透明な釉がかかり、外底は露胎。378は皿形品で、暗緑色の釉が高台際まで厚くかけられている。外底は露胎で白灰磁質土がみえる。内底に印花文があるが形が不鮮明である。379は寄口香炉であり、遺存する内外ともに青緑色の美しい釉がよく融けてかかっている。釉は厚い。380は高麗青磁、球形胴に短い頸部から折り返し口縁をつけた壺。肩に角張った蓮弁

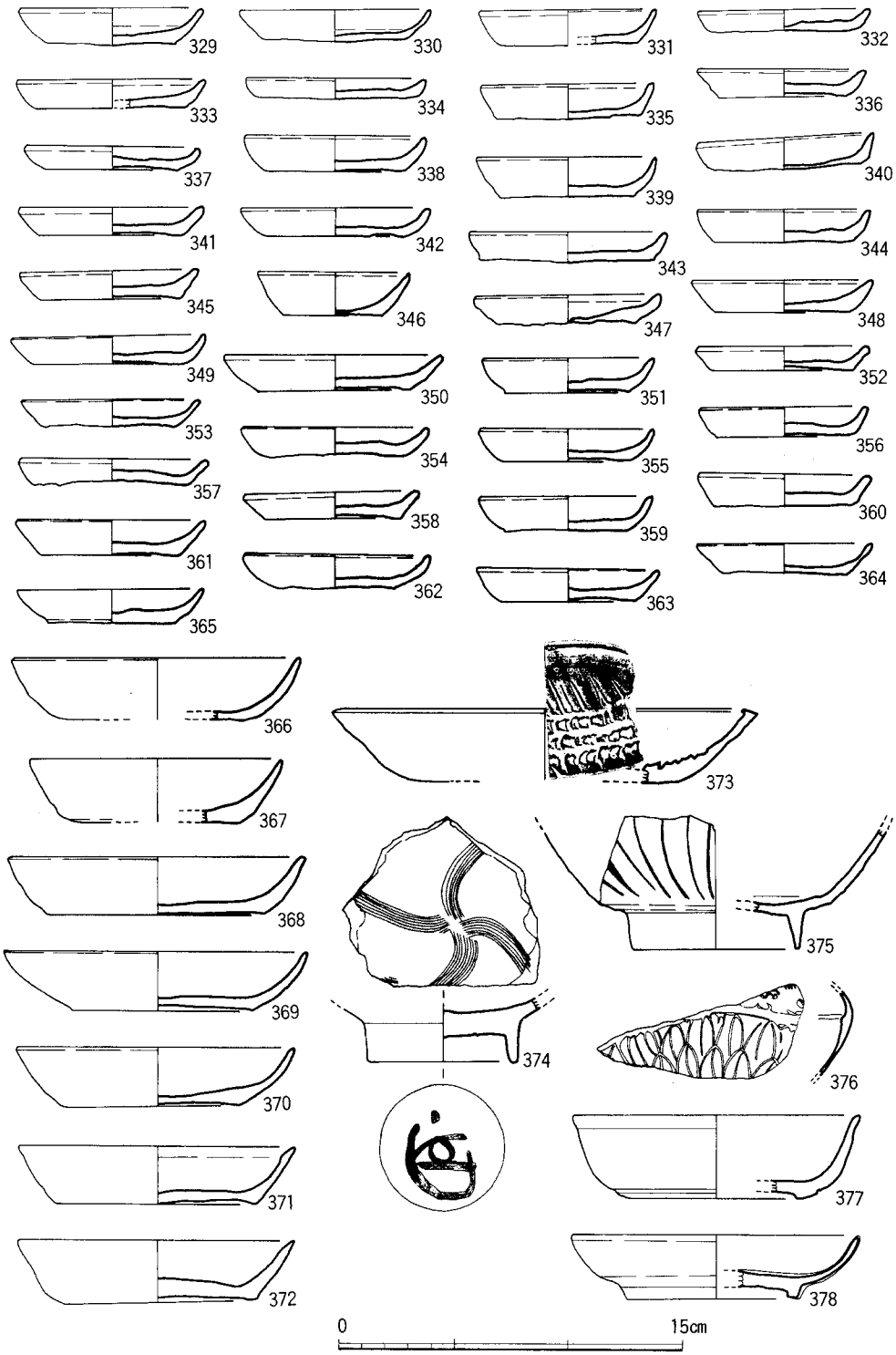


Fig. 62　第 3 層群出土遺物(1)

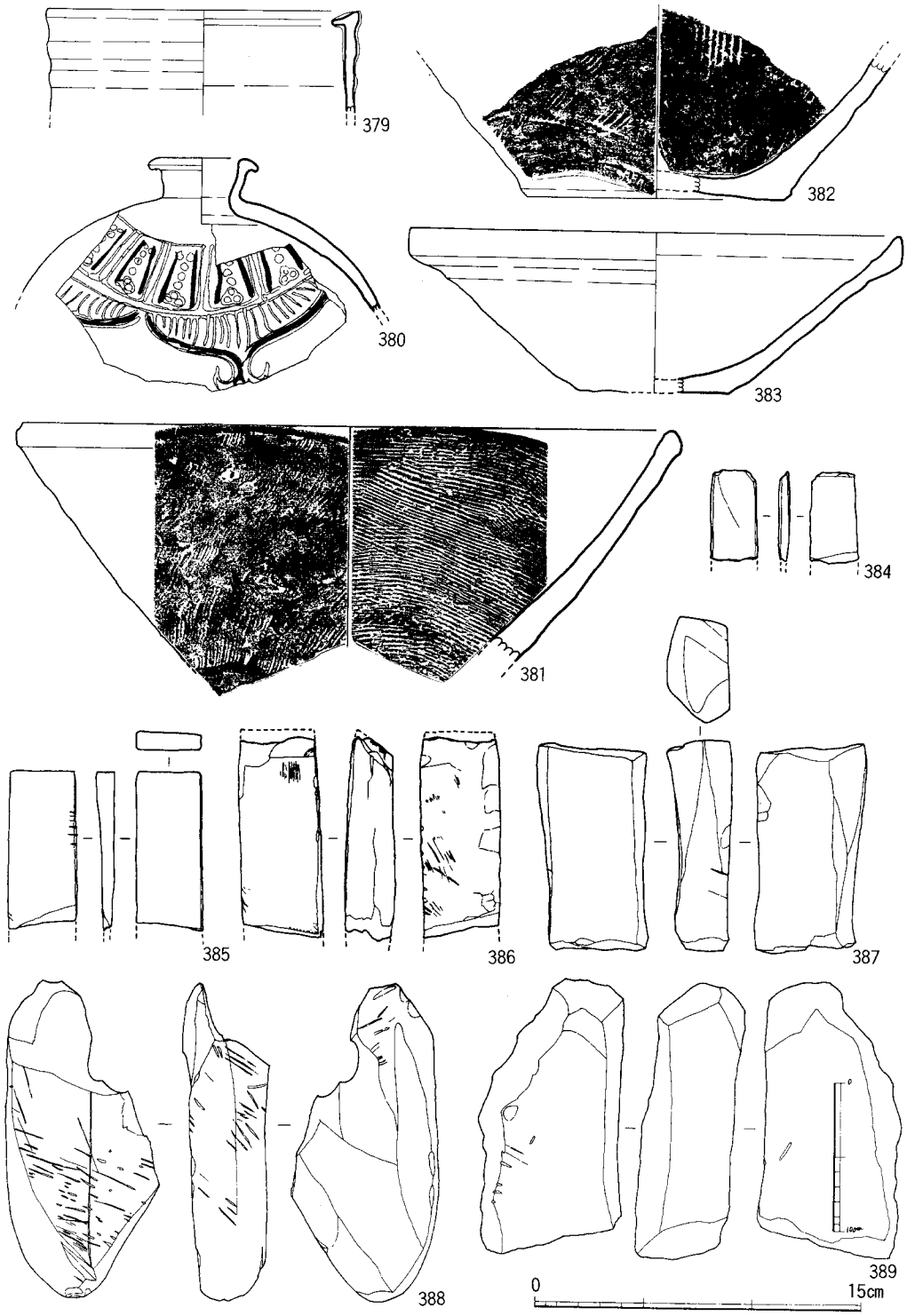


Fig. 63　第 3 層群出土遺物(2)

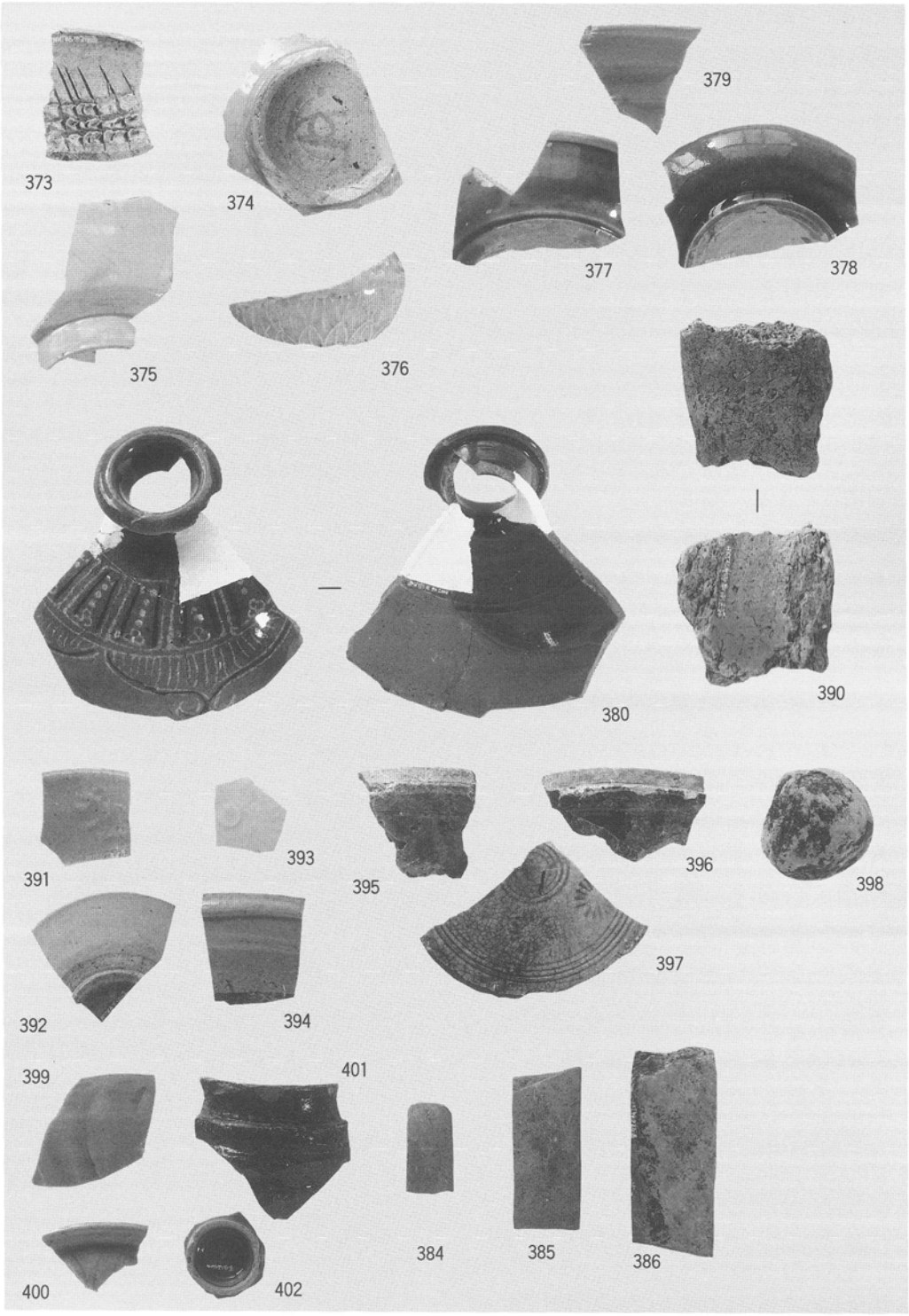


Fig. 64　第 3 層群出土遺物(3)

を白象嵌で輪郭し、黒線を配す。その下に如意頭文形の界線を白黒で表現し、白線20本を入れる。光沢透明釉がかかり、こまかい氷裂文が全体にみられる。内面は一部施釉があるが、灰色の露胎となっている。

381～383は鉢形品である。381は須恵質で、灰黒色を呈し、外面は右上から左下方向へのハケ目の上に指頭痕が粗くみられる。粘土紐のつなぎ目が確認できる。382は同質の底部で、7本単位の卸目があり、炭化物の焦げ痕がこびりついている。底部の調整は、ハケ目の上からミガかれ、少し平滑になっている。383も須恵質の鉢で、口縁は黒色を呈し東播系の製品とみられる。

384～389は砥石で、384～386は頁岩質の仕上砥、387～389は荒砥であり、388は安山岩質、他の2点は砂岩である。403は花崗岩製の磨石。

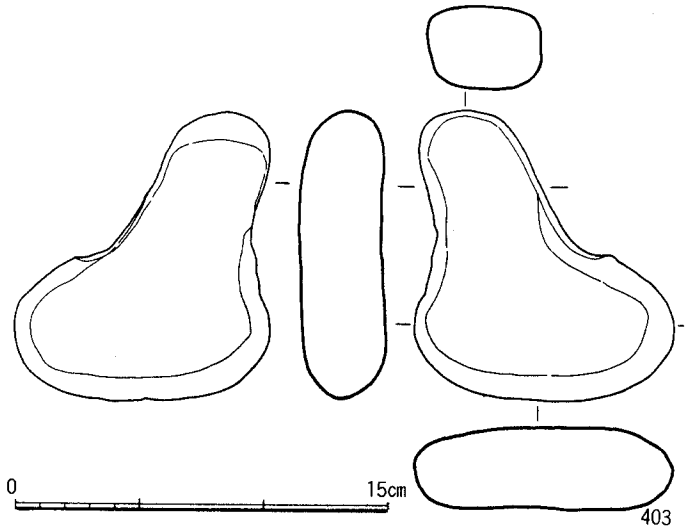


Fig. 65　第3層群出土遺物(4)

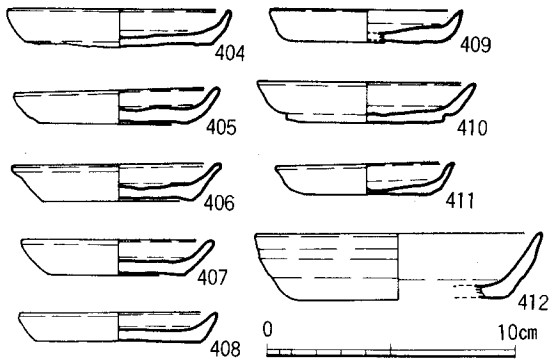


Fig. 66　第3層群南側／同中心杭付近出土遺物

第3層群南側出土遺物　土師器皿はすべて糸切り底で、板状圧痕のあるものと無いものが混じる。陶磁器では、瀬戸窯卸皿、竜泉窯蓮弁文碗、同安窯系皿、白磁芒口碗、同玉縁碗などと、石鍋片を検出した。

(5)　第4層群出土遺物（Fig. 68～70）　413～417の土師器皿、杯はすべて糸切りである。414の皿は9.4-7.4-1.9cmと413に比較してやや大きい。415の杯も口径18.4cmと大きい。417は口縁を強くヨコナデして外反しており、底部の中心の器肉は非常に薄い。

418～421は白磁である。418、419はⅧ類に属するが、そのなかでも粗質である。418の施釉は体部中位までで、それ以下は赤褐色の胎土をみせている。透明な釉はこの胎土をうつして灰

色ないし赤灰色になっており、白磁のイメージからは遠い。419は内外ともに口縁から少し下がったところまで釉がかけられ、灰色に発し、露胎部分は褐色ないし黄褐色を呈している。この両者とも口縁を水平に曲げる点は共通している。420はⅤ類、421はⅣ類のいずれも碗で、灰白ないし黄灰色でピンポールの多い釉面である。421の口縁内側に涙痕がみられる。422、423は青白磁合子で、422はやや灰色気味の白色透明釉で、甲部に小さな花文を散らし、側面は丸味をもち、のっぺりした感じを与える。423は菊座をいれ、甲部には6弁の草花文を型押しする合子蓋で、青白色でこまかい氷裂文の釉がかけられている。

424～427は青磁で

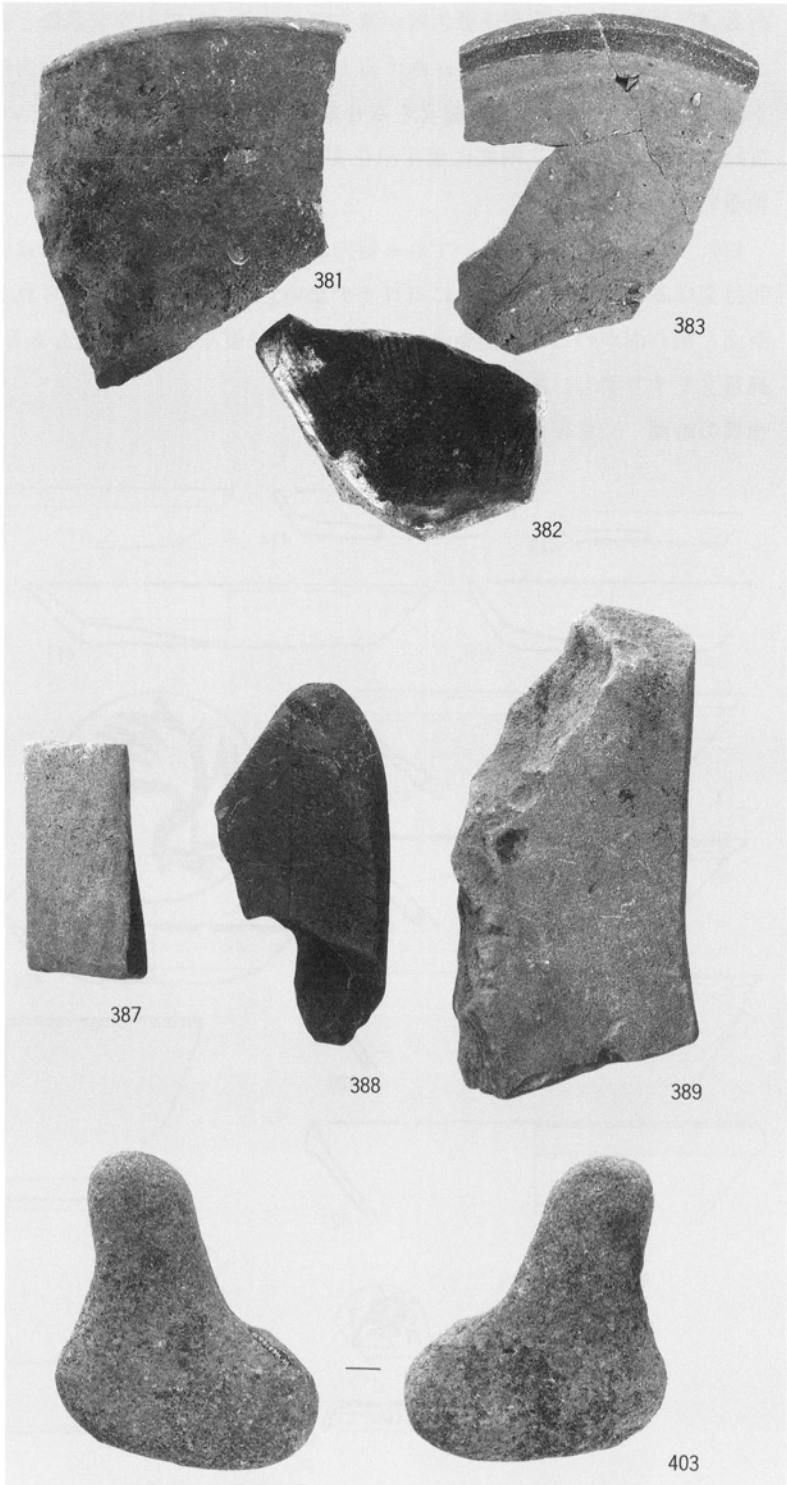


Fig. 67　第3層群出土遺物(5)

ある。425は無文であるが淡緑色釉が腰までかかり、424の同安窯系皿と似ているが、胎土など少し異なっている。426は内面を区画するタイプの竜泉窯青磁で、区画内の花半は半裁ではあるが丁寧で、内外面には大きく氷裂文をみせる黄緑色透明釉がかけられている。427は鎬蓮弁文碗で、黄緑色釉がかけられ、内底に蓮花印花文、外底は露胎で、畳付に焼台痕が付いている。428は茶釉壺である。

429、430は平瓦であり、いずれも器肉がうすく、429は褐色、430は灰褐色を呈する。凸面に叩打文はみとめられず、ともにヨコナデないしナデ痕が全面にみられる。側面は内側からの切断面と割れ面がのこり、樋巻造りである。429は熨斗瓦の可能性もある。431は丸瓦で、凸面は縄目文をすり消し、内外ともに黒色を呈する。

遺構の時期　13世紀前半代。

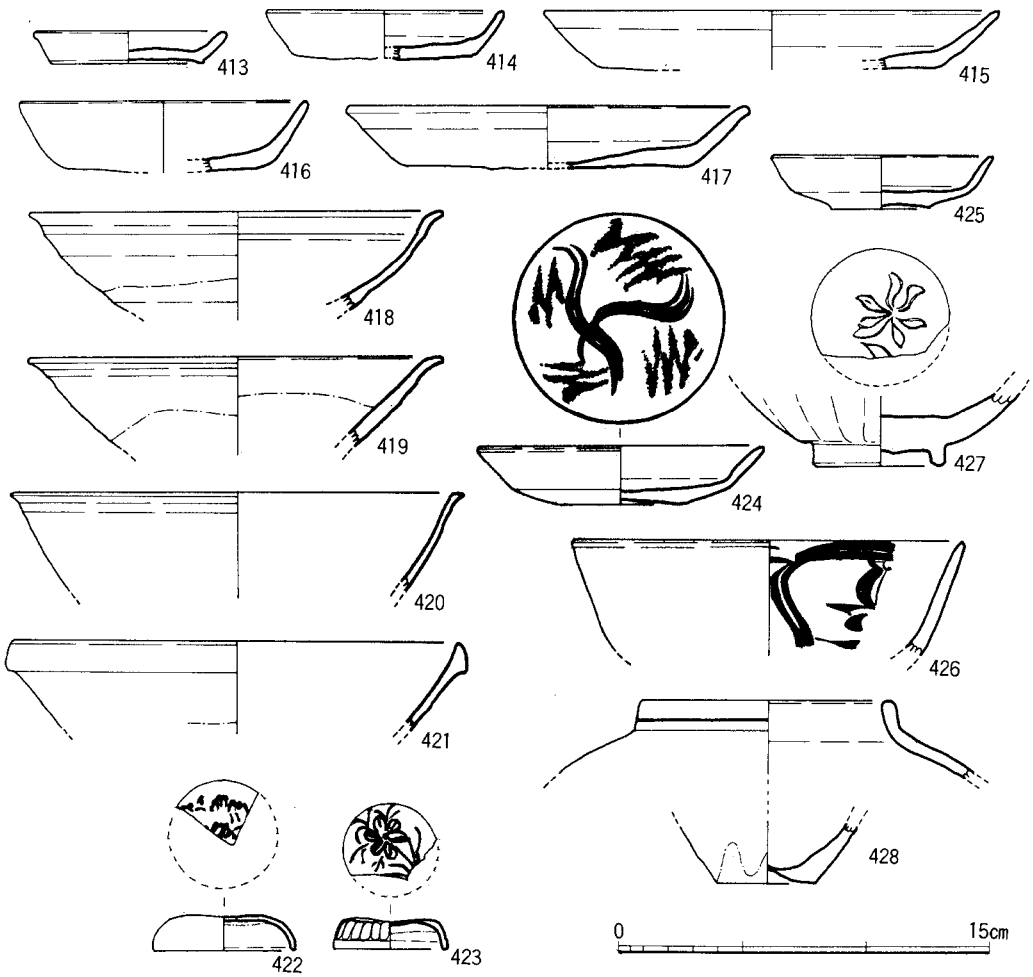


Fig. 68　第４層群出土遺物(1)

(6) 第5層群上部（5a～5i層）出土遺物

(Fig. 71,72)　436～439は白磁である。436は玉縁口縁の通有品であるが、釉は口縁下までであり、体部以下はほとんど露胎で褐色の土をみせている。釉も灰色で質がわるい。437はピンポールの多い灰白色釉。438は皿で外面の残存部は無釉で回転のキズが付いている。墨書は「𦍒□」であろうか。439の櫛目文の碗にも墨書がみられるが判読できない。ピンポールの多い黄白色釉が腰以上にかけられている。440の青磁は良質の竜泉窯製品で、片切彫りとこまかい櫛目文がみられ、釉は暗緑色、透明、光沢をもち美しい発色をみせる。

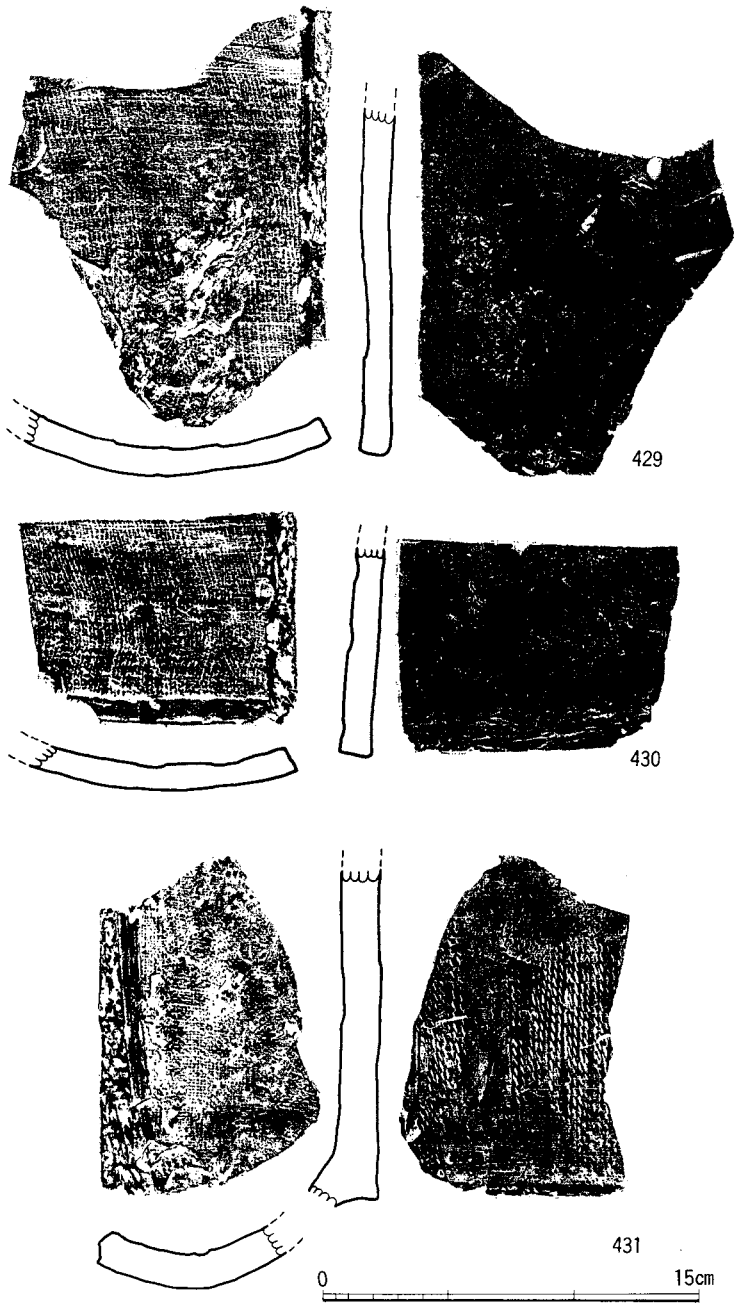


Fig. 69　第4層群出土遺物(2)

441は片口の瓦質鉢である。内面はハケ目、口縁はヨコナデ、外面はナデ調整がされ、黒色ないし灰色を呈する。442、443は丸瓦で、いずれも凸面は縄目文をすり消している。444は軒丸瓦で、筒部との接合ははめこみではなく、単純に接着し、内側から別に粘土を補強している。

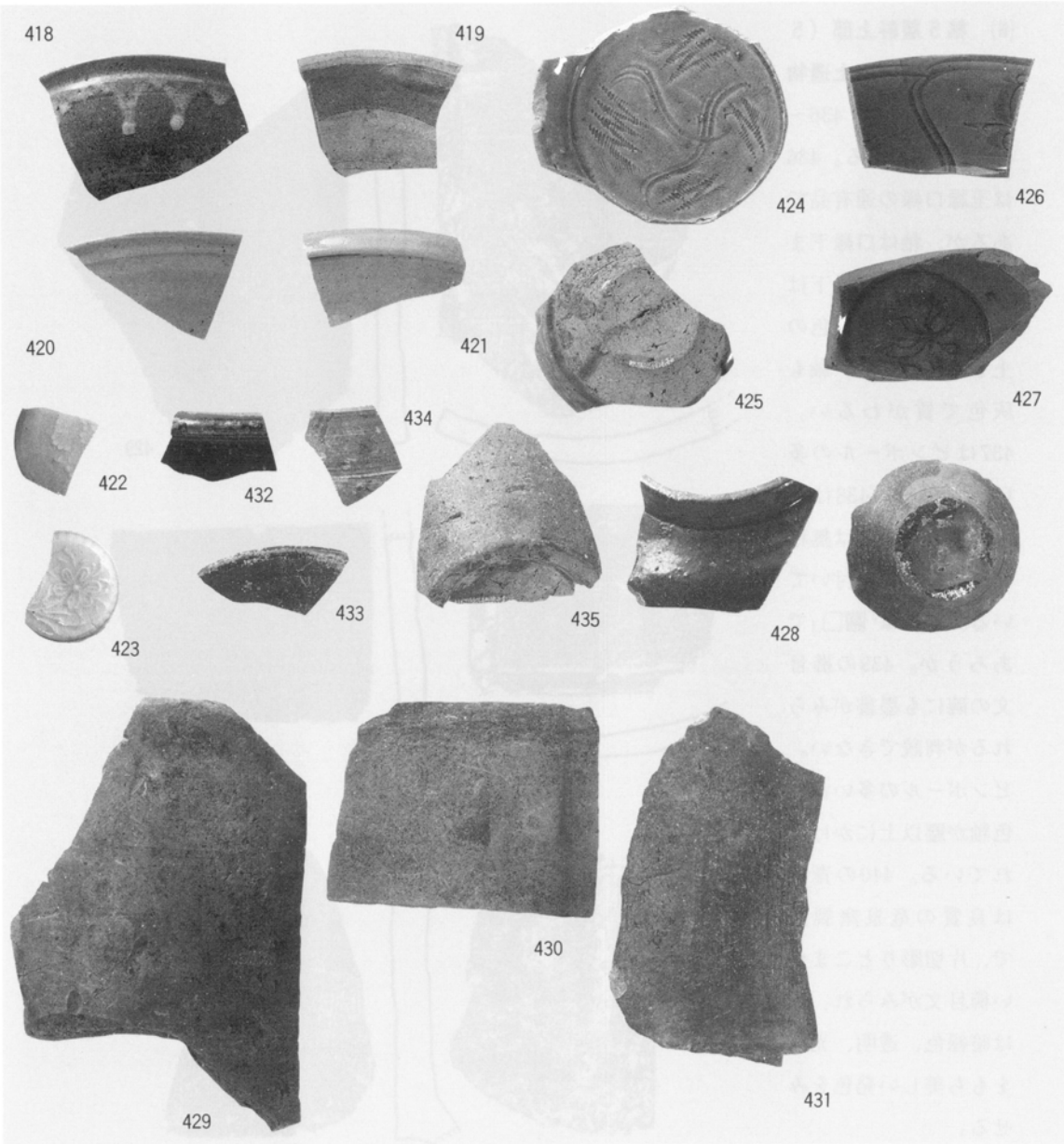


Fig. 70　第４層群出土遺物(3)

遺構の年代　12世紀後半。

(7)　第５層群出土遺物（Fig. 73～76）　土師器、瓦器、陶磁器などを検出した。土師器はすべて糸切り底で、板状圧痕がみられる。449、450は小皿ａで、449の外面に赤色顔料がうすく塗られている。450は淡褐色を呈し、体部下半を強くおさえ、中位に稜線が生じている。451～

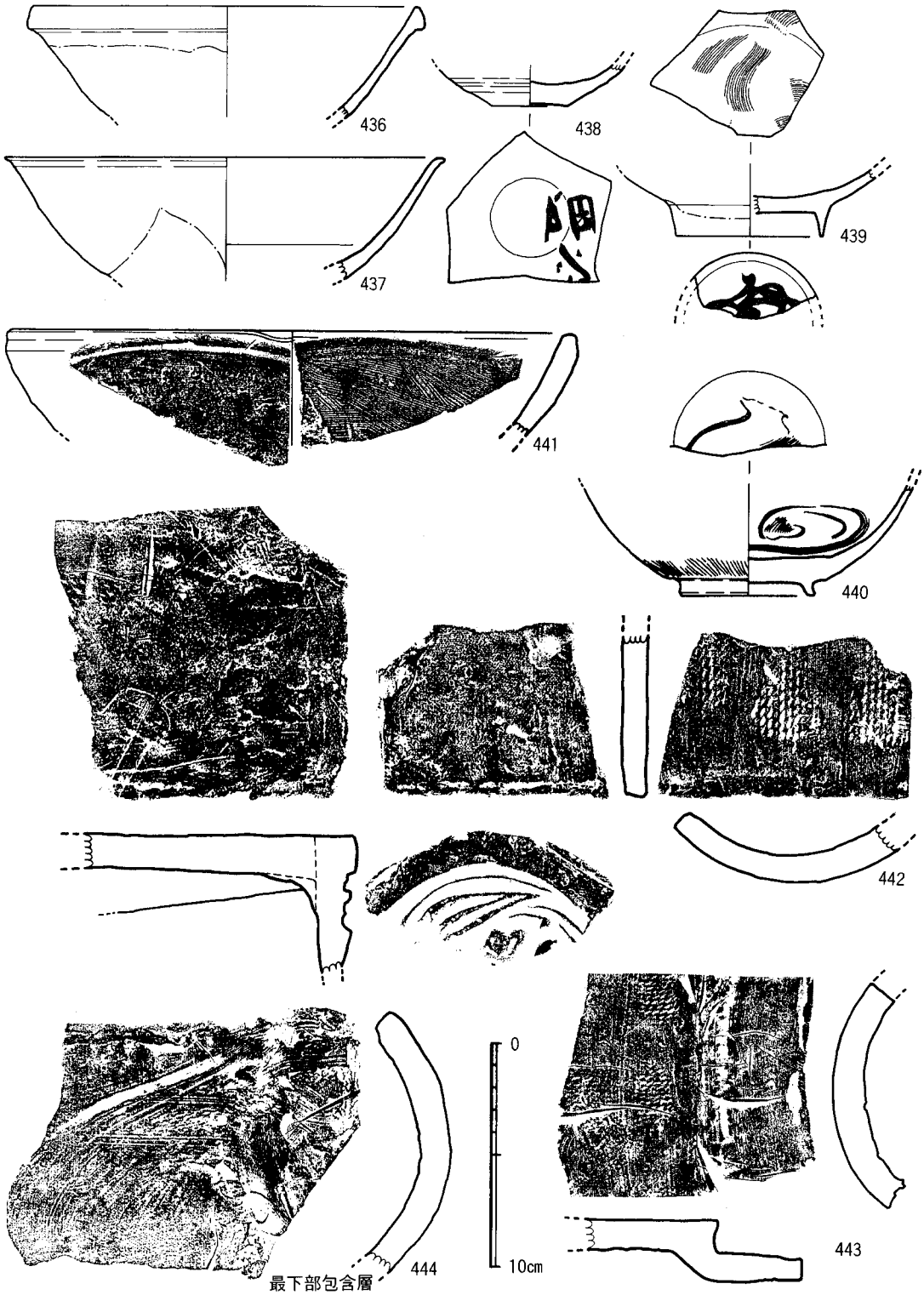


Fig. 71　第５層群上部（5ａ～5ｉ層）出土遺物

455の杯ａのなかでは、455が完形品で、赤褐色を呈し、体部上半を外反させる。451、452も口縁をかるく外反させている。これら５点の杯ａの法量平均は、16.3-12.2-3.4㎝であり、糸切りとしては大形である。456は瓦器椀で、内外面をヨコナデ調整後に磨きがみられるが、外面など凸部のみ磨かれ、凹部にはヨコナデ痕をのこしている。体部外面の下半はナデのみで灰色

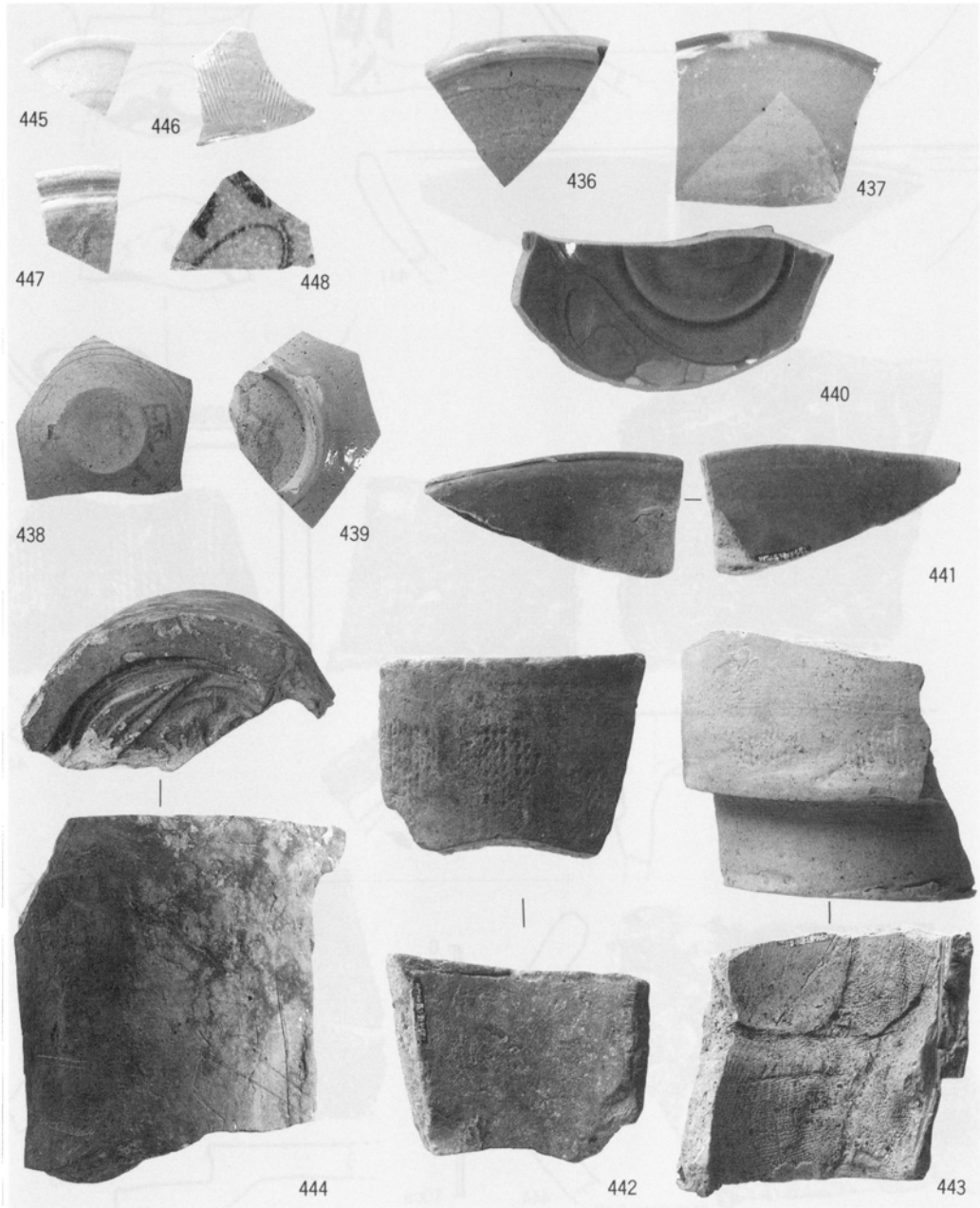


Fig. 72　第５層群上部（5ａ～5ｉ層）出土遺物

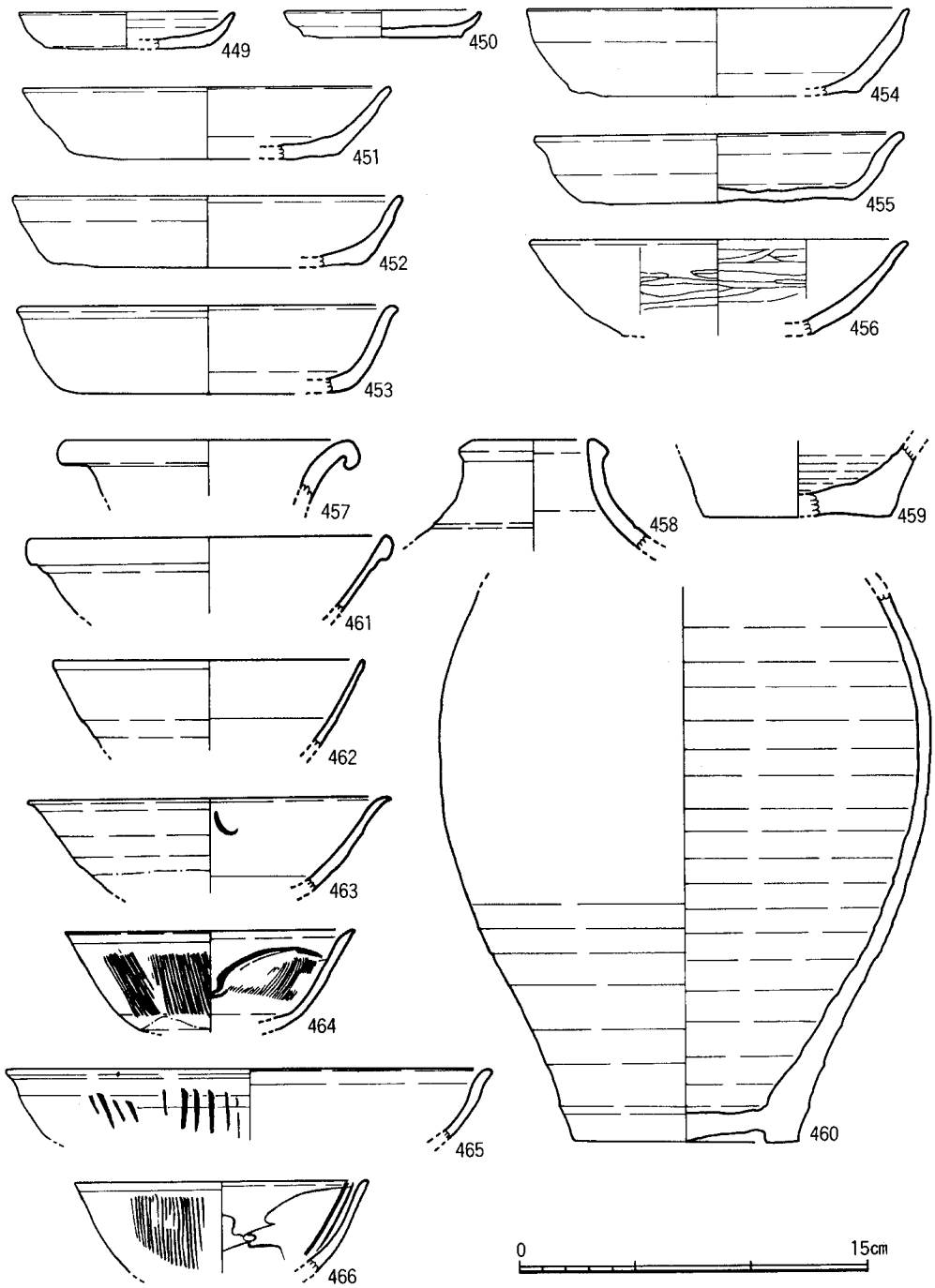


Fig. 73　第 5 層群出土遺物(1)

を呈し、その他は灰黒色であり、胎土は精製されており、つくりも丁寧である。

457、461～463、468～472は白磁である。457は12世紀代に多い四耳壺の口縁部の形態を示し、白灰色釉がかけられている。461は白灰色釉でピンポールが釉面に多くみられる。462は白灰色で氷裂がみられ、焼成がやや軟質である。463は口縁下に茶色の線文がわずかにみられるので、鉄絵碗であろう。腰以下は露胎としている。468は高台付の皿で、釉は青灰色を呈し、釉際が赤変している。胎土は粗い、ザックリとしており、高台はあげ底状になっている。469は高台付皿で、黄ないし灰色釉がかかり、内底は輪状に釉を削りとり、白砂の付着がみられる。外底は墨痕がみられるが文字ではないようである。470～472は同一形態の碗底部であり、470は露胎の外底に花押が記されている。釉はベージュ色を呈する。471は内底に櫛目文を入れるタイプであり、釉は灰色ないし灰褐色と斑らになっている。

464～467、473、474は青磁である。このうち467と474はあきらかに竜泉窯製であり、467の皿は緑黄色の透明釉が底部を除いてかけられ、内底には片切り彫り花文をいれる。474の碗は、内面に片切り彫り蓮華文とこまかい櫛目文をくみ合せており、竜東窯Ⅱ期に相当するタイプである。この２点以外の青磁は同安窯系製品とみられる。その典型的な473のようなタイプは、図示していないがこの他に11個体あり、この包含層中で占める割合は大きい。464はやや小ぶりの碗で、こまかい櫛目文がみられる。466も小形であり、内面を縦刻目線でわけ、弧線文を配している。465は外面に篦により粗い片切彫り縦線をいれるが、緑黄色の釉調は同安窯系製品に近い。

陶質の中国製品では、458は緑茶色釉が斑らにかかる長胴形の器形である。459の底部は焼締め陶で、内面は赤褐色、外面はレンガ色を呈する粗陶である。460は褐釉壺で、暗緑黄色釉が内面にも施こされ、胴下半は粗い削り痕をのこしている。外底は雑に高台が削り出され、露胎で赤茶色の土をみせる。475は緑釉瓶の口縁部とみられる小片で、水平に曲げられた口縁の内外に緑釉がかけられ、濃淡の斑ら状を呈し、一部は銀化している。胎土は褐色で軟質であり、黒い小粒が混入している。白化粧があるとみられる。中国製品と考える。

476は丸瓦、477は平瓦で、ともに凸面の縄目叩打をナデによりすり消している。478は軒平瓦の小片で、顎から瓦当面上部にヨコナデがみられ、下縁は指頭により波状形につくる。

遺構の時期　12世紀後半。

(8)　第５層群下部（５ｊ～５ｍ層）出土遺物（Fig. 77,78）　白磁、瓦、石鍋の少量の遺物を検出したが、青磁は含まれていない。486～488は白磁碗で、486の玉縁はやや小形であり、漸次大形化する傾向があるので、中形ぐらいである。487は内底に櫛目文をもち、高台が細く、高い形のⅤ類である。488は内底に輪状に釉を掻きとるもので、外面は腰以下露胎で、灰白色の胎土をみせている。489は縦耳の石鍋片で、外面は幅５ミリ程度で縦方向に削る。490と492

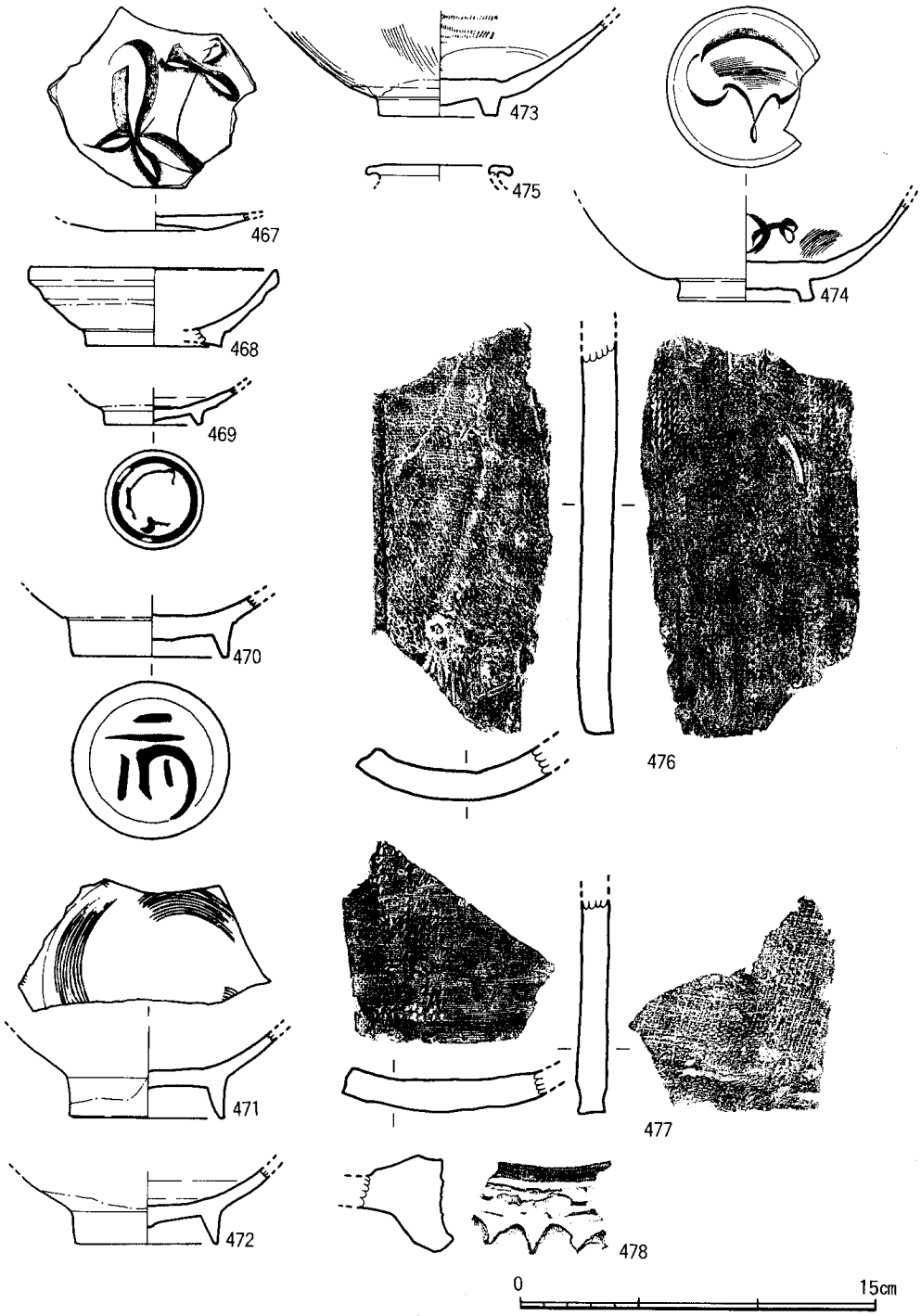


Fig. 74　第5層群出土遺物(2)

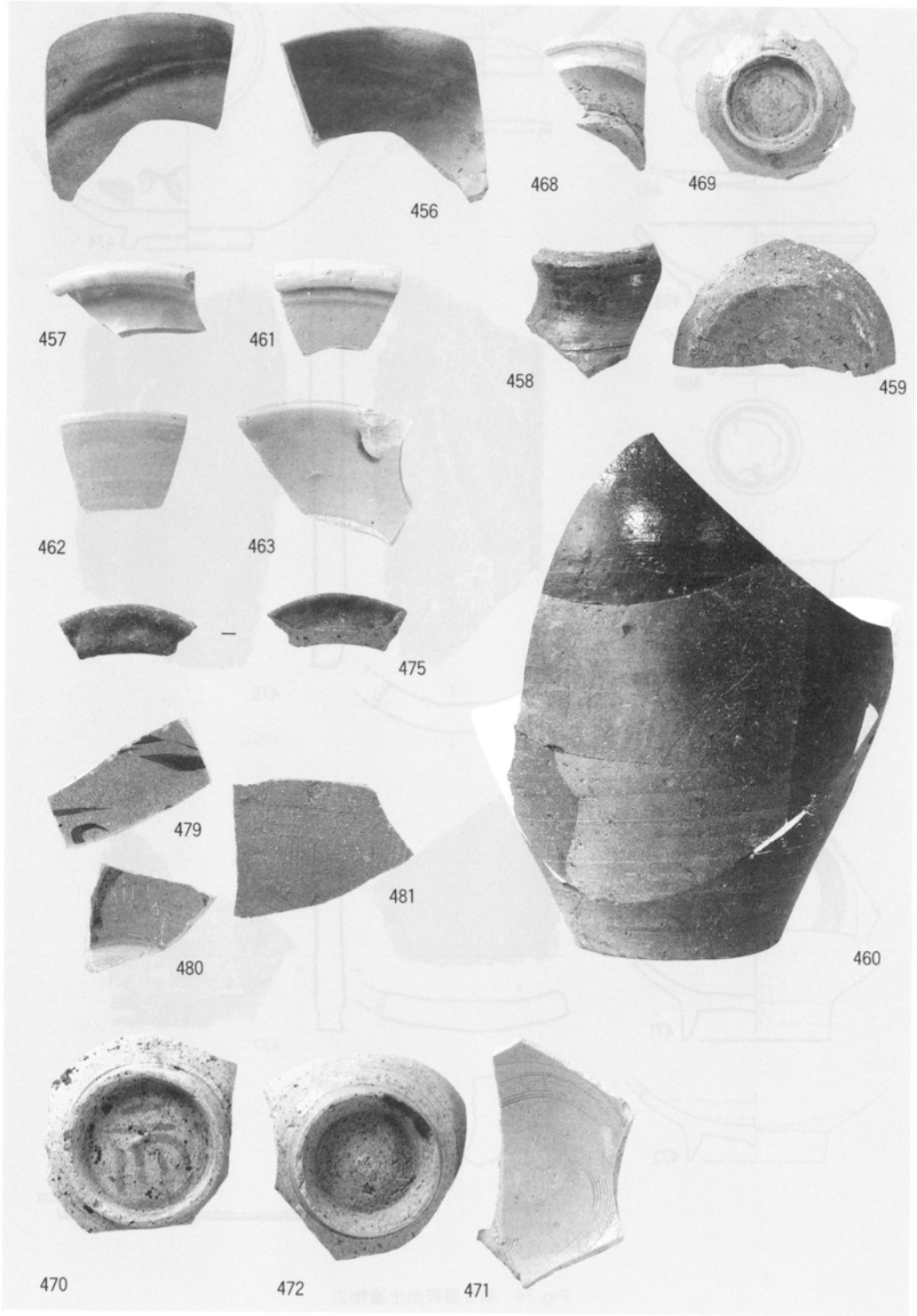


Fig. 75　第５層群出土遺物(3)　460のみ⅔大

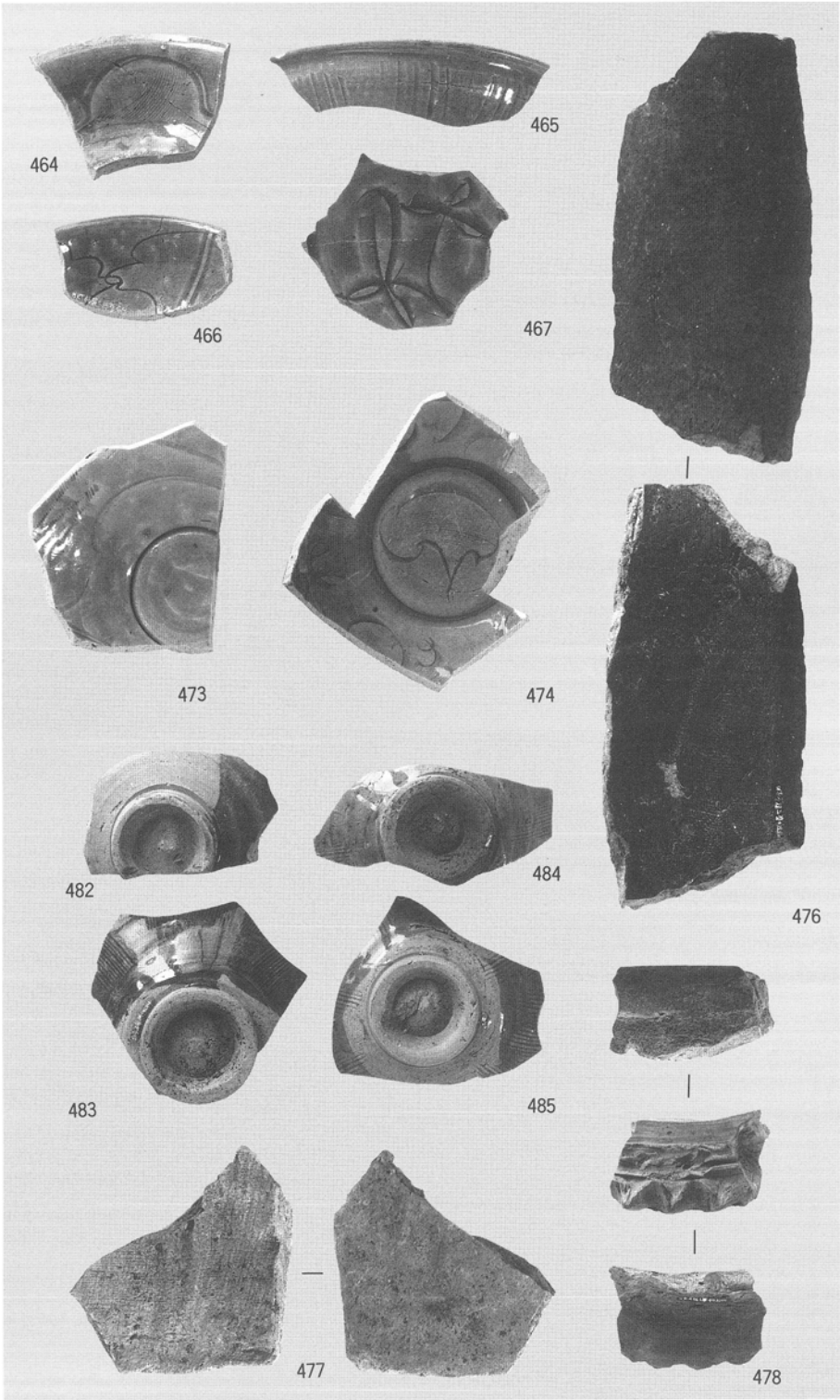


Fig. 76　第 5 層群出土遺物(4)

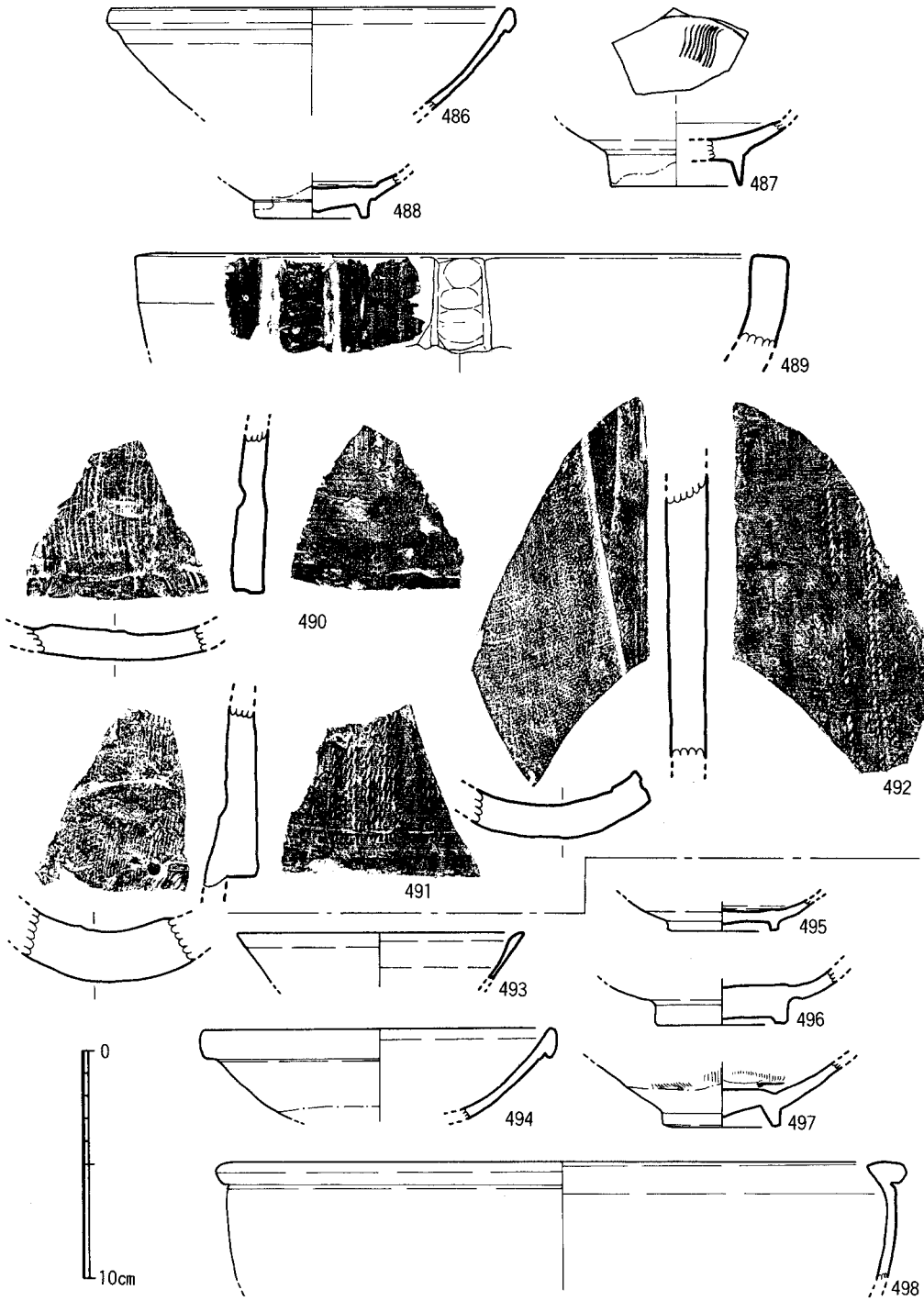


Fig. 77　第５層群下部（５ｊ～５ｍ層）・東側壁第５層群出土遺物

は平瓦、491は丸瓦の破片で、凸面はいずれも縄目叩打をナデによりすり消している。

この他に図示できない小片を列挙すると次のとおりである。土師器杯ａ－ヘラ切り２、糸切り７、同皿ａ－糸切り４、瓦質杯１、常滑窯製甕１、瀬戸窯製かとみられる灰釉甕１、須恵器杯

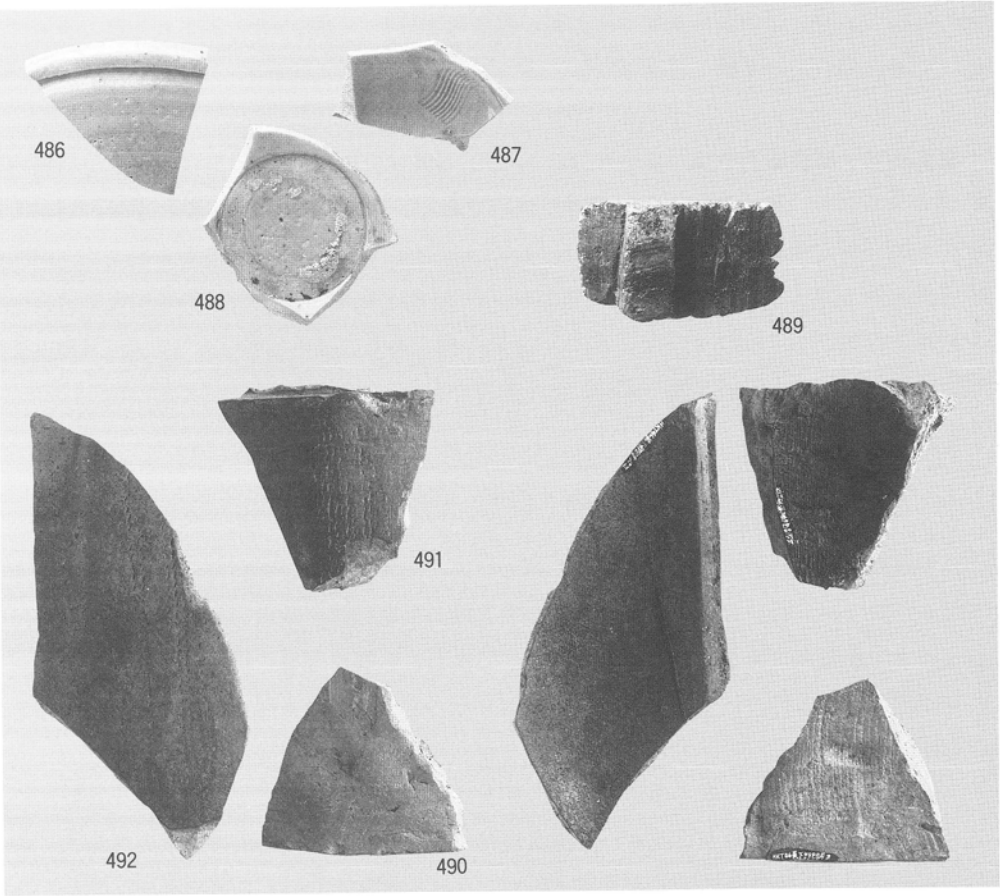


Fig. 78　第５層群下部（５ｊ～５ｍ層）出土遺物

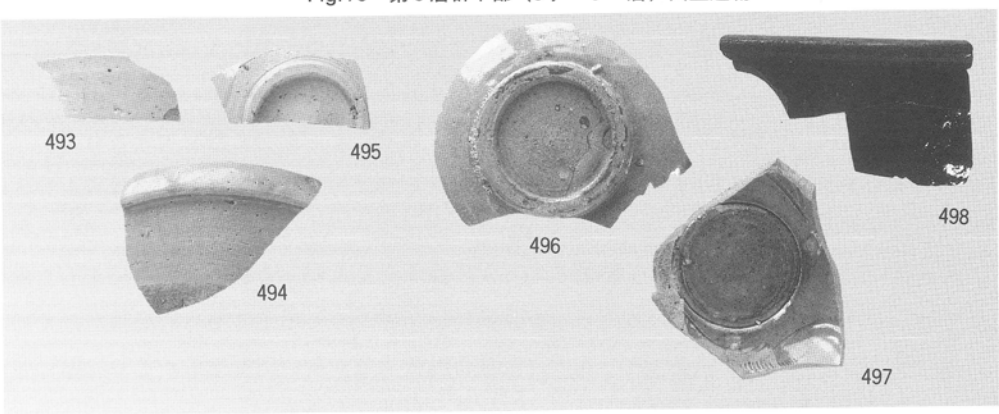


Fig. 79　東側壁第５層群出土遺物

身Ⅳ期１、滑石１、瓦25、白磁碗Ⅳ類で、図示した486と同形のやや小形玉縁５、Ⅴ類碗２、褐釉壺１、黄釉鍔盤１、黒釉碗１（匙口状）である。青磁は以上の50数片中に１片も発見できない。

遺構の時期　小数とはいえヘラ切り土師器が混じることや、白磁のみとみられる組み合せ等から推定して、12世紀前半期と考える。

(9)　東側壁第５層群出土遺物（Fig. 77,79）　493～495は白磁である。493は小形品で口縁内側を肥厚させており、釉はⅣ類碗などと同じ調子である。494は通有品であり、玉縁の幅が大形に肥厚している。白灰色の濁った釉がかけられ、ピンポールが多い。495は皿形品で、内底に輪状に釉を削るタイプ、胎土は白灰色である。496は竜泉窯系の青磁で、内外無文で、高台脇まで黄緑色の釉がかけられている。497は同安窯系碗であり、灰色に発色している。498は茶釉鉢の口縁部で、胎土はレンガ色を呈し、やや軟質である。

遺構の時期　12世紀後半。

第５章　まとめ

本調査区は対象範囲が狭く、また攪乱や調査技術の限界などのために十分な精査を行なうことができなかった。特に第５層群より下位の包含層は「息の濱」地域への開発の初現や内容を検討する上で重要な意味をもつと考えられた。しかし、軟弱な地盤に対して法面を保ちながらこれ以上掘り下げることは危険と判断し、湧水を始めた第６層群上面を確認した段階で作業を断念した。包含層はさらに下位に堆積していたが、今後の周辺の調査に委ねたい。

この地点は博多における最も海岸寄りの砂丘上にあたり、その中でも海側に面する斜面にあたる。土層の性状からみると、第６～５層群堆積時にはなお砂丘は形成段階とみられた。第４層群形成時以降にも前地形の傾斜が遺存するが、造成を繰り返しながら平坦面がしだいに海側に拡大していったとみられた。出土した遺物を検討すると第５層群に含まれる遺物は12世紀代に限られ、その中でも同層群下部は12世紀前半に位置付けられる。その内容も各種の陶磁器類などの他に多量の瓦片、人骨片が含まれていた。いずれも二次的に動いているものの風化の度合が少なく、該期には砂丘頂部付近に瓦葺きの建物、墓地などが存在したと推定される。

遺構面は４面を検出した。その時期は12世紀後半から15世紀代におよび、切れ目のない人々の生活を窺わせる。調査範囲が狭く、多くを語ることができないが、「博多浜」に劣らぬ内容を予測させる。今回は紙数の都合で触れることができなかったが、本調査範囲で出土した銅銭は336枚以上を数えた。このうち140枚以上が遺構内埋土中からの出土である。面積あたりでみると築港線３次、26次調査地点とならんで博多遺跡群でも最も多い例となる。これは厚い包含層によるところもあるが、この地点の性格を反映する可能性がある。

博　多　26

—博多遺跡群第46次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第281集

1992年（平成４年）３月13日

発　行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１－７－23

印　刷　ダイヤモンド印刷株式会社